

ん此物あらではとて走りまどひ、又同じ數求め出で調するほどに、いとにくし、かれ又窺ひ來たらん、さらぬ物にし構へ、ゆくりなく捕へばやと云ふ大かたは雲水にありか定めぬ心から、勇みがちにて、こゝよりとおこしき壁の崩れを、とほく守らへをる、おろかもののかくて在りとも知らで、はた這ひ入るすはやとてこゝかしこより走り出で、心合せたれば、たゞにとらへんとす、翅こそなけれ、ぬけくゞり飛び走り、誰もくゝおひうたす、されどいとせめに責めつけられて、物の穴より出でんとす、追ひつめて尾を引き足を強くとらへたれば、かしらを引きちぎりて、からは法師達の手にとゞまり、人々こゝろよげにて立ち別れぬ、其やがてに十二三ばかりの小法師の、いつのまにか松かいともして、三寶の軒にさしつくとする程に、忽ちめうくゝと燃えあがり、只今たゞ焼け亡びなんとす、御寺の人々、いかにやいかにやと慌てさうどけるに、くるはの内なれば、殿の人々のかぎり物の具とり、水はじきかけ、軒をくづし瓦をうちなどして、やうくゝに打ち消ちたり、小法師いそぎ捕へられて、何心してかく恐しきしわざはすると責め問へば、老和尚のしか物せよと仰せたぶまゝに、かくはせしごと云ふいとあやし

けれど、召し出でて問はするに、一言だも答へ給はず、我あやまちぞとおぼし定めたるつらつき也、かうの殿もたふとくかしかせ給ふに、いかで此日比物くるほしうもおはさゞりしに、いはれこそあらめ、猶問へと仰せ承るものゝふ達、かはるゝ言をつくして求むれど、たゞ木に作りたる如くにもだしてのみおはす、罪せんや、許してんや、御心惑ひしておはすほどに、たが告げたりけん、長門どのの聞しめして、かかるくせ物をくるはの内に住ませしは、いとも淺はか也、いそぎしをり殺しても言はせよと、御使しきり也、今はすべなくて、さまゝさいなみ問ふ、角ある物の上に居らせて、磐石を膝の上に三つまでおかせたり、七十に餘る老の何かは堪へん、目口鼻より血流れ出で、つひにめくら者と成り給ひきいと悲しとこそ見れ、かくてだに一言をもまじへ給はず、息も今はたえゝ、也此うへにはとて、大庭を掘りて、炭たき木焼きほこらせ、それが上に黒金の橋をかけて、是渡らせんとし構へたり、語るだに聞くだに魂も身にそはず、恐しく淺ましき事のかぎりなりけり、さてこゝに引き立て來て、しかくゝ行ふべく云ひ聞かすに、たゞ答へ給はず、ほの氣はめうくゝと立ちのぼりて、あたりだに近づく

べからぬを、一足も堪へんやは、こゝにおりあへる人々も、かうまではいか  
でと、息をつめ、黒き汗を流して悲しがる。かうの殿はしの間に、出で給ひて  
いかに苦しうやおはさん、頼みてむかへ奉りしに、引きかへ、かうためしな  
きわざしてさいなむ事、心の外なりとはおぼしも知らるべき、たゞ毛利の  
大とのの強ひて言はせよと、御使日々なり、此度答へ聞えずは、御身はもと  
よりにて、長門周防の國の中には、雪洞の法のもとし、火もふつに消ちはて  
よく問ひはてすは、我家の風をも吹かせじと、うちく思し定め給ふとも  
承りぬ大と、この命一つ惜ませぬ事さもあらばあれ、多くの罪を道にも國  
にも及ぼして、何にかは佛の教へにはかく心こはきためしやある、いで聞  
き侍るべしと、すゝろぎて聲あらゝか也、こゝに大とこはじめて口を開き  
重き病して苦み受くると思ひて侍れば、此日ごろ堪へ忍ぶべきに侍り、命  
めされん事は、老の末の齡惜しとも思ひ侍らず、又兩國のあひだに法の光  
なからむ事も驚くべからず、かく四大洲にみちくして、照さぬ隈もあらね  
ばしばしの御いかり休むるほどにてこそあれ、たゞ此御國の禍と承りぬ  
るこそ、いといたう悲しく侍れ、こゝにおろかなる願の侍るを許させ給は

んにはと云ふ、かうの殿、何事にまれ、かゝるきざみに承はらでやあらんと  
くと聞え給ふ、さらば御よはひのかぎり物の命を絶たせ給はらずはと云  
ふ、さるやすき程の事やはある、など辛きめ見せぬうちに言はざりつる、い  
とかたじけなし、今は世に思ふ事侍らすとて、四句の偶高らかにすんじ終  
り、物見せ奉らんとて、前なるめう火に臨みて、口を大きに開き、をゝと叫ば  
せ給へば、あやし、からのみとやめたる狐の、かしらをめう火の中にはき入  
れ給ひぬ、かうの殿をはじめ御まへにある限の人々、目を見はたかり口あ  
くまであきて、いと怪し、あなたふとしなど、口々にさゝめきあへりけり、事  
のすぢ今はあらはにて、大とこ罪をまぬがれ給ひ、若き法師達のし出でし  
あやまちも咎め給はず、狩などおぼしたゝせずて、かれらも命またく事は  
てぬ、大とこ今はこゝを去りて外に移り給へりき、毛利の大とのも、かれに  
近よられし事を恥ぢ給ひぬとなん聞ゆ、かのむくひするもの等、おのがあ  
しきを思はで、人をたばかり苦しきめ見せて、心ゆくとするや、それぞおろ  
かなる限なりける、いとあやしき山がつ等も、かゝるきたなき心はもたら  
ぬなん、人ばかりうれしきものはあらず、彼の四句の偶は、空には思ひ出で

すとなん語り給ひきいと目ざましうたふとき御物語なりけり。  
 御寺の内にはひまつれる北野の大神は、我難波のうぶすな神にてまします。このみ社の御徳高くましく、日照に雨を乞ひ奉り、身のわづらひやらはせ給ふなめり。何くれのくすしき事どもを、寺主の語り給へり。こゝに日ごろ在りて、目のいたはりするを、けふまでねぎ言怠りし心おそさを悔ひつゝ、朝夕にぬかをつきては、あしたのみ霧夕べのみ霧を吹き拂ふ如く、朝日の豊さかのぼりに物のあやめ明らめさせ給へとなん乞ひ奉る。さるはきざみて散らしたいまつるべき色あひの物も、たらねば、いときたなげなれど、おのが心なりとて、松梅の歌五十首よみて、大まへにさゝげ参る。こはしるしもとやめぬは人に語りなぐさまん事の、けがれが上のけがれなるをおぼししみて侍ればなり。

御年一米

みな月つごもりがた、むら雨一日ふた日降り過して、秋の初風涼しきあした、此里の人々御年おひ榮ゆるん事を喜びつゝ、我やどりをもちこし人の雨を喜ぶと云ふいほりになすらへて、人々あつまり、一日遊びの、しるに、何くれの事をかとはかり合はするに、あるじの、給はく、前栽の花々合せ

桔梗きぢやう

んにはと、それいとをかしの事也とて、さましく、花がめ取りなべつゝ、露打ちそゝぎ枝たわめなどして、さし入る、めづらかに心ゆく遊びなりけり。其くさく、や夏秋のけちめをいはで、おのがまゝに咲きほこりたる色香の同じからぬに、昔のくれのあやのはどり等が、たてぬきのあみにも、まことの色香はひときは匂ひかにこそ見ゆめれ、萩の花のや、綻びそめし、きちかうは言がら唐めいてこはく、しけれと蟻の火吹と呼ぶ名のいとむつかしければ、歌にはまねぶべくもあらず。白き蓮の花さゝげ出でたるは幾らばかりの城にやかへん、無價の寶珠など云ふは、是をこそと覺ゆれかきつばたをり過したれど、猶色あひは上なきつかさ人の、袖たれておはすらんこゝちせらる。一日の榮えの朝顔と云ふは、奈良の都人の秋の七くさとて數へしは、もくげてふ花のうへをいふぞと、物知の翁はいはれたり。けにこしの花はわざとめきて垣根に這ひまつはせたる、是がおのがまゝにあら野には咲き出づるくさはひならずと云ふ、むべもさるべくこそなでし子の花、唐やまとのくさく、今は世に多かめれど、古き歌にも物語にも見えたるは、岩はしのひまゆく水もかれく、なるしらまな子の中より、なよ

はたりやせし  
はたりやせし  
はたりやせし  
はたりやせし

びかに咲きよらほへるをむかしはとりはやせしたりな是が一つの名を  
とこ夏と云ふは夏より咲きて秋の七草の一つにも數へられ神な月のこ  
ろほひまではつゝ咲き残りたるをいふと聞えたり後撰和歌集更科の  
記などに此花のいとちかぢながら冬まで咲き匂ひたるを書いしるされ  
たりしのすゝきの穂にはまだ出ねば尾花とは誰もいふを袖うちふ  
りて人招きたらむ秋の末野のあはれ忘れんやは男をみなの花ざかり見  
にと大伴の中納言のよみ給しはかのくねくねしき花にむかへて是をな  
む男花とは云はれしとも聞ゆ野山に恐しき物の尾ふり立てたらんがさ  
まに似たれば大かたの人はさるかたにのみ心えたりけりかのをみなへ  
しを蒸せる粟の如しといひしは文字のあやまりたるにて何がしが璧の  
賦に黄なるを蒸せる粟のごとしと有るを是見たがへし也とは江帥のこ  
とわられたるしかるべき事になむおぼゆ彼の粟はむさずとも黄なるを  
や菊は唐よもぎと云ふ名歌にはよまねばこもこはしけれど誰も誰  
もたのしにはいふめり此花や今の都のはじめもろこしより渡せしと云  
ふは誰もしか心得たるをしかすがに秋の山路の露霜に立ちよらほへる

蒸せる粟  
源順の和  
花の色如蒸  
粟俗呼爲  
女郎

つぶれ  
僕仕

源博士  
源順の和  
名抄をい

が花に似ぬ香のいきゝの袖にうつすばかりなるは此御國にも久しき代  
より有りけんが形のわびしげなるにとりめでたる人もなかりしならん  
よめが萩の花今もつみはやしてめづる人なき一つたぐひにもおぼさる  
此くさぐさはいにしへよりあて人の言に打出でさせ給ふためしのおれ  
ばとて人々題にわかつてよみなんと云ふそれがあまりなるも色香など  
や劣るべきだんとくと云ふは御佛の葉つみ水汲み薪こりてつぶねせさ  
せ給ひし山の名にやおぼゆれば御寺にはうつし植ゑらるべきくさはひ  
也射干をからす扇とは源博士のしるされたる是が實のいと黒きをばぬ  
ば玉と云ふぞと古ごと知りはいはれたりこは萬葉集にしか書きたれば  
よんどころたしかなるを漢の馬援と云ふ人の薏苡の實を七車に積みつ  
らねて夷の國よりもて還りしなどをむかへて野の眞玉とは是かなと云  
ふ人もありいにしへ人の文字を物にあてたがへけむ事少からねどこち  
たく今はいふまじきものを楡扇とよぶ名も形もてあだくしからず秋  
海棠は花の色春咲く物にをさく劣らぬを誰が名づけむ木は花のの  
ち葉のあつこえ黒みつきたるを見れば此植草の葉はひろらにくく立の

すめみま  
皇孫

にほびかにて勝りたりとは人も見るがに、鶏頭の花は莖よりして、いとたけく、しく、養ひえては猿田彦のすめみまのみさき追ひて、つきならし給ふ玉鉾などは、是が形したらむ猶多かめれど、から名やまと名のまさしからぬをばおきぬべし、茶かきたて餅くだ物くひつみつ、日ねもす遊び暮すなん、山里のさふん、しさも忘らるゝ、篋子にゐざり出でてさしあふげば、伊駒高根に雲も居ず、さうじ明けわたして見渡せば、草香江の澤田はろばろと青やぎて、鳥の音はこの岡の松のむら立に、枝うつりして、轉りあそび、草むらにすだく虫のねの心細氣ながら、いとなつかしうあはれに、かれも是も我を慰むよとおぼし喜べるにも、たゞ春の霞秋の夕霧ならで、物のあや定め難き一つなんみそかにうれふ、こや人知らぬ身の秋なりける。

萩

祖 盈

棹鹿のまだき聲せぬ秋の野に、匂ひなつかし萩のはつ花

はちす

吹く風に露もこぼさで、蓮葉の花に朝日のひかりまばゆき

すゝき

公 み ち

たれをかも松の木陰の花薄、まねく袂にかよふ秋風

かきつばた

かきつばた手折る袂の露にさへ、こき紫の色ぞうつるふ

朝 顔

常 之

日影さすにほひもはかな、中垣に露おきまさる朝顔の花

とこ夏

夏草にまじりて咲けど、撫子の露に秋そふ花のさかりは

き く

紫 蓮

山ぶみの家路のつとに折りてこし、香をなつかしみ白菊の花

きちかう

秋ちかう成りもゆくかな、故郷の野らにと宿を住みはそめねど、

をみなへし

むらさめの後のあしたの女郎花、誰に別れの露の涙ぞ

重正けふ來たらず、歌よまぬ人々も、花には心つくしにて、立秋の歌

秋立ちてまだき戀せぬ袖だにも、鹿の花妻露にぬれつゝ

秋成道文

秋のあつさを

天の河やすのわたりの安くとも、あふ瀬をいかに夜さへあつきに。

秋たちてさすがにさふぐしき夕暮、人々訪ひきて歌よまんと云ふ翁まづよむ野の鶉を

御狩野はきのふと過ぎし草むらに、いづちのがれて鳴く鶉かな。

又古寺の秋と云ふを思ひめぐらすほどに、ほとく眠りにつく夢ごこちに見も知らぬ所にさまよひきぬ、大きな柱うつばりめく物の焼けたゝれたるが、いくら打倒れかさなりあひ、瓦あまたわれ砕かれたるに、したゝかなる石すゑ石垣なども、焼けに焼けていたう黒みつきたり、芝生草むら木立なども情なく、灰うちかづきて、時をもわかぬ見る目の淺ましきよ、虫の聲さゝやくばかりも聞えず、こゝいづこならむ、初秋風はさすがに袂さむからねど、いとまさまじさに物悲しうおぼゆ、焼けほこりたる物の下より、蝦蟇かきの大きなるが這ひ出て、そこらゆくりかに歩みありく、又同じもの、是はすこし小さきが、かなたより歩み来ていきあひたり、翁こそかしこくもいづちにや這ひ隠れ給ひけん、かうたいめ給はりつることのいと

此一節は古寺の秋と題して、たつと題し、たりに取らぬ

もかたじけなきと云ふ、わかき者よ、優曇花にてありつるな、いと喜ばしきと云ふ、あなおそろしの世や、かゝるめ見つるは身幸ひなし、いかに成りぬるはてぐぞと打泣きて云ふ、さかし、一劫とて灰に成りはつる世がたりのためしにや思ふらむ、翁が親おほ父の其さきのみおや達より、此野に住みつきたれば、こゝの古物語のみは聞き傳へたるを語りて聞すべし、こゝはそのかみは何の見どころなき山の麓の原野にてありしが、村上のおほん時に六道の能化の菩薩を祭りて、六波羅寺となん名付けたる、今も六波羅密寺とて觀世音の道場たゞせますは、般若波羅密といふ事の由もて呼ぶべきいはれの有るなるべし、白河院の御願によりて、平の忠盛と云ふ人奉行し蓮花王院を建立まします、今も此南にたゞせ、ます御堂は是なりき、忠盛の子の清盛といふ人こそいみじき幸ひある人にて、此野にきらきらしき館を造りてをる、信賴、義朝といふ人々きたなき心を合せ、帝をさしはさみ奉りてほしいまゝなりしかば、帝みそかに女房にやつさし給ひて、こゝの館に入らせたまひしによりて、仇の軍瓦の解くるが如くほろびたり、平氏の人々は是に勢ひを得、はじめより門のかぎり高く造らせしにはあ

國泰院  
秀吉

らねど、遷幸のかたじけなきを家のほまれとなして、天の下のつかさ人は  
 高き卑しきをいはず、ことごとく腋門より出入せさせ、おのれは太政大臣  
 の上なき位を極めしが、代かはり時のゆければ、わづかに三十年を待たず  
 して、御館跡なく亡びぬ、其後國泰院の御願にて、此方廣寺を建てられ、繼で  
 は阿彌陀が峯の御席をなん造られたる、すべて此野は本草は七の寶の花  
 をさかせ、いはほさゝれまなごも玉の光にまばゆかりしとなん承りつる  
 それだに御代改りては取りはらひ掃ききよめさせ給ひて、かたばかりの  
 神垣とは成りぬ、御寺も此度を三たびの災ひにてなんと聞えたるはまこ  
 となるべし、かく昔より事改り物變るとは、知る人も知らぬ人も今の災ひ  
 をなき事のためしに歎き惑ふよ、目を閉ぢ心をいにしへに立ちかへして  
 見よ、もとのあら野のさまもて見れば、何を悲しともはかなしとも歎くべ  
 き事にもあらじとおのれは思ふを、昔も無きこそもとの姿なれと、よみし  
 人も有りや、例の翁が僻める心からにやあらん、人と云ふものはいとも  
 ほしきまゝに物はいふぞとも聞きぬ、おのれが親の代の富み榮えしを今  
 の衰へに思ひあはせては、ひた歎きして死にもしなましと云ふとぞ、いと

公慶上人  
元祿二年  
間大佛殿  
しを再建せ

おろかなる事なり、其親よりさきくゝの世には、いかにわびしかりけん世  
 もありつらめ、それ見知らぬものにのみ言ひて有るぞ、いとたてき事と  
 かしこき人まして神佛などはあはめ憎ませ給ふを知らずかし、このほろ  
 び給ふも二たびの御影にてましませば、やがて又造り改めさせて昔にま  
 さるきらくし、さも拜み奉らむ時世の出でくべし、奈良のふる里なるも  
 みちのく山に黄金花さきし御代よりは、治承永祿の二たびの災ひにかゝ  
 りませしを、時あれば今の結構に立ちかへりて拜まれさせ給ふなりけり  
 龍松院の公慶上人の御いさをし俊乗坊には、踰えさせ給へりとぞ、されど  
 かゝるみ山はかりの堂舎御佛造らせ給はん事夕べあしたなるべからぬ  
 は若き者よ、しばしも野とならば鶴となりて鳴きをれと、まめやかに物語  
 して、又草むらに這ひかくれぬと見て目さめぬあした都の使を聞きつれ  
 ばうたて見つる夢かなとて、歌はよます成りぬ

七日夜

あまの河浪たかゝらし、夜ごもりにかへすはすべな明けはおも無み

野の萩

萩が枝の末はさゞれに流れあひて、波も花なる野路の玉河、

路邊虫

虫のねのさかりの秋に草分けて、野路の棚橋いくつこえけん。

海上霧

伊勢の海や霧にわかれて朝なぎの潮氣の烟沖になづさふ。

十一日、きのふ夕つけて雨ふる、午時に晴れぬ、里人云ふ是や錢米のふりたるなり、野わきだに吹き荒れずはと、竹のねぐらの雀をどりして喜ぶ、あやしの小家どもの垣根を過ぎてかたり言を聞けば、この雨よ猶ふれかし、田はた大かたにゆき足らひたりとは見ゆれど、翌あさての程やせき入れ切りとほしなど、露のいとまあらむやは、我等に預け作らしむる里長たちのゑみ誇りたらんが中々につらくし、年やがて暮れぬべきを、今より思へばしもと振りたててさいなまれん、淺まし世やなど、おのがとち／＼いひ歎きつゝして、飽く時しらぬ氣なるこそ、いとあはれむべけれ、さこそいへ、孟蘭盆來たらば躍り遊ばん、秋の祭には物貪りくらはんなど、是打頼みつゝ、有りぬべし、背長き鳥のたぐひに言はるゝは、さるあたりの人心なり。

此一節中  
秋の題に  
ついでに  
冊子に在

けり、しかすがにしれ人のいひ言は、神も罪ゆるし佛もあはれと見つき給はんものぞ、たゞ錢の神ばかり塵もつかじと寄らせ給はぬきざみなりけり。

十五日、人々あしたを待ちてつとひ來て、けふの空の清き事よ、暮れなば月の遊びせん、翁の旅寝も中秋まではよしおはせじ、けふを其日に歌よみて聞せ給へと云ふ、ひとり云ふ、月の歌さき／＼承りぬ、文をこそといへば、例の尼筆とりて、月大江に湧きて流るゝと云ふ句の心をといへば、かしこまりぬといふ、あき人の物うけたばるやうにて。

八月十日、まり五日、あしたより空いとよう晴たり、ふる郷人誰かれこよひ月見むといひかたらふに、野や分けなん棹やとらせんなど云ふ、翁今は都住に野山の秋ともしくもあらじ、只みをつくしのほとりまで漕がせんに、はしかじといひ定むる、かろらかなる舟もとめて、酒茶よき物などは調へたるべし、五百津舟つとふ中を漕ぎそけて、河尻に漂ひ出でぬ、月はやく伊駒峯にさし出でたれど、夕潮満ちたゝへたるに風そよめく、芦の浦廻きたなくもあらず、武庫の高根は入口の匂ひ残りて、西の海づらはろ／＼と見



渡さるゝなりけり、帆手打ちつれて入りくる大船、いざりすとや漕ぎ出づ  
 るちひさき舟、秋の木葉の亂れに散り浮きたり、鴉のいづちにか時定めて  
 飛び歸る空、鷗のあさりすとやおりゐる渚、さしくる汐の波がしらに躍れ  
 る魚の光は、昔もあまたゝび見しを、此ゆふあそびぞはじめなる心地なん  
 して、いと楽しげなるおのれよりさきに浮べし舟、あとより追ひくる船、み  
 な千里の外に心を遊ばしむとぞ見ゆ、絲あり竹あり、しらべいとおかしう  
 て海の神をも驚かしつべし、月は花やかに澄み渡るほど、宮人のかくるた  
 く領巾ばかりの雲もなびかず、星の林きら／＼しけれど、今宵の光には負  
 けたりな、風いさゝか吹きいで、波のあやいとよう見きはめたり、暮れは  
 てぬれば、めぐれる峯々はいと暗うなりて、淡路の島はさすがに見えず成  
 りぬ、友垣ひとりがいふ、こよひの遊び誰も／＼心隈なくこそあれ、唐うた  
 やまと歌きたなげなりとも、うめき出でざらめや、翁まづよめと云ふ、あひ  
 なの言や、昔の貫之躬恒等にあらすば、今宵の影にいかで光争ふべき、洞庭  
 西湖に漕がれ出でん人の棹の歌も、酔のすゝみにこそは誇りかにも打出  
 づべけれ、翁が木の芽煮てはかなうすめる心に、何事をかまなび出でん、舟

棹にさば  
 る上方の月  
 の久舟のり  
 こく舟のり  
 淀のわ  
 りづ方見  
 いづ方見  
 鳴きて時  
 鳥のの  
 だり深  
 に夜深  
 きま  
 まし秋  
 人寒朝  
 の寒さ  
 の聞こ  
 らん君  
 衣かさ  
 しなま

のよそめばかりに、歌や文やはかなうあそぶらんと、見おかせたらんをほ  
 まれにしてや、やみなまし、此さしあふげる影にも面ふせつべきわざにこ  
 そといへば、ひとりが聲高らかにして、棹にさはるは桂なるべしと歌ふ、淀  
 のわたりの夜深き一聲のためしに、是をあはれがりて人々よますなりぬ  
 月は中空に照りかゝやきて、晝よりもけにあか／＼と澄みわたり、常世の  
 まれ人のかり／＼と鳴きて來たるぞいとめづらしな、海の色は青にびの  
 きぬ引きはへたらむ如に、さすがに風ひやゝかなれば、きぬかさましを  
 言ふべき人も無きわたり、今は飲みほしくひみちて、かたみにすゝる寒  
 くかへらやと、舟ばたを叩きて、楫取にうたへといふかれも酔ひたればに  
 や、棹の歌いとおかしげにうたふ須磨よりや明石よりや吹く西の風に誘  
 はれて、漕ぎもてかへる程に、夜は丑三つばかりにや成りぬらんかしと云  
 ふ  
 森の家の前栽の花まだ咲き出でねど、歸らんかたみに詠みてよと求むる  
 まゝによめる、

千種にと養ひたてし園の菊、香は人なりに匂ふものかは、

河澄の家を棲鶴樓と書いつけて、あるやんごとなき御かたの御筆こひて  
あたへつる、それがついでに求めつるに、

九つの澤にあそべる芦たづを、夜は宿れとて松は植ゑけん。  
うゑしは曾我君の風流なりとぞ。

十七日、けふ尼のいほりに歸りぬ。都へ便あらばいひおくらんとぞ思ふ。  
身の秋にそことありかを定めねば知らじな人を賜の草ぐき。  
いねがてなるには、

松風を笈の水に音かへて、秋の夜すがら聞きあかしつゝ。

山霧立ちさふるまなこには、人にかゝせつる水莖の跡の老がぬか齒もる  
ゝ言は、聞きもたがふらんかし。とまれかうまれ人の見給ふべきにあらね  
ば。

寛政十年の夏、さつきの廿日、まりよりふん月のつごもりがたに至る  
までを、日なみのやうに事どもをかいしるせし也。

花 蟲 合

岡の松風吹きおちて、やどりの前栽の露おき亂るあした、例の尼とむらひ  
來りて、今日も長居の浦遊びしてかへんなんなど、尙いざよひおはせり。そ  
うの人の家もこゝにあれば、月傾くまでととむ歌よみて聞かせ給はん  
にはと、いとめづらならぬ事も、もとのまゝにといへば、はやも筆執りて  
畏みをる。八日の月花やかにさし入りたり。垣の内外の草村にすだく蟲の  
聲々なるこの折にこそ、前栽のくさく、合せてん花を左に蟲の音を右に、  
くらぶの山路たづく、しくとも、昔の源大夫がみやびには倣はずともと  
て、つぶく、と云ひ出たる、まことの色音にはいかでも。

七番第一

左 はぎが花

右 日ぐらし

あそか風秋は色にぞ吹きこゆる、ゆきゝの岡の萩の花見に、  
身の秋を思ひくらしの森陰に、慰みかねて音をや入れぬる。

風の色に吹くといふ詞、おく露の淺からず聞ゆ、右のおのれ戀みかねては鳴きやむかといふ、是は寂しく彼は花々し、心うらうへにて持とや人もさたし給はんといへば、尼うなづく。

萩原は色にこそ吹け、身の秋にしむばかりなる夕風の音。

飛鳥のゆきゝの丘に咲きか散りなん、見る人なしにとは、藤原奈良の都人の故里をしのべる歎きなるぞ身にしみて覺ゆ、そのいきゝの岡は、今、岡寺の立たせるあたりにや、萩の花古くは秋牙又芽子花など書きたれど、天竺花胡子花ともいふ方とぞ、近頃搦りて試みしに、よく染みつきて、まことの色よりも、一きは花々しくなんある。

左 をばな

右 すゝ蟲

野邊ゆけば尾花吹きそよぐ秋風に、月影ほそし西のゆふ雲、月てらす露のうてなに遊ぶ夜は、風すゝむしの聲さかりなり。

昔は紫宸仁壽兩殿の間に、露臺を築かれしと聞く、さる御あたりは思ひかくべくもあらず、此歌は廣き庭もせに夕涼とる夜ごろ、鈴蟲の音

盛に振りいでたらん月清き夜の遊びと、野分聊かそよぎ立つ夕暮、秋さり衣の肌寒きに、尾花吹き靡ける風の末見れば、三日四日の影織々と西に落ちたる空の、是もさうぐしきとすがくしきといづれならん。

夕暮をあはれと思ひしめるより、秋には誰もまく心地して。

左 くす花

右 松むし

水たまる池の堤に這ふ葛を、何の花ぞと人の問ふなり。

はなたれし庭の籬のひまもれて、弱るか野邊の松蟲のこゑ。

夏葛の秋かけて咲くを、かれ何と大方は見知らぬなるべし、右の松蟲の籠を放たれしが、いつのまに籬の外野に、いと細うかれぐなるが晝も鳴くは、秋の末になりしあはれなり、心深きばかりにはあらずとも、悲しとは此頃なるべし。

左 なでしこ

右 きりぐす

濃さまさる秋の野もせに、ひとりのみ薄くれなるの大和撫子、  
蛭わが牀ちかく聞ゆなり、こよひや秋の霜はおきけん。

後撰集に神無月の比、撫子を折りて隣へおくと見え、更科の記に冬  
までも咲き残るをいふ、水かれし石川の岸のさやれに生ひまじりて  
よろほひたらん、盛の時よりはと眺むるも、やうく花の皆うつろひ  
果てし頃までもある。うべ常夏とも呼ぶべかりける。

右 蟋蟀牀に近しといふ古詩の心を、秋の初霜やおくといひそへしも  
て、解き洗ひ衣の新袍を授けらるゝとや、見ん心地せらる。

左 をみなへし

右 馬追むし

澤水に老の影見るをみなへし、した葉はかくも紅葉しにけり。

旅籠馬おひこしゆくか鈴鹿山、夜半の道芝露ちりみたる。

葉のもみづるまで野に立てりとも、駿馬の骨にはまさりたらめ。

はたご馬、かげろふの日記にか見ゆ、鈴鹿山ぬて振りたて、夜はに越  
ゆる草葉がうへ、いかに露深からん、蟲の音には似つゝもあらねど、歌

は詞のよせに引かれて、あだくしき方になりもて行くが多きを、い  
かで誠の道とはいふ。

女郎花、稻おふせ鳥は、唐名知られぬよしにいふを、敗替とかいふ物に  
後の考へにみえたり、猶あたらぬはいかに。

左 藤袴

右 かはづ

藤袴あまりに色の浅ければ、香ごめに誰か野には捨てけん。  
むすぶ手に寒くなりぬる泉川、いつ秋の來てかはづ鳴くらん。

蘭とさし蕙とあつる、共にたがへる、枯死していよく、かんばしき物  
を香草といふとぞ、色は誠に見るめなきは、髭むさくしき君の□衣  
くんえのたぐひを、常に服用せらるゝ、思ひなんせらる、秋を時となく  
も、春のなかばより聲ふり出たる面白さを、聞き知らぬ人の怪しむら  
ん、吉野川、泉の里、井出、神なびの清き瀬々にすみて、虫の音鳴の中には  
省くまじき物也、石鷄、錦襖子ともよびて、六七月の間、聲おもしろしと  
は、是が上なりといへど、中れりや知らず、この合せし二くさは、形もて



十五番歌合

左 右

渡邊橋守  
田蓑漁夫

一番

雪のこれり

霞こめ嵐もぬるき春の日に雪まだ残る日枝の谷々。

この春は暮るとあくとに雪の山、心とけすも日數へにけり。

信美判云、左のどかに霞こめて嵐もぬるめる春の日にも、谷々はまた雪の残りりとや、初春のけしき思ひいでられてめでたく承り侍る、右此春とおきて雪の山心とけすなど、下に異心を含みて見ゆるは、睦月十五日までさぶらはせよ、よく守れ、其日まではいかにもしてと、狂ほしきまで思ひたりし雪の山のふることや思ひよせられけん、心詞優にて負くべからず、持とや申すべからん。

抑も歌合の一番の左勝つべきよし沙汰ある事なれど、負けたるためし

睦月十五日  
日云々  
清少納言  
が雪日の  
汗ひる日  
を争ひし  
故事

も又ありと思ゆ、こはおほやけ事にて堪能の人々の論ひなれば、そのさだめにも預らず、浪速人の刈りつみしよしあしはわくべきにあらねば、只いちじろき、籠妙にきたへをも見あきらめず、春山をおきて秋山ぞ我はとよみ給ひしに習ひたれば、神の祠のみしめ、繩心ひかるゝも、花の中の深山木、色なしとおとしめたるも、なべて歌のよきあしきにはよらで、夕霧深き浦のみるめの暗きなるべし。

二番

きやす

岡越たかの小松まじりのつゝじ原、ありかを見せて鳴くきやすかな。

春雨に垣根の小柴ふみたてゝ宿り顔にもきやす鳴くなり。

左見るが如くに仕立てられたり、右垣根ふみたてゝ宿り顔も面白かれど、小松まじりの躑躅原にありかを見せてなど、しらべ高きいとのかにて景色まさりて承る。

三番

蘆しげし

秋成遣文

我門の水沼の岸におふ蘆の夏はかきほに繁りあひにけり  
蚊遣火は水吹く風によこをれて蘆にこもれる三島江のさと

左歌のしらべなだらかにて、且垣ほに此頃は繁りあふといふ心よく言  
ひとられしかど、右三島江は蘆の名所にて、こもれるといふ工みには及  
ぶべからずや

四番

氷室

みな月の照る日もさゝぬ谷陰に、召す氷をけふと貢ぐ山人  
袖ひちて夏を忘るゝ手まさぐり、解くるひさしき君がみまへに

左題意たしかにて調べ優にこそ承りつれ、右氷をもてあそばせし物語  
をや思ひよせられけん、詞たくみに侍れど、句のなだらかならぬには

五番

初秋月

星合の契にさはる雨すぎで、涼しき風に月すめる空  
月かけて野路の萩原わけければ、淺き川瀬の音のさやけさ

野路の玉川萩もこの  
あすも秋の色な  
え玉川萩もこの  
え玉川萩もこの  
宿る波にけり

左星合といひて雨すぎ涼しき風など、初秋の心たしかに聞えたり、右は  
玉川を思ひよせられたるか、そも花は造化のまゝに咲きいづれば、夏よ  
り秋かけて咲くもあれど、野路の玉川萩こえて色なる波にてふは、花も  
月も必ず初秋とは定めがたし、この歌もしかり、さらば題には左の方し  
からんか

六番

鴈

刈りてほす豊の稻葉に時雨ふり、夜寒の空を鴈なきわたる、  
つれ渡る鴈のおほひ羽ひまもりて、光くだくる秋の夜の月

左稻刈りたる比、うちしぐれて夜寒なるに鴈のなき渡る、いとも感慨ふ  
かし、右うちむれて渡る翅のいづこもりてか霜のおくらんとよみしを  
月の光の是に碎けてとや、数さへ見ゆると言ふにうらかへしたるは賞  
歎に堪へたり、よろしき持にや侍らん

七番

木枯風

今、白雲古見  
今、白雲古見  
今、白雲古見  
今、白雲古見  
今、白雲古見

秋風云々  
都をば霞  
で共には霞  
かどい

ゆくさには若葉の陰に駒とめし老曾の森の木がらしの風  
こがらしの風に高師の濱松も争ひかねて下葉ちりかふ  
秋風ぞ吹く白川の關争ひかねて紅葉しにけりなどの古歌おもひいで  
られたるか左若葉に老曾を對し右は高石に下葉を取り合されとりど  
りめでたけれど左の老曾たゞ地名にはあれど四の時々の移りゆくを  
思へば老の字凡ならず思ゆ右調高けれど聞きふりたる所あるには勝  
の字左に譲るべし

八番

冬の旅

吾妻路はわたり瀬毎にみなざりて霜にもかれぬ流なりけり  
わりなしや雪の下にも春かけて越路の旅にやどりする我

左東道とことわられたるも猶旅の情たしかなりとも聞えず右雪の下  
に日數かさねて宿れる三越の間はかゝりとぞ實を述べられつるには  
いかで負くべき且春かけてといふ詞冬の題にはいかにやと思ひたれ  
ど初めにわりなしやと歎きありて冬より雪にこもりたれば難あるべ

からずとて勝には定めたり

九番

海邊里

軒毎の蘆のすだれも汐馴れて見いれ悲しき須磨の浦里  
神垣に跡をとめてものゝふの屍草むす鎌倉のさと

左軒にすだれ懸け渡したる家の立ちつらなれるげに行き見ねど浦廻  
のたゝすまひなるべし右古戰場なりしも思ひ出らるれど詞のうへに  
ては海邊の風情いかやにやよて左の方によるべし

十番

關

荻萱の關のゆきゝのともしきに篠吹き亂る秋の夕風  
足柄の關の古道こえくれば不盡の高根の雪ふきおろす  
右筑紫の荻萱の關に吹き亂るゝ篠の秋風詞のよせいと淋しう讀み合  
はされたり右足柄の關の古道にふじの嶺の雪吹きおろして行客のゆ  
き惱めるを思ひやられて持たるべきか



十一番

雨夜はるゝ

待ちまたる思ひすてしを、小夜中に雨はれて思ふ友があたりを、  
嶋陰の筈のしづくに更くる夜の、雨晴れて月はあかし漏かな。

左雨のわびしさに思ひたえたりしが、小夜中に霧れて又すゝろに友の  
許ゆかしく成りぬとや、右更くる夜に思ひかけす雨はれて月さし出た  
るを、船がゝりせし嶋陰に見たらんは、朋のあたりよりもと思ゆれば

十二番

船橋

たち山の雪解のにごり浪立ちて、くだくと見しは放つ舟橋、  
親なくば放たじとしも思ひしを、五月雨はれぬ佐野の舟梁、

左は越の國富山の府城にありて、立山の雪消の高水落ちくれば、取りつ  
なげる舟橋をあわたゞしく放てるさまいと恐ろしとや、右は下野の佐  
野のわたりの古歌にもとづきてたしかなり、されど勝負わきがたし

十三番

老いて友なし

よはひとて我を祝へる諸人に、さても訪はれぬ事の久しき、  
春ならぬ霞に老が目をきりて、文の友さへ疎くなりぬる、

左さてもと歎息したるに、いと久しき心こもりてあはれなり、右は目の  
かすみて書籍の友もうとくのみなりぬとや、いと巧みなり、風調右たか  
く聞ゆ

十四番

原 棊

草深き清見が原の野づかさの飛鳥の寺も淵は瀬となる、  
高野原のうへの、萩の花妻をよそにぞ鹿のつれわたる見ゆ、

右野づかさに立てりし飛鳥の寺も淵瀬とかはりて草深き原となるに  
や、さらば草深みとこそあるべけれと聞くは僻耳か、右原野の意たしか  
にて、鹿の雌雄のつれ渡るさまをかしく侍れば、右勝なりとも見るも又  
僻目か

十五番

## 神社

墨江の神のみむろの鷺の戸に聲のみよする沖つ白波。  
神さびし吉備津の宮の高はしを風吹きおろすすゞしめの聲。

墨江のみむろ戸吉備津の高殿いづれもかうくしくこそ取り合され  
たれば持とや申すべきを、高階おろすすゞしめの聲は住江の沖つ波に  
劣るべく思ゆれば、左勝の字をさやけまつるべし、濱洲におりゐる鷺の  
繪かきしむむろの廟門、昔詣で見しにも心のよせられて侍りき。

橋守云、江のほとりにありてさへ、ことしは夏陰もとめかねて、わび泣に  
かへつる言どもを、都人の筆にかしこくもことわりて聞せ給へること、  
盲龜の浮木のためしなれ、第一の残雪は川風寒み千鳥なくなりといふ  
歌をくわんさんの日とかにすんじたらんに習ひて、あつさや忘るとて  
彼の高嶺を思ひ出しかど、短き蘆の一ふしこそなかりつれ、漁翁の雪の  
山の古事に耳改められて珍しかりき、世にさかしき人も是その日頃ま  
であらせよと、いづれの神にかねごとしけん、僅にわらうだばかりに  
て消え残りしと聞く、いと危きを能くも念じて待ちつけたりな、此歌打

聞くより我負けたりとこそ思ひしを、翁かへりてこのわらうだに膝つ  
き給ふなん、いとおそりありと云ふ、漁父、いかたじけなくこそ侍れ、小  
松まじりのつゝじ原、あな高音やと打出で給へるより承りつれば、思ひ  
も空ゆくやうにて、垣根の小柴などあやしげなること言ひしを、都人の  
など咎め給はざりし、身さいはひあるものぞ、黍からわた木などゆひつ  
がねては常に呼びならへるまゝを、歌の詞には罪犯せしやうに恐しか  
りつるを、さるさた無しによくこそ負けたれとて喜びぬと云ふ、橋守云、  
袖ひちつゝも手まさぐりし給ひしは、源氏の何の巻なりしや、されば申  
しつれど我も忘れたり、宇治の巻々の中にとのみ覚えてたしかならぬ  
事を、歌のさだめの外にうしろを見せまらす事とて、うなじをつきた  
り、又云、月も萩も造化には時の定めなしと承る、心得つべきことわりな  
り、豊の稻葉、老曾の森の木がらし、かくよみ出せる人をあそび敵とせる  
をこそ我はといへば、いな蘆にこまれる三嶋江の里、古き歌の中にさ  
し加へたりとも、誰の君もえり捨て給はじものを、鎌倉の郷もとより海  
邊なれば、みづく屍としも承らばやとも思ひつれど、草むすといふかた

に昔はしのばるれ我須磨の浦里のさまは誰もおぼしよるべきを宮仕人は私にはいきて見給ふ事あらねばまづなつかしき所の名にや心引かれ給ふらんかすと云ふ漁父が云、齡とて袖ふりはへつゝほぎ言に物とり添へて來たりし人のかにかくに老は物むつかしげなりとて、とほどほにのみ音づれこぬ誰しもゆくゝかゝらん物をと、打泣かるゝぞかし、橋守云、草深き野づかさ、に句を隔て、思ひしを、草深みとせよとあるにこそ、誤りつとは知らるれ、漁父問、この飛鳥寺とは蘇我のおとゝの艸創ありし法興寺なるべし、此寺たてられし年を法興元年と呼ばれしこと、國史にはしるさせ給はざりしかど、上宮太子の伊豫の温泉の碑にしか見えしかば、確かなる事ともいふべし、さてその在りしは清見原とは物には見えたる事のなきを、いかで定かにはよまれし、このついでに心にしるしとゞむべしと云ふ、橋守、是は答め給ふに答ふべきよしも侍れど、まづこととしも罪なはれんにはかしこむべし、昔彼の國のかのわたりを拜み廻りし時に、天の香具山を南へくだりて、飛鳥の古里をさして行くに、田畑の中に所々石すゑの千とせや、經ぬらん、いたう黒みつき

たるが置き散らしたるまゝなるを、いかなる跡ぞと野に立つ男に問へば、寺ありし所なり、辰巳の方なるは層塔の跡なる、此浮圖は奈良の元興寺へ曳きもていきしと云ふに、便して思へば、法興寺は飛鳥の菅田にと史に見えて、天武の皇居なりし清見原といふもこゝにて、又欽明の卷に二狼のくひあひし所にて、歌には大口の眞神が原とよむと云ふ事、何やくれの物に思ひ合さるゝ事あり、元正の御時に奈良へひき移されしもて、寧樂のあそか寺と呼び、實には元興寺と改められしと云ふ、是を思ひ合すまゝにかくは詠みたれど、それまがみが原のまがこととあらんに答ふる言もなし、今も飛鳥の里に飛鳥寺とて立ちたるに、丈六のさか佛を祭れゝど、浮圖をまで引移されしに、いかで御佛をこゝに置き給ふべき、そのかみは釋尊等身の故もて必ず一丈あまり六さかには作られしとや、今の飛鳥寺なるもいづちにか在りしを、こゝに運びきたりけん、鞍作の鳥が思ひかねして御堂に納れ奉りしと云ふ本尊は、奈良のかしこにて亡び給ひて、今は五層の浮圖のみぞ立てるを見る、むかし此野にてこの事臆げながら思ひよせし時、春草に常盤かきは跡とめて、もつ

飛鳥の寺はしるしも、一度しかぞと思ひしことは、おのが私にさた／＼と物いふ昔の人にも多かり、住の江の鷺の戸もまさめには見れど、詞章には誰も申されぬなるべし、飛鳥寺のまが言の論なう高野原の鹿のつれだちには負くべくこそ侍れとて打ちもだせるかたみに譲り合ふ言のよろしさは、道々の師のまけじ心にまさりてこそ聞ゆれ。

## 海道狂歌合

から國に狂とたゞふるは、さえの尋常にこえて、またひとかどあるをいへり。いにしへ狂歌といへるは、みやびたる局を離れて、思ふさまの詞もて言ひつらぬれど、必ずひとかどあるをいへり。今の世には戯れたるさがなごとをむねとして、まめなる處にても詞なめげにいふを狂歌とは思へり。箆の衣に繩の帶せし姿ならんなどいふ教をうけて、こよなきことに思へるは、朽ちたる板もて寶とたふとめるたぐひぞかし、そも吾先師鶉居翁のよみおける此海道狂歌合は、心に詞に狂を含めて、姿は椶の木 いや高らに、歌のしらべをぞなべていそのかみ古きによれり、眼高からんは師のかく局を離れてさえの晒れたるが、玉川の手づくりよりも白きを見よ、ふつに直人の及ぶべききにはあらしかし、されど子のおのが色に似ぬを憎める黒き綴のともがら、此書を見なばこは歌の腐たるなり、かゝる歌を狂歌といへるは物に狂へりとやいはん、吾はまたしか云ふものどもを物ぐるひとせん、さらばかたみにそのけぢめわきがたからんか、只いにしへによ

れるをもて、われは狂はぬよすがとぞすなる。おのれ力なければ師の薪を  
荷ふこと能はねど、はじめにこのことをしるして、後栗の林に入らん若う  
どのしをりとするになん。

文化壬申ささらぎ

淺の屋鮒主いふ

昔より東海東山の道に業平ほどの旅人又もあらしといふは、人の國にて  
も猶かゝる事止まざりけるのいはれにやあらん、吾孀に杖ひく二人づれ  
楮道心篁處士が富士の秋空、湖上の曙はいひふりて、且及ばぬにや。とまり  
じやないか泊らんせ、行く／＼是を云ひつがひてとは、夜ごめにいづる馬  
の鈴のねむりざましなるかな。さらば勝の持のとゑせ我はいはじ、よひよ  
ひ二百の旅籠代に冷飯くはす宿はあらしな、お汁にぬらすはし書をかう  
もあろかじや。

瑞龍山下無腸隱士

天罰七十餘載書

海道狂歌合十八番

左

楮道心

右

篁處士

第一番

大津馬  
大津より追ひこし馬を關山の岩根にしばし沓はかへてん。

矢橋舟

舟酔のうきを堪へぬる都女は矢橋の岸に思ふ人やある。

第二番

伊勢使

伊勢島はうまし國なり、新嘗の千秋たえせぬ君が御使。

うまし國古くさし。

疾伯朝發

春と秋西に東に往きかへるつかへの道は直き一すぢ。

にら髪  
字體不明  
誤るきな  
保せず

大道直如髪、にら髪ちやみ髪もある物を、是はたとへいはぬで宜し。

第三番

遞夫 くしすけ

一つきの酒にしみては風の上の身を浮雲に立走りつゝ、

渡丁 川ごし

みなざらふ春の雪解の岸に立ちて、渡りよぶなり醜の益荒男、

みなざらふ又しこのますらを、ふさはしからの古言かな、

第四番

遊行聖

國めぐる法のちなみに取り與ふ御名をば頼め、我も頼めば、

梵論師

里に出て宿り求むる時雨空、ほろとあはれを誰かかくらん、

第五番

茶亭

一つき

休らはん烟くゆらす朝花香、誰苦してふ阿部川の宿、

髻店 かみゆひとこ

髻の字清朝紀聞に用ひたり、この國にては相當るべしけし坊の

ちよとこそげまはしてには如何髻音活、

搔撫でし鄙の長路のおどろ髪、あけて入らなんあすは都に、

第六番

荷前 のざき

國つ物初穂さゝぐと幾千箱、是やのざきのためしなりけり、

駒むかへ

武藏野の荒野の野髪ふり亂し、歩める駒に風も起りて、

第七番

鹿島觀

いかさま事ふれといふ字はあらめいたから、

神言を常陸の海のいかゞ崎、いかゞと人の立ちとまりつる、

信濃巫

わりなしや忍ぶに餘る魂よばひまこと信濃の弓によりくる  
信濃弓萬葉集延喜式

第八番

驛長

野に山にぬてゆらがせて人よべる驛の長がさばへなす門

驛鈴 ヌテユラグ

如五月蠅門 サバヘナスカド

さりとは古學者不通也

飛使 ハヤウチ

中々に翅は折らん行く雲も漂ふ脚のかざりありけり

九番

武者修行

我にまさる人試むとますらをの仇なき仇を尋ねてぞくる

角 抵

けふこゆる關山の名の世に高く都難波に待つとこそいへ

十番

賣藥翁

雲に乗るこれ藥なり皆人よしるし頼みてめして通らせ

按摩取

磨の字古書に出づ磨は後の發明

春の海は岩根こしうつ波の音の眠をさそふゆたにたゆたに

十一番

邊鄙生活 みなかわたらひ

都にも待つと知りつゝ此年も三とせになりぬ妹許にして

亡命 かけおち

さして行くよるべを波の漂ひにかくてや朽ちん

さればなあ末七文字はなんとあるぞい

十二番

當壇女 おしわれとも又とめ女とも

卓文君なつらはねへ

秋成遺文

引留む袖の別れや難波江の短きおあし是もなさけは、

歌比丘尼

日暮しのあやなき木の歌比丘尼、さゝら萩吹く風のしらべに、

十三番

川どめ

けふ幾日、星の契の中河を頼みてぞぬる磯枕かな、

雪ごえ

箱根山朝こえかぬる大雪に、たが爲となく跡つけてゆく、

十四番

修験

峯しげき羽黒をいで、月の山苔に衣はそみかくだかな、

狙公

宿々を木末につたふ猿曳の世渡るさまは猿にかも似る、

猿にかも似る、大伴卿讀酒歌十三首の中、

十五番

そみかく  
だし山伏  
猿にかも  
似る  
か  
見  
し  
く  
あ  
も  
似  
る  
か  
も  
見  
し  
く  
あ  
も  
似  
る  
か  
も  
見  
し  
く  
あ  
も

緑林 ゴマノ灰

浦波のかゝるべしとは打頼み、道の空よりつきこし物を、

華子 コツジキ

人の道の五つの教みだれては、霜の原野に庵だにせで、

みだれといふをかけてさかし、

十六番

針囊

旅人の囊の針の數たらで、ふる里近く今はなりぬる、

ぬさぶくろ

秋の葉に色加はれる風のぬさ、荒ぶる神の心なごめん、

十七番

うた枕

萩にしをり鶉の床にふしなれて、都にいつか草の枕は、

是につけて芭蕉流の行脚といふは、かけ落の俳名、

連歌師

秋成道文

ぬさ一帯



に  
新  
酒  
落  
の  
り

すべて世ははやればすたる、今きけばにいやり筑波道は絶えねど、

十八番

圖あれど題字なし、故に歌なし、品川のうまやの海ののり込とは  
見つれど、

紅毛人來聘

一萬里漕ぎ出て見ゆる富士の嶺を、ふりあをむいてけふは見るかな、

山 裏

いでや大方の世を見聞くにつけても、何くれと打羨まるゝ事しも多かめ  
り、そも高き卑しき時に遇ひ遇はぬ、或はさかしおろかをも言はじ、あはれ  
よみづの道に携はりつゝ、其程々のざえをも生れ得て、をりくゝ違あらん  
人の打ちのどめておかしき遊びせんこそ、願はまほしきわざなれ、いたづ  
らに打飲み打食ひて、誇りかに過さん月日は嬉しくもあらじ、年々の花に  
同じからのぬを、残の齡なほいつまでとかなど、時々いひかたらふ友の、長月  
のしぐれの雨も晴間ある比なりをちの神の手向をいづかたにも思ひお  
こせよなど、すゝろぎ聞ゆる人は、さぬるさみだれの空に時鳥の聲尋ねあ  
るきつゝ、おかしき遊びしたるすき者らなりけり、そのたよりなりしふる  
衣きぬきならの都の神山の紅葉いかならん、よしや早きおそきの定めも強ひ  
ては煩はし、あの見ゆる高根を只越えにしてとて、神無月三日のあした、友  
ども三たり夜をこめて出でたつ、玉造の岡に磨かれいづる朝影まづのと  
かにて、人々足からげなり、今里といふ所を行く、茲に妙法寺といへるは、昔

高津のあざりの住ませ給ひし御寺なれば、いにしへなつかしうて思ひもぞいづる。此師は世の外道の道にかしこくませる餘りに、歌よむ癖のおはして、さる方に力入り給ふが、普く神の代人の世のはじめよりして、後々の歌集物語ぶみ、或は家々の記録をまで見渡しつゝ、中比の人々の思ひ誤れるふし、いづをとう出て、黄金いさごのけちめをも見せ給ひしかば、此梯立によりてぞ同じ志なる人々も次々に出て、御國のかみつ代の事も、言の葉の學びも、今の世ばかり顯證けんじやうなる時もあらずなん成りにたり。これぞ此阿闍梨がいにしへ今に二人ふたりなきいさをにしも有るかなさる方に深くも思ひ迪らぬ人は、あなむつかし、上なき御あたりみあたりにさへ思し知らぬ事共なり、誰に傳へしまが言ぞやなど、あはめ悪むが多かり、しかいふ人の思ひ定めしを聞けば、いかにあなぐり求むとも、心ばかりはいにしへに立ち還らじ物をとなん、それはおのれと立ち還らぬにこそあれ、學びもて行かば梯立のまゝに高きにも登らざらめや、昔延暦の御門のおほん歌に

しほかとし  
のんかとし  
のぢかとし

いにしへの野中古道あらためば改まらんや野中古道と詠みませしを見知らずや恐れあれど此おほんをかとしまつりて、阿闍梨がいさを言

祝ぎして過ぎ侍る。

いにしへの絶えにし事も、露わけて改めけりな野中古道。

なほ行くく語れるは、此師は此國の尼ヶ崎の生れにて、父は青山侯に仕へし下河の何がしといひし人なり。祖考は肥後の加藤殿に仕へて、朝鮮の役にすこし蕭何に似たる譽れありし人なりと、物のはしにしろし置かれたり。をさなき時病にかゝりて、頼もしげなき事共多かりければ、父母に許されて此妙法寺に來り、十三といふ年頭あたまおろして高野山たかのやまに登り、やゝ二十のうへ幾程もあらで、學業の聞え高かりしと也。寛文二年とか、生玉の社僧に任せられて曼陀羅院といふに住ませ給ひしが、市に隣れるを憂きものに、歌二つ壁にとめて遁れ出でし後は、初瀬室生山、吉野、葛城、ところくありか定めすとぞ承る。和泉の國久井ひさかの里といふにしばしおはせし程、人も大かたに知りて問ひまうづるをもうたてしとて、此國の池田川のほとりにとはいづこならん。又その寺に住ませ給ひしは、老いたる母君のたよりなき仰言おほせごあるに依りてとかなくならせ給ひて後は、つひの宿りを高津の岡にしめさせ給へりけり。其比水戸の中納言の君と申せしは、唐大和の

文の道をいみじくすかせ給ひて、博士等あまた召し集へずたれるを興し  
 亂れたるを治め給ふにつきて、阿闍梨にも遠く仰言たまひ、御國の古言の  
 難きをことわらせ給ふにぞ、師が名も天の下に聞えあげにけり、中納言の  
 君は元祿十三年のしはす十六日といふに世を去らせ給ひし事を、儒官安  
 藤爲章が許より告げきたる。その比住の江の松の風も吹かぬに倒れしか  
 ば、阿闍梨

さもこそは西山嵐吹きはてめ、いかに通ひし住吉の松

とよみて、今より後我を知る人のなき世には、長らへてやうなきをと打ち  
 うめかれしが、程なく睦月の廿五日といふに空しくならせ給ひしは、深き  
 御契のありてこそと、彼の爲章が書けりし手向草に見えたり、西山嵐とは  
 中納言殿の一つの御名を西山公と申し奉りし故なりと、長物語しつゝ、行  
 くに、枚岡の社を左に拜み奉る。この大神は常陸の鹿島よりこゝに遷座し  
 奉りてのち、又今の春日山に移らせ給へる由なり、志す方も同じ大神にて  
 ましませば、こゝは伏し拜みして、過い侍るとよらの里より見あぐれば、  
 生駒根に常るる雲のたちまひを、けふは時雨の空に見なして、

散ららしみ  
 六、萬葉  
 歌の故郷

くらがり阪はたとせの昔越えし事おもほゆ、こゝをいにしへの草香の阪  
 路なりと、彼の阿闍梨も並河の翁も論じおかれしは、中れりや否や、里は今  
 道一里ばかり北にこそあれ、翁が輿地志といふ書をみれば、こゝのみにあ  
 らず、内つ國の所々にあながちなるかうがへの見ゆるも少からず、この書  
 撰むとて、公の命をかうべにして、其里々の長共召し出で、問ひたせし  
 とや、いづこにもあれ、古老の口ふみばかり、舊きを偲ぶたづきは無きを、そ  
 れもそれが語れるまゝにあらば、いにしへの書に引き合はぬ事のありぬ  
 べし、そもく、生駒の山ふところ、廣く大いにして、越ゆる阪路もあまたな  
 り、草香の里より登るは、岩舟てふ岩神のいます嶺を越ゆるとか聞えたり  
 神武の御軍の長髓彦が草香の阪にさゝへまつりし時、五瀬命の痛矢串に  
 あたらせて、をたけびなしませし事をあげて、日本紀には雄話と書きて  
 義を知らせたるを、翁は哮の字をえらび當てられしは、かしこの阪道なら  
 ずや、いと訝しと思へりし事を、こゝ越ゆるにつきてぞ思ひ出づるなるゆ  
 くてのうら枯にまじりて、萩の花の匂ひ残れるを折りて、しがらみ散らし  
 小男鹿のとなよへるも、山路の辛きには打喘ぎて聞きよからじ、下りゆく

荒れまくも惜しき  
古今に我  
世は愛に  
伏見原に  
の荒れま  
くも惜し

鹿なかん  
葉一、萬  
も見るこ  
と妻戀に  
鹿なかん  
原のうへ

谷々いとよう染めておかし室の木の嶺といふは昔こゝに世に異なるが  
生ひたりし故の名なりとや其木は東大寺の南の御門みかどに造りて今なほ立  
てりといへり下ればいにしへの西の京なるべし菅原の伏見は北に見さ  
けて行く昔宮人たちの裳引きならしゝ所からむべ荒れまくも惜しとは  
詠まれたり秋篠の里もそこにつゞけると聞く外山も今日はしぐれぬ日  
なりゆくてに大きなる池ありこや問はまほしけれど里人も出で来すこ  
のあたりにとはとみの池かつまたの池など聞えたるがあればなりほうら  
いの山とて教ふるは垂仁天皇の菅原のひんがしの陵みささぎといふなり又西の  
陵とて安康天皇のおほんも俱にほうらい村にと並河の翁のしるされた  
り又このあたりに陵村といふには神功かみこの後の宮のさきのたてなみの池  
の邊の陵もあるべしそのうしろに成務のおほんも在るべし又孝謙の高  
野の陵墓もそのわたりとか聞く鹿なかん山ぞたかのはらのへと詠める  
にはさき山はそのほとりなるもしるし夕影の寒きにをちこち尋ねも行  
かずすべて此都は七代が問みさかりなりしかば山々里々その名聞えぬ  
はあらぬをいにしへ今の物識達の心ゆく筆に問ひしるされし文どもの

あるには、おろかなる藻鹽草いかでかきとゞむべき日入りて垂井の水汲  
むやどりにつきぬ夜ふけ寢覺めて聴けば、枕の野べに妻こひが聲のいと  
めづらしう哀れなり。

もみぢ葉をとめつゝ来れば春日野の男鹿の床に我ぞ宿れる。

一聲二聲をだにあくがれて野山にまじるものを、こゝは夜すがら鳴きと  
よもしておかしき旅寝なりけりつとめて瀧坂といふ所の紅葉見んとて  
いで立つ率河ひらたの社にまうでゝ、さい草は何物と問ひ糺さまほしきも卵の  
花月ならねばいかにせんと云ふ今はさいの祭と呼びて、かち物からかふ  
いたづら者らがねぎ言申す由なりいと淺ましく且いみじきかたは事に  
ぞある高はたけといふ所には吉備きびの大臣おとどのみ墓ありと聞く此君は物學  
びの爲もろこしに渡り給ひて、かしこの經典のことわりを明らめつくし  
賢くさとある名を彼の國にとゞめしは、仲麻呂と此大臣只二人になん  
ありける釋奠の禮儀の御國にとゞのひしは、此君の御いさをなる由にて、  
儒官の人の殊に崇めたふとめりあるが中にも寶字の亂れをとり鎮めら  
れしぞ、いみじきいさをなりける、阪路にかゝるよりまだ薄けれど、常盤木

から物か  
らかふ事  
す

にこきませておもしろ。かろげなる物荷ひもてさきに歩む男に物問へば  
 岩根こりしける山路なれど、能く念じて上り給へ、心なきおのれらさへ秋  
 は行き過ぎ難き所なり。昨日今日の露霜にはおほ方にもみちぬらんをな  
 ど、おかしう言ひとれるにぞ、しりに立ちて問ひごとしつゝ行くいと興あ  
 る山路なりけり。この攀づる繁木がもとは神山の南の岨傳ひにて、行くゆ  
 くになりにく山に至り、伊賀の國に通ふ道なり。落ち瀧つ瀬にそひつゝ、上れ  
 は、瀧坂とはいふ也。川の向ひは高圓山とて、をりく歌よみ人の物案じし  
 に問ひまうで給ふ所よといふに、さるはいにしへの高圓の宮の跡いづこ  
 ぞ、鶯の聲春はおかしからん、秋萩今は散りぬべしといへば、さればこそ御  
 方々も歌連歌の物思ひ人にておはせれ、鶯のみならず春は百千の鳥ども  
 の轉り面白きが中にかほう鳥といふが鳴くは、いと忌々しくさぶしげに  
 てと云ふ。それは春日なる羽がひの山の呼子鳥なるはと云へば、いなや、形  
 見せぬ鳥なれば羽がひなど見知らずといふを、人々したに笑まる。川の名  
 を問へば、たゞ瀧坂の瀧川なりと答ふ。輿地志にいへると川は源春日山  
 の東南より、高はたけ木寺を歴ていはる川に入ると見えしはこれならん

心の中に

能登河云  
十々萬葉  
十詠花歌

古き歌に、能登河の水底さへに照るまでに、三笠の山は咲きにけるかもと  
 詠めるは、今も濃き薄きが此早瀬に寫れるを、猶春花ならば見も定むべし。  
 春日山の名こそ多けれ、大君の三笠の山、春日なる羽がひの山、水屋の峯、又  
 かうせんと呼ぶは、神山の横説れるにもあるべし。さて上りくるに瀧の流  
 もいと面白し、ついでよめる。

のと川ののどにはあらで、落ち瀧つ岩切り、通し水のゆくなり。  
 や、紅葉見る所にきたる。かんさびたる木立をぐらう、青雲の棚曳く今日  
 すら袖に降りかゝる下露は、身に泌みて覺ゆる所なり。いと大きな木と  
 もの黄ばめるあり、もみづるあり、猶青葉がちなるは龍田姫の手業のこゝ  
 は殊にと眺めらるゝ、檜破子さへとうでて、人々めで遊ぶ道わけしをの  
 こも酔ひ心地してある程に、おのれは山のあなたに木の子草びら買ひに  
 行くなり、能く見ていませと言ひて、猶山深く上りゆけり。盃の絶えずめぐ  
 れるには、奈良の都の法論味噌のほろく、酔ひしれて、例の萬葉集拍子ど  
 りて、大君のみさかの山を張れる錦かと歌へば、或人も紅葉かざさん高圓  
 の山と打返して歌ふ。時過ぎば馬牛の通ふとも聞けば、安からぬものにて

壁代一帷

下りて、高畑の神つこ達の家どもを横をれて林にわけ入れば、やがて若宮の籠へ参りぬるにぞ、人々酔ひ心地を改め、みたらしに口漱ぎ手洗ひなどして額づきたいまつる。大宮は来る春なん御遷座あるべきとて、番匠らおまた集ひ居り、烏帽子かたぶけ、おのれくが手業かしこめるなるべし。大神は直會殿におろし奉りて、御簾たれ壁代かけ渡して、いと神々しくたふとげなり。簾の内には大物忌らまゐりたらめ、時々打ちしはぶき聞えたりぬさ俗とうで、打散らしたいまつるも、風の紅葉には目劣りせらるゝ物から、神のまにくと奏して立ちぬ。水屋川あせたるは野田の早苗の時ならねばよ。若草山の北なる水驛に入りて、こゝ遙かながら菊屋の何がしに人走らす。我は山下水の清きを汲みて、例のかんばしきを烹る。奥山の谷の落粟飯にたかせてめづらなり。日影うらくと寒からず、おかしう染め成したる木末どもの軒を繞りて目もあやなり。昔賀茂の翁のよみませし歌に、

水驛一作  
息所

神無月片山嵐のどかにて、紅葉見るべき今日にぞありける。

今のうつゝにむかへられて、殊にめでらるゝなりけりかの瀧坂の歌こゝ

にてやゝひねり出でたり。

春日野の時雨の後のけふなれや、山は皆がら紅葉しにけり。

龍松院の内に海圓法師といふおはせり、伴へる人と久しき契のおはすれば、使まるらせしに、やがてこゝまで歩まれたり。法師まめやかにしるべし。鬚索院法華三味の諸堂残りなく、拜みめぐる。金堂の大ほとけにぬかづきまつる。昔まうでしにはよろづきらしく造りませ給へりき。さるにてもこの御堂よ、建久の昔語は何くれの書にも書きあらはして人皆知りたるを、再び永祿の火の後、近く寛永の落慶は、さばかりのいさをにも云ひ傳へぬぞ恨みなる。公慶上人のいそしくませし御いたつきの程、俊乘法師の下に立たんや、は行力の御徳今に輝きて、勸進のそくに補せられ、年月に法の光を増させ給ふなりけり。かの室の木御門は火に残りて神さび立てり。宗長が手記といふ物に、此御門の法施に源氏の物語一部をしるなして奉りし事見ゆ。世すて人の有難き志よと見給へし事なんありき。法師の御徳にて龍松院の御寶物ことごとく拜ませして見せ給へり。高きほくらの鑰とらして御戸まるるより、まづ有難さの身に沁みて覺ゆ。良辨僧正

そく一紙

利り一舎

ちす一帳

將來の五彩の佛さりや何や、佛の道にては無上の御寶なりとぞ、金光明四天王護國之寺の樓額は、聖武天皇のおほん遊ばせしにて、雲井坂の西の御門に掲げしなりとぞ、頂眞天子經三卷、同じおほんなり、竹のちすのやつれ目とめらるゝ、古代の物なり、大愛比丘尼經二卷、光明子のおそばし、とよ今の世に手書くといふ人の、この上つ代の跡までは、とめて見ざるやと知らぬ方ながら訝まるゝなりき、是等の御かたみは、文治永祿の火にも失はれざりし千とせの御寶なりけり、東大寺大佛殿の文字ある瓦一ひら、周防の國鯖川の蟻がかづきあげて、俊乗坊に奉りし由、時の到れる祥瑞これなるべし、この外にも何やくれやの物ども、手に觸れて見奉ることの有難さよ別れを給ひて、ゆふべの寺を出で、宿りに歸る、今宵も妻こひが聲を夜すがらに聞きあかしぬ。

冬の夜はあはれぞ深き、霜の上におきふし繁き小男鹿の聲。

あした佐保山にゆく、海圓師けふも道わけ給へり、般若寺の前を西に横折れてゆく程、人氣遠き芝山に入りぬ、こゝにとて分け入りしは、さる物見んとてなりけり、こゝを里人のたいこくの尾といふは、昔藤原の太皇后を火

三三三  
三尺か

はうぶりなし奉りし所なりと、輿地志にいはれたり、こゝに七狐の石ぶみとて、世に怪しき古代の物のあるを、さいつ年都なる近藤何がしが摺りあらはして包みもて來しを見せ給へりし、それいかさまの物にやと、わざとにはあらで、こたびの便にもとめ來たるなりけり、辛うじて尋ねいで、見れば、小松原生ひ榮ゆる中に石三つなん立てる、二つは物ともわき難くなん、其一つは石の面滑かに、高さ三さかにも餘り、廣さ一さか二三寸もあるべし、頭大きなるけものゝ手束杖つきたるが立てる形の上に、北といふ文字一つをゑりなせり、何の形ともくれの故由とも問ふべき方もなけれど、出づとにとて唐の紙一ひら二ひら取りあへぬ物して摺りもどらす程に、習はねばようも物せず、やをら寫して見れば、怪し、手足のあるやう身のさまもまがふ事なき人の形なるが、頭のみ獸なるを猶よう見れば、狐にはあらで、犬の頭なるは、まなこつき耳のあるやうにぞ知らる思ふに、こゝは陵あまた立たせまます所なれば、隼人の音泣き奉る形などをやゑり留めたる、されど大嘗祭にこそさるためしもある、御墓つかへにはある事とも知らず、近き世までは七つまで立てりしかば、七狐のあだし名をも呼びつらん。

ならの葉  
の林一萬  
葉集をさ  
す

今は只三つ残れるを見る。昔日七狐の石更に呼ばん三の隼人など誦じつ  
つ遊ぶ誰か告げ知らせけん、里人数多群れ来て、いと訝しき面つきしてこ  
れ見る中にも、あなたふと、かく寫させ給へばまさしに拜まれさせ給へり  
とて、手をすり合せていみじがるもあり、あやしこと問ひせまくするもあ  
り、若き男の此石神よ、ねぎ事よく開召すなり、昨日何がしのをちがち物  
に誇りたるは、この神の御圖にあがらせたるなり、かく物して家に祝ひ祭  
り、財あまた得給はんとてこそ、富める人はかくも飽かずぞおはせりと、様  
々いひしらひつゝ、別れゝに散りゆきぬ笑ひに堪へて忍びかねぬ法師  
のはらからの家はこゝ遠からずとて、酒肴や何やとかづき持たせて所狭  
く取りなみつゝ、山路のあるじし給へり、今日はこゝに暮らすべくす、此山  
なん佐保の山にてながめいとよし、昔宮人たちの家居多かりしと聞えし  
中にも、大伴の家持卿の族のこゝに住ませ給ひし事物に見えてなつかし  
こゝは春立つ霞をあはれぶよりして、鶯の朝なゝの音づれ、呼子鳥の夕  
暮の聲、或は川のべの柳、秋されば夕かはづの妻呼ぶおと、萩が花胸分くる  
男鹿の通ひ路、柞の薄紅葉、月雪のなげきの時々まで、ならの葉の林にあま

其柴一箱  
の柴

た見えたり、今や里人の其柴こりつむたよりに荒れすさびて、いにしへは  
面影ばかりも留めぬなん、世は常かくとは心得らるゝにさへはかなかり  
ける昔語なりけり、さるは舊きを偲ふいにしへぶりの歌、

神無月時雨の常に、佐保の内は露おき亂る、こゝに來ていにしへ思へば、  
草木すらしなへうらびぬ、大伴の鞆とり負ふと、名に負ひしますらたけ  
雄が家居せし、山邊の道に袖ぬらすかも、

今は陵どものみ昔なすかかさび立てり、抑も佐保山の南の陵と申すは、聖  
武天皇をばうぶり奉りしなり、今にこれを守りて眉間寺ぞ仕へまつらる  
その北にそひてますを、ひんがしの陵と申して、光明子のおほんなり、其西  
なるは聖武の御母さき藤原の宮子と申すが御墓なり、千尋のかづら藤  
高しらす天の宮姫の命とおくらせ給へる事、紀に見えたり、又法師の教へ  
らるゝは、其西に淡海の公の御墓なりとや、こは訝しきは此御墓は十市郡  
の多武の峯にある事、延喜の諸陵式に見えてまざるべくもあらず、この教  
へらるゝは所をさすに、輿地志に那富山の墓は佐保の西にあり、神龜四年  
九月皇太子薨せらる、那富山に葬る、時に春秋二歳と見えたる、その御墓な



らすや、又那富山を里人はひたちの岡といふは、春日野の飛火の丘にやと思へば、いな、それは市町の南にありといふ、寔並河の鹿野園の東としるされしに合へるは疑ふべからず、よて思へば火たち山とはいにしへ佐保山に火はうむりせし事のある、そのけがしき火の氣の立ちしにや、呼ぶらん又那富山なる東の陵は元明天皇、西は元正天皇のおほんなり、さていにしへの皇居の跡は今のうた姫てふ里のあたりぞしかなると教へらるひんがしは春日山を限り、西は生駒山のこなたをまでと聞けば、むべも咲く花の匂ふが如みさかりなりけんも思ひ知られて、はろくと見渡せば、秋の田の穂への限り霧あひて、覺束なき物から、打ものどめ心ゆく今日の遊びなりけり、今のかへさは山賤のしりに立ちて、爪木の途をゆく、松蟲の聲やつれたる草村を分けつゝ、眉間寺に出づるほど、陵どもの中道を過ぐるに、柴人教ふ、此東の丘は再び東大寺を焼きし松永といふ極悪人が多門の城の跡なりとぞ、げに此人はいみじき罪人にて、室町殿を殞し、總見院の大臣に叛き、おのが終りをよくせざりしとや、されど軍の上手にて、殊にこの堅めよろしき由にて、多門造りといふ名を、ものゝ家の家にとゞめ

咲く花の  
葉三、萬の  
門よし奈  
民の都は奈  
句の花の如  
句今かか  
り今かか

多門一多  
聞  
總見院  
信長

高野山の  
大師の六  
字林殺し  
あり

しとぞ聞ゆ、眉間寺にまうづ、御堂の格子さしおろして、夕さりのこんくこん經の聲いとたふとげなり、門を出づれば、佐保の橋打渡りゆく、昔の人の千鳥かはづの聲をなつかしみしは、川の瀬いかばかり廣かりけん、今はつぎ橋の數三ひらばかり渡せる小川なりけり、初夜より雨注ぎいづ、あかとき寢覺めて見れば、いや降り降りて頭いだすべからずぞ、覺ゆいかにせん、此夕べにと契りしものを、一日の程もみづからは許し難くて、人々の下歎きをも思はず、蓑笠とりよろひて出でなつ、さるにても生駒根いかで越ゆべき、北の方奈良坂をこえて、木津長池を歴つゝ、夢人の伏見の岸より舟求め、こんには、あすのつとめて故里に歸らんといふ人々、これをむべなひて出たつ、興福寺の銅燈の銘を笠さし仰ぎて見れば、弘仁七年伊豫權守藤原朝臣公等としるされたり、高野山の大師の御筆なりとぞ聞えし、六ひらあるべきを二ひらは世のしれ者が偷みもていきしとや、心ありともあらずとも、悪しき業する者の世にはありけり、手向山こえて、木津のわたりす、さしのぞけば、底ひも知らるまじきに、いと清う流れて、眞砂の數もかき數ふべく覺ゆ。

村雨に瀬々の水上いかならん、わきて泉の川のさやけさ、  
見わたせば

つれもなく降る雨なれや、美迦の原みすてぞ過ぐる恭仁の都邊  
狛のわたりにて、

瓜作る狛のわたりを冬行けば、冷えて泉の川風ぞ吹く、

神代のま 萬葉九、 山城の久 神代より 春は限り 散りけり 心す 地の誤 心 玉水 地名

など、うちたはれつゝ行く、井出の里過ぐるほど雨頻りなり、玉水は我笠の  
半にぞながめらるゝ、長池と久世のあひだを久世の鶯坂なりと云ふ、今は  
畑にひらけたれど、猶をちこちゆくてにも木立の多くて、神代のまゝに春  
ははり秋は散りかひつゝ、古言の葉のいつはらざりけり、雲のむらゝも  
稍立ち別れて、雨もをやめる夕暮に巨椋の江の堤ゆく、いと目さむる所な  
り、右手は入江の波静かにて、宇治のをちかたまで目もはるゝと見渡さ  
るゝ、左は淀野の澤よ、海原なして遠じろく限りなき心す、山崎につゞく峰  
々、雨の餘波の打霞むさへに、夕雲の立ち靡きて、斷續の峯をなす、といふ唐  
歌思ひよせらるゝ、むかふ高嶺よ、愛宕の山なるべし、宇治山黒う繁りたるに、  
白き雲のそびき立ちておもしろ、伏見の田井を住みかふとか落つる雁が

そびき 雙え

口綱に土 佐日語に 江に人よ ぼ江に人よ 呻吟しに 風原をさ

ね、をし鴨の立ちあゐる羽音、入江に響きてすさまじとぞ聞く、蘆の葉陰に村  
君らが家どもむつかしげなる、水、狐村を抱くとはかゝるをこそ、綱代木に  
いざよふ波のさやめくは、いさり舟の漕ぎて返るなり、彼も此もいたづら  
に見過ぐすべからぬながめなりけり、或人のいへるは、唐土の西湖といふ  
も只こゝの見わたしばかりなるに、かれは雅びたる事共を造りそへし物  
ぞと、さるは今ゆく中道は、蘇子瞻が造りし堤とも云ふべし、げにも人に衣  
冠粉黛の化粧あり、勝地に花柳殿臺のながめを添ふるには、柳が枝に花櫻  
をも咲かすべし、さる色香をも借らでよ、すゝろにあはれと思ひしめるは、  
此夕暮の心すさびにこそ、

包みもて家にもがもな、巨椋の入江に浮ぶ蟹の釣舟、

難波の浦人が重き口綱には打出づべくもあらぬを、行くゝ江にによぼ  
ひし人もしばし慰むは、この言の葉の遊びになんある、

天明二年冬十月

迦具都遅能阿良毗

晦が十一  
一本二十  
八日とあ

迦具都逆能阿具毗

三六四

む月晦がた都に遊ぶとて、まづ伏見山をわけ行く、梅は此頃盛りなりけり、  
都人それと咎めん、衣手に花の香しめる今日の山踏み。

かはほり  
しせん死  
めうく  
神泉苑  
一猛々

廿九日の夜吳春の許に宿る、梅津なる経亮もこゝに問ひ来ませり、夜ふく  
るまで物語してぬる程もなきに、あかとき方焼亡の聲して人立ちさうど  
けり賀茂河の東四條の南と聞ゆ、夜べより巽の風烈しう、炎さかんに川を  
飛び越えて、こなたさまに燃えくる、この宿りし東の洞院の家も朝のあひ  
だに空しく成りぬ、風は只吹きに火は只燃えに、西に押し立ち行くさまは、  
かはほり打廣げたらん如くなり、午の時過ぐる比、上は京兆の尹の御館、し  
せん苑に火かゝり、大城もほとゝ火つきぬべしといふ下つ方は因幡堂、  
本國寺などもとく焼けて、朱雀野までと聞ゆ、めうくと立ち昇る炎は雲  
を焦して、月日の光も見えず、物の類るゝ音は千々の雷を響かせ、人の泣き  
叫ぶ聲、走り惑へる有様、譬へんに物なく悲し我宿るべきをちこちの家と  
もも今は残りなく成りぬ、いと淺ましきに夢現ともわき難くてなん、聖護  
院なる人の庵にて、やうく故里に歸らん、の心定めて、申の傾く比都を出  
で、道々人のさま哀れなる事のみをぞ見る、いとさなき者を前うしろに

けはひ  
化粧

して老いたる人の手を引きたれば、はやりたる心のまゝにもえ歩まず、或  
は病の牀ながらかきもて行く、又産屋の人をわりなく歩ませていたはる  
もあり、子を迷はせて求めかぬる、老いを倒さじとすまふ、或は氣ののぼり  
て眼を怒らし神佛を怒み罵りゆく人あり、常にはいかにもあてならんと  
覺ゆるが、けはひ剃げ眉打髻め物さへかづかで、立ち走りまどへる、袋を負  
ひ調度を荷ひたるは勇しなども見ゆれ、そのかき出でたる物積みはへて  
女わらべ守りするたるは用意ありげにこそあれ、暮れなばいかに詫しか  
らんと思ゆ、東福寺の前にておとつ口手を別ちたる孝直にいき合ひたり  
いかにやうとかたみになつかしうて物も言はれず、難波にしかく、の  
事どもあつらへ聞え、猶去り難き人々見つくとて、都の方へゆく後手見送  
るにも、今宵いづこにか宿らんと聞えし事の胸つぶるゝなりけり、伏見の  
岸の夕闇に舟求むれどあらず、心ならねど宿りぬ、雨降りいでて風猶やま  
ず、神さへ鳴る、孝直いづちにか這ひ隠るらん、物の陰なく宿りし人々いか  
に歎き感ふらん、辛うじて持て運びし物も濡れにぬれて、いづこもくさ  
る様におみ泣き悲むともすべなき夜かなと、すゝろに涙とゞめかねて、そ

秋成道文

三六五

ほの氣  
火氣  
疾風

なたの空を見やれば、ほの氣雨雲に燃え渡りて、あか／＼と物の隈なく見ゆるは恐しな夜すがらの風のたよりを聞けば、はやち乾に吹き返されて、今は大宮所も火つきのぬと申す、いかに淺ましと聞きつれど、かうやうの時はまが言いふ者のあなるをと、さる方に思ひ頼みて明しぬ、あした大路の語り言を聞けば、まさしに焼けさせ給ひて、至尊は加茂の社へ遷幸なしませしとも、又比叡鞍馬、いづれにか避けさせ給へりと、猶まさしき事は聞えこすなん、いと淺ましく悲しき事の限りなりけり、や、朝開きするに打乗りて、流れくだりて枚方のうまや漕ぎ過ぐる程より、舟も陸も立きつゝきて、都の便覺束なしとにや人急ぐめり、見返れば、猛々とそびき立ちたる烟の、今は九重の内外残りなくぞなりぬべし、孝直いかにや、友垣らいつちにかのがるらん、彼此思ひつゝけらる、さてなん消息おほかたに聞えて、内侍所、至尊御事もなく、聖護院の室へ入らせ給ひ、上皇は粟田へと申す、其夜のおほん有様人とり／＼に云ふめれど、猶訝しく且浮きたる事を後に傳へんはとて書きもとめす、かくて再び六波羅の室へ遷幸なし奉らせ給はん由を申せしかど、あらずなりて、白河に旅寝ませし女一の宮移らせ給

おろく  
一通り

ひ、大宮の御かたは智恩院へとなん申し侍る、抑も皇居の火ありし事、今の都にてあまた度なるが中にも、村上天皇の天徳四年、後朱雀の長久元年、後深草の建長元年、後土御門の應仁元年、後西院の萬治元年、靈元院の延寶元年、さては此度なるぞいみじき世の災なりける、かくてぞいにしへの神寶や書や何やのおほんも、其度々に焼け亡びしには、今やあがりたる世の事共の、まさしに傳はるべからぬことわりをも、おろ／＼心得らるゝなりけり、さて此度まぬがれし所々僅なりき、おほん書庫、二條の二の丸殿、花山殿の館、北野の社、東寺、西の本願寺、興正寺、六條の枳殻の室、其外は都の外なる所々なん、元のたゝすまひなりける、人も多く失はれしといへど、正しき事は知られざりけり、物のあはれ知る知らぬも、なべて歎きあへる世の災になん、其日の有様今思ひ出づるさへに、いとも恐しな

いろは

火の氣にはいろはの神も焼かれにし、その迦具都遲の荒らぶ今日はや、されど又思ふに

四つの海靜なる代に住む民も、しばしの波の立居をぞ見る。

なげら  
し  
がた

のことわりにはあらぬか。これや天の爲せるは避くべからぬと云へるたぐひなるべし。さるは慎しむべきはおのれくが行ひなるを、しか心得ながら、もなげらの世を過しぬる身の何をか言はん。

原本  
題名  
なし

箕尾行

むかひ  
妻

ふすま  
袋

長月の廿日餘り難波に物にまかりしついで、上田秋成ぬしの旅の御宿をとむらひ對面奉りしかば、今宵はわが鶉の屋に渡りて、あすなん箕尾山の紅葉俱に見んと給ひしに誘はれ、此津をたちて御許に詣づれば、むかひめの君例のあるじし給ひ、御酒たうべ夜更くるまで遊ぶなほ飽かぬものにふすまかゝぶりながら物語しつゝ、明しぬ。

これゆ秋成かけり

嵯峨野の  
葉  
成  
大  
妻  
を

明けゆく空のけはひほがらくと枝鳴らす風も吹き絶えて、日の影花やぎたるあしたなり。都のまろうどの雨に着るてふ山の紅葉しるべせよと聞え給へる、嵯峨野の葉に報い奉らんと、刀自のけふもすゝろぎ立てるはいと怪しなをちの神やかゝらせ給ふらん、いと疾くなどいへど、夜べの名

嵯峨に案  
あり  
事

殘の猶飽かぬ語りごととして、秋の日の早くひるま過して立ちいづ、此道芝は幾春秋に分けならひて、目とむる方もあらぬが、松のむら立つ岡のべに、千々の葉の濃く薄く染めまじりたるを見るにも、心ざす所のまづ頼まるゝなりけり、山路の菊の怪しきまで打薫れる、龍膽の花の淺きながらにゆかしげなり、薊躑躅の返り咲きも珍かなる、折りはやしつゝ、老いのたゆき足も忘れて登りつきぬ、さればこそ夕ばえの秋の光、谷峰に照りかはして、いとまばゆくなんと打ちすゝろぎて、

をちこちを尋ねめぐりて箕尾山、峯のみち葉けふ盛りなり。名にし高雄の梢もをかしと見給へれど、猶青葉がちなりしには日劣りぞせらるも、都人のおまへには打ちも出でじといふ、都人も殊にあはれとや見給ふらん。

まこと  
なり  
か

幾秋か思ひかけにし箕尾山、君しるべしてけふぞ來にける。あぢきなく都の秋を見も飽かで、身をば時雨に山のぐりする。こよひ山寺に例の宿り求む、室の戸明け渡して見れば、此青山の腰にまさな唐錦を張り渡したるも、やうく暮れゆく空の覺束なきを惜まるゝ

光をこめ  
るみに

から、  
夕日さす此山陰の濃きもみち、光をこめに暮れはてぬめり、  
燈臺かゝげなどして、谷水の音を聞きつゝ、

隠子

心あてに色こそ見ゆれ、月もなき夜の錦の軒のもみち葉、  
となん聞ゆるも聞く人も共にうつゝなくて、打臥しぬ二十日まり五日の  
月やいづると、寢覺めて待つに、聞き知らぬ鳥の舌とく鳴きて、枕のさうじ  
の影白くなるにぞ、月出で、山鳥驚き、時に春の澗の中に鳴くとすんじた  
るに、さあらで、はやう夜の明けたるなりけり、經亮も朝日よき人にて起き  
いで給へりき、あるじ方にも打ちしはぶきたるが程なくて、粥清うして、  
はせらるけふは奥の瀧のもとに遊ぶべく、寺を出で、梢のもとに見れば、  
ゆふさりのけはひ立ちかへて、朝露きら／＼しく、置く霜にく／＼りなして、  
いとをかしう染めなしたるかな、打ちながめて、  
疾き遅き咲き散る花に習はねば、紅葉の秋ぞ心のどけき、

經亮

わがせこが詞の露の置き添ひて、山の紅葉の色ぞましける。

かちかた  
の神遣  
雷

瀧のもとに來て見れば、水嵩例には劣りたれど、猶落つると、あきをはをち  
かたの神の音して、すさまじな都わたりに、見ぬ物から、いたく目ざまし  
がち給へり、落葉、松笠ひろひよせて、茶を煎、酒を煖めて、時過ぐるまで遊ぶ  
うつせども影はとゞめず、落ちたぎつ岩が根紅葉色深きさへ、  
まろうど是をいたがり給ひて、まさめの寫繪に聲あるは、となん聞え給へ  
る、いと忝なしや、刀自

すく一托

見せばやな岩が根紅葉散りかひて、柵かくる瀬々の瀧波、  
これに文書き添へて、都に人のもとにとてつく、  
手に取らる物にしあらば、落ちたぎつ瀧の白玉ひろひて行かん、  
吳羽の里に人を待たせしとて、此蘆より西をさし給へり、いと別れ難くて  
なん、蘆の屋の軒に猶しばしの名殘を惜むなべに、  
思ふどちわくる野山のをちこちを、千秋にかけて又や語らん、

右道記、東作秋成所述也、寛政元年九月寫之

北野加茂に詣づる記

おろかなる心にも深うおぼししめる事のありてぞ、我がうぶすな神にま  
 します北野の御社に月比怠らすまうで侍りき、師走ついたち例の如出た  
 ちしに、夜べより雲がちなる空の小雨打注ぐと見しを、行くく降りまさ  
 りぬ、御前にねぎ言みそかに申し果て、まかんづる程、いよ降りしき  
 て今出川通の例の道を踏みたがへ、一條の方へ迷ひ來ぬ、雲は地にや落ち  
 けん、足のもとも小暗くて、只倒れじとのみ見張りつ、歩むくくらき眼  
 に東をさすと思ひしが、いつ横折れけん、南はるかに迷ひありく、袖もすそ  
 しといに濡れ、足駄の緒を踏みゆるめ、幾度も倒るべくす、餘りつらくてい  
 づこまで來つらんと、おほがさ少しか、げて見たれば、あなや二條の大路  
 なりける、狐などいふ迷はし神のこゝまで誘ひ來りん、いと口惜しく老の  
 ますらを心を起して、いで東へと歩むに堀河の雨に増す水音を聞き咎め、  
 又西へと歩ませつると思へば、氣のぼりていかで庵に歸らしめ給へと、御  
 社の方を拜みつれば、是にや心の治りつらん、此度ぞ東をさす、辛うじてや

うやう歸れば、娘の尼いたう待ちわびて雨のいたう降るに苦しくやおは  
 しつらん、やどりは宗文が家にこそ立寄せせけめ、おもの聞召しつるか  
 問ふいな、彼の家にともおぼしよらす、雨に降り迷はされて、いと遙かにう  
 かれあるきつ、苦しくこそあれとて、やがて倒れふす、あな悲し、今朝とく  
 出で立ちて今は申の時にもなりつらん、物だに聞召さで病にやふい給は  
 ん神の御徳見せさせ給はぬ事とて、足腰をさすり湯汲み粥す、むれど、  
 はんともせず、只骨ふしの痛むに其夜はそのまゝに臥しぬ、二日のひねも  
 す猶名残して起きもあがらでありし後は、手足腰などやうく心にか  
 くれと、只まなこ暗み心ほれくしく、夜晝牀にのみべ臥しぬるが、かく  
 て日比へにけり、廿四日といふ日、又年の名残申しにまうで侍りしに、今日  
 も聊か心ゆかぬ事の侍りしかば、はかなき物思ひしてまかり申し侍りき、  
 其夜の夢にあやしき童子の枕上に立ちて西の方を指さし、汝休せよとい  
 ひて立ち去りぬと見て目さめぬ、あなかしこし、我が愚なるねぎ言は拙き  
 歌や文やの名を世に聞えあげんとにあらず、深うおぼししめる事の侍る  
 をば叶へさせ給へとてなん、二とせこなたの日比乞ひ申し奉るなりき、休

せよと告げ給ふを、いかなる事ともおぼしわき難ければ、只よろづの益なき事をまづやめつべく、年かへらば九百年の御魂祭なる、俊曇華の春にあふ事のいと辱なさに、松梅の歌百首きたなげなりともよみて繋げ奉るべく、延秋にあつらへて題撰ばせたくべと云ひしも、今はおぼしとやまりぬべく、松梅只二首をなん味みて奉らまくす。

百とせを九返りの神垣に、松の千歳もおひつぎにけり。  
瑞垣におひつぐ梅の枝々の、八重も一重も神のまに〜

年もやがてに暮ればはてぬめる空の、いとよう晴れ渡りて二月ばかりにやとおぼす日の影に、風もけぬるく珍らかなる今日は、近き野山に出で立つべく聞ゆるを、娘の尼、いとよう侍りなん、いづちへも随ひ侍らんと云ふ彼の迷はし神にこそはせじとにや、かひ〜しうて後よりくる、いづこをかさすべき、遙かなる所には足折れつべし、下の御社こそ今年みがかれて宮作りあらせしと聞く、其霜月には雨しき〜に降りしかば、近きにもえおぼし立たざりし、いざまづそなたをと指すけふは廿九日になんありける。河原面の市町賑は、しくて、山里人のこゝに日毎物運び出て、又ほしき物

に換へゆく、けふは只春の設けの物何やくれや買ひ調へていぬうばら嫁娘、かろげなる物を頭にかづきつれ、常には人の上いとはしたなめにのみ語りぬるを、只春の來る事の喜ばしきを云ひつゝ、足すやろげり、河瀬打越ゆればまづはいりの御門の丹塗の、まだ雪時雨にも流れぬ色の赤々と眩くなん見奉る、河合の社にまう御門、拜殿、廊などは修理もこと〜にはあらぬが、御社なん新たにいと見奉る、姫御神にて鶴の羽がや茸あへすの尊の御め玉依姫の命をいはひ祭れるとや、海龍王の御むすめにて神武の御母みことなりと申す、正しく史に見えさせ給へり、御本社日本第二皇大神宮と石にゑられたるは、即神武天皇をいはひ奉るなりとぞ、さらば今一かたの御社は御むかひめと申す、姫たゝらいます、姫の命をいはひ奉るなるべし、こは事代主の神、三島の溝くひの神のむすめ玉櫛姫を娶りて生みませしと見ゆ、天の下のかほよ人になんましますとも見えたる、神代の始の物語のいとまたとふとけれど、いと大空ごとにてこそあれば、疑ふまじけれど、又信じ難き物にいふ人もありき、ある物識のいへる、神代一卷尊重せずはあるべからず、されど其事は奥頗靈怪なるから究めずぞよき、



強ひて知らまくすれば無識の人となるべきぞといふはかしこし、近き比はこの無識の人の多くて、さまざまのあなぐり言に、我を道の祖と思ひあがりて云ふがうるさくぞある。このすめ大神こそ人の代の始めなるから、この御國に住む限は伊勢の大神について、仰ぎ奉るべきものぞ、殊にこの造り改められては、いよゝたふとさの身にしみて有難くも侍る。御社御社いと多かる、何の御神とも聞き知らぬまゝに、只伏し拜みしつゝ、めぐり侍る井のへの社のみたらし、冬ながら絶えぬ流のいと清ういさぎよし、森の常磐木どもも、さすが霜には凋む色なる中に、銚杉こそもみぢはしたれ、枯れ落ちし枝々も下より又芽ぐみたらんには、かくと何がしの法師がいひしも、今見るに正しかりけり、それが中にも疾きおそきのけぢめありて、いと寒げなるがあり、若やげるも見えて、やがての春を待ちつけたらん、いとにほびかにもあるかな、おき道といふ神なき達の家居の中を歩き通りに、里中にいづれば、いと賑はしく人の連れだちくるは、是も春の物都に持運ぶよ、門飾りの小松、穂長、ゆづる葉、小かはらけなどかづきつるゝなりけり、年木負ひたる馬牛の綱控へしにも、重たげにかづきたる眞柴に梅柳

年木一新  
年用の薪

が枝さし加へしぞ、いと心ありげにてなつかし行く、里離れて二またの所に立ちて、上の社へはいづれを行くぞと問へば、總角が教ふるは來過ぎさせしなり、今のあとにこそよき道はありしを、されど立ちかへらんよりは、こゝ少しいきて別れの所を左に歩ませ給へと云ふ、尼がさればこそ我が思ひしにも道たがへさせ給へりしと覺ゆれといふ、例のさかしだて耳過して歩む、比叡の山を見れば、まことに峯の三つに立ち聳えて、都の富士といふはこのあたりより見さけし人の名づけ親なるべし、日のあかあか照せるに隠るゝ隈なくぞ見ゆるにつきて思ふ、この過ぎつる霜月の廿一日といふ日は、我母刀自の十三年の一めぐりといふに當らせしかど、煤たれし蘆の丸屋に人迎へて何をか供奉し奉らんとて、あなたこなた知る知らぬ尊者達に御經よみて給へとて、物一ひらづゝ書きて捧げたいまつる、紫衣黄衣緋白の大徳あまたに乞ひ奉りしが中に、かの山の圓教院と聞えしは、昔の荷田の信郷の子なれば、兄の信美に傳へて參らせしに、後の使りに承りて、其日なん同じつらなる法師七人を迎へて御經たむけ奉りぬいま六ひら書きてたうべよ、六僧の乞ひつる也と申しこされし、いと辱く

すませし  
云々―洗  
ひし足袋

て即たいまつる、浪花の蟹がかきつめし藻屑の高き峯まで捧げあぐる事も、またく親の導かせ給へるなりと、竹の罫の目なし鳥が躍りあがりてなれん喜びす、高根さし仰ぎてその事をば思しいづるなるいさ、群竹の下陰とけ霜のなごりを行きなづむ、尼が例のはしためて、この迷ひ来てぞわらぐつの濡れ通りて、昨日すませししたうづまでを汚しつ、腹だちやと云ふ答へすべくもあらねば、さきに立ちて行くに、人來たるを迎へて道のあない求むれば、來給へる二丁ばかりあとに別れの所あり、我につきてあとへ歸らせよと、尼いよ、打怨みて、翁にはかにかくに神のつきて、我をさへ迷はし給ふよと悲しがる、慰めかねつゝ、教へし方に辿るゝ道少し廣ければ、是ならんとさきに思ひし事よとさかしがる、やうゝに來たれば午にやなりぬらん、物ほしくなりて御社の前にむつかしげなる水驛みづりきのあるに入りて茶を乞ひ、尼が腰につけし割子とり出させ、かた方づゝをくひ、いとまじとこそ覺えたれ、しばしありしかば迷はし神の今はいにけん、心も治りて御社にまうづ、こゝは殊に宮造りの世に異様いさまにましまするに、此度造り磨かれ給へば何事のおはすとも知らず、只辱なくぬかをつき、こゝ

みけし  
御衣

にても思なるねぎ言をつぶゝと乞ひ奉る、御社の數々、こゝは下の森に勝りて多くぞある、知らぬにも只一とこゝゝ手鳴らし幣かきちらしかけて過ぎ侍る、このいはひ奉るは、或人のもろこしの勝國の廟のためしに長髓彦を祭りたる也といふ、いとうけ難くぞ覺ゆるは、彦は大和の國をぬしはりてありしかど、饒速日の命を君とかしづきてありしかば、さるためしにはこの彦をいはふべきにあらず、饒速日こそ祭らるべき事ならずや、されど此度の御捧げ物に下の社には黄檗染の御衣を奉らせ、こゝには黒きみけしを納め給へりしと、見し人の語りしには、すめらぎならぬ事のしるかりけり、よて思ふに饒速日の御子のうまし眞手の命に至りては、臣と申して仕へ奉り給ひしには、黒き御衣をも奉り給へるか、いとおほぞうに定め難き事なりける、西の國のためしに殷は夏を祀り、周は殷を祀りて其靈をしづむといふも、こゝには神代より只一つゝきにあらせるには、さるさかしきためし習はすべきにもあらず、から國の事もとかくにこゝの事を言ひ説かんとする人々のことわりうるさきには、彼の無識の物識の腹立ちて、かしこを強ひて卑しきものに云ひくたすも、聊か故あるものにも

聞ゆめれど、これはまことならぬ言ひごとなれば、彼も是も共に荷ひもて  
 いきて、いづこにもかい捨て流しやらんものぞ。こゝの神なきの何がしと  
 いふに逢ひたらん時、くはしく問ひ見んとおぼせど、すべて神をいはふは  
 其社々のひめ事にしも聞くには、もとむるともあからさまには教へじも  
 のを、強ひては何のやくなき事なれば、黙して止みなん。河を渡り堤を横折  
 れて新町頭（しんまちがしら）といふ所に來たる。こゝに妙覺寺といふ御寺は、三とせのいに  
 しへ空しくなりし、我をいたはりかしづきたる松岸貞光が親しみて參  
 通ひし事などをもおぼし出て、なつかしきものに見つゝ、過ぐ足たゆく心  
 も倦みたるやうなれば、例の大賀宗文（おほがむねふみ）の家に入りて休らふ程に、日はまだ  
 未過ぎぬほどといふ春の近きには、菅の根の長くもこそ覺え侍れ。

伏見行

原文題名  
なし

春の嵐例よりいたう吹き荒れて雨も時々ふるひと夜と思ひしやどりに  
 指をかゝむれば、けふ六日七日にぞなる。難波かふ内の人々に物語らまほ  
 しきすゝる心も、横江の詞に如是風波不可行とあるを、おぼし出てぞ都に

天つ御空  
云々  
詠花  
于花  
盛也  
天  
桃  
李  
醉

歸りしに、あな恐し十日の夜片野三島江のわたりにて舟を吹き沈め、人あ  
 また空しくなりぬとはまことか、惜しからぬ老が残りの齡にさへかゝら  
 ざりし喜びを、人も我もいひあへつゝ、息づきを春の光やうゝにいき  
 きの袖も花にや匂ふらんを、心ざすかたまづ心にかゝりて再び出で立つ  
 この比のやどりのあるじは都まうでしてあらぬ庵に、一言書き残してお  
 きつ岡のべの松のむら立ち心にかゝりて又登りて見渡せば、桃の林は今  
 をさかりにて天つ御空も酔へりと云ふはかゝるをこそ、餘りのまばゆさ  
 に物いふべくもあらず、山も江もはるゝに霞み渡れど、さすがに隠れぬ  
 物から飽かず面白きに、今日も時過ぐるまで眺めをり、春の江に秋の木の  
 葉の舟うけてとのみに言もつゝ、かす堤上蘇公の楊柳、湖邊王令の桃花と  
 歌ふくく、くだりく菅原の神やしろの瑞垣の内なるいほりに、都の橋の何  
 がしといふ物識の病いたはる程こゝに住むと聞きしかば、めづらしさに  
 訪ひよる思ひかけぬものに迎へとりて、南のさうしあけ渡し、茶かうくだ  
 物とりなめてあるじせらる壁には池の翁が寫せし西湖のかたを掛けら  
 れたり、所にくらぶとやいと心あるものかな、蘇隄蠶院三潭兩峰、かしこと

こゝと勝り劣りいづれ、とか思すなるべし。かしこはこゝに勝るとも繪はいかばかりめでたくと正目まきめならねばいかに羨みあへんやは、只々この軒に入り來たる山や江や價なき寫し繪ぞと、こゝに又しばし語り慰む、心ゆくあはれさなりけり。紙硯とう出て物書くべく仰せたふ承りぬとて、

あえて  
てあかり

三千歳の花の林の君とへば、あえて齡の限りしられぬ。

伏見山花の林は百鳥の春のかぎりや宿りしむらん。  
春をこゝにつくして都に歸るべく聞えらる。病の事かたみに相憐みて、語りごと果てず。舟のりすと人や待つらん、飽かぬ眺めながら扉をいづれば日はまだ中空にて、江を照らし山峯をかゝやかして霞も綻びがちに。

魏姑射山

安永九年神無月、すがく院といふ山里に、靈元法皇の春秋に出で、おほん遊びせさせ給ひし水驛の立たせますを、みそかに詣でたいまつりて

おもほえず分け入る方をこととへば、魏姑射の山の麓なりけり。

この御園は池のこゝろ目もはろく、と作り給へるが、名を浴龍池と呼ば

せ給ふとぞ、此の汀には大み船寄せさす設けも見えたり。こゝに平張ひき渡して、大御酒きこしめしけんと思ふは、かしこきながら昔忍ばしくかたじけなし。閑松嶋といふ嶋山に、老いたる松の波の上に這ひ伏したるが、わざとならずめでたし。

嶋山に立てる玉松千世は經んかも、大君のみゆきをまつと千世は經んかも。

詩僊臺と申すは詩歌のおほん遊びありし處なり、此軒に御製の紅葉と申すは、異木より高く色も濃染にいとおかしと眺め侍らる。傳へ聞く享保十年に山皆紅葉と申すおほん

數知らぬ千入ちいりの木末かさね上げて、紅葉ぞ山をなべて染めける。

から歌も遊ばせしかどおぼしと、やめ侍る。此木の面目かほはこのたびにはあらずや侍る窮蓬軒と申す大庭に立ちて見渡せば、南は淀鳥羽、伏見山、かくれたる所ぞなき。北は岩倉山につゞきたる峯々、疊みなしていとよう見ゆる。麓の道はおはらの馬の口取り眞柴戴きつれつ、都にいづるさまを、上手の繪には寫しや得ん。御垣守松宮の何がしか語り言に、こゝは春た

つ霞をあはれと見るより、夏は山水のたぎり落ちて、扇はなさぬ山人も、ここに置き忘るゝばかりなり、秋は殊に紅葉多く植ゑつれば、まさなる唐錦を張り渡し、冬知らぬ白樫の枝に雪のとをゝに降りつむは、いと飽かぬ景色したりさればよ、おほき聖の帝のかしこくもしめ置かせ給へるを、おのれ久しく守らへ居り侍る事のいともかたじけなさに、年月み草拂ひ落葉かき清め、まめなる大宮づかへを勤めたいまつるとなん語られきいとあり難き今日の遊びなりけり。

再詣姑射山

神無月十日まり、あるじの信美誰かれ山の紅葉見ん、いざたまへと云ふけふは雲の立ちまひもあらねば、扶くる人々を頼みて出で立つ山里ながら、篋深くいみじう構へたる所に入りて思ひめぐらせば、腕氣ながら昔も一たび拜みたいまつりし處なり、手を折ればことし文化のはじめと云ふ年まで三十とせ餘りにやなりぬ、いとも忝くありしたゝすまひには變りて、みあらか取り拂はせし跡に礎をもちこちによろほひ、かたへには誰かに池

めいたる所も、小草茂りからみて、見る目悲しくなりにたり、そゝや藏六庵と申し奉りて御車寄よりのめぐらせて、曹司御湯殿立ちつらなり、岸を落つる瀧は高からねど作らせ給へりと見侍りしが、昔の御垣守の翁のかたり言に、この南に彎弓閣と申して高殿の立たせしが、一とせの風にこぼれしかば、やがて掃き清めさせ侍るとなんありてぞ見まほしなど思ひしが、今はたゞ秋の色ばかりそのかみには勝りたらめ。

荒ると見し昔の秋の忍び音に、けふあらんとは思はざりしを、

此み門を出で、東にのぼれば、藐姑射の山の高きに至る、恐るゝ入りて見奉れば、かくまでならん故こそあらね、世移り年の經ぬればと打ちひそまるゝ、隣雲亭詩僊臺いときらゝしくこそあらざりしか、こゝも礎のみなる中に、山寺と名よばせしみあかしの獨り常磐かきはなるも、おのが物からさうゝしげなり、御製の紅葉と申せしも、淺ましく朽ち折れしかたへに枝葉さしかはしつゝ、濃く薄く今を盛に染めなしたる、昔もかゝりしや非ずや、はたおほんには、さきはひ奉らざりけん、後れて生れたる今日の人々の、翁が昔語を打信じたらんにも似たりかしな、洛龍池めぐりつゝ、見

れば、荒山中に海をなすかもおぼし出でらる。それかく廣らなりしや、今は  
瀧落ちこねば水枯れつきたるに、葦あしの枯れすさび、眞菅まきの聲さや／＼に靡  
きあひたる、冬のあはれながら心すゝろに寒し。

年ふかき池の藪草冬枯れて、蘆の穂浪に風ふきわたる。

窮きゆう遂すい軒けんも一たびはこぼれしかど、この四とせばかりさいつ年にあらたな  
りしとて、今の御垣守の藪あげて拜ませ給へり。簀すい子こに手かけて頭かぶさし入  
れ見奉れば、まばゆかりし昔には似ねど、清らに作らせしこそ有難けれ、彼  
の閑松島の玉松こそ、年にまさり顔に枝さし垂れ、緑の色深く千歳經せんじやうな  
んには、幾そたびの御幸にも遇ひ奉らましこそ、に立ちつとひて、遠くも近  
くも見渡さるゝとて、人々あはれがる。翁おきなの秋霧あきぎりこめしにさへ、心あてに打  
望たのぞむかひこそなかりけれ、秋の色はこゝこそ殊ことごとに喬たけき木末きまつどもの照りか  
はせるを見上げ見くだしつゝ、

山つみのかざして君に仕へけん、紅葉の秋を今も見るかな。

萱野あしな姫ひめのみことばかりは、いかでつれなかりけん、葎あしなの下艸したくさ、岸の陰艸かげくさ、なべ  
て色なくてさう／＼し。

萱野姫  
草の神

もみぢ葉の色こそ昔青山を泣き枯らしけん神代しおもほゆ。

老いくづるゝは形のみかは、物多く縁言えんごめいたるよ、淀よどのわたりのまだ夜  
深きにと誦よみせしにならひて、煙絶えんぜつえにし鹽釜しほくまのと申してなんあらばやと  
今更いまさらなり。又此隣このとなりの里のさとに寶幢ほうどう寺のてらといふ山寺のやまてらにも、一たび御幸ごこうあらせし所のところ  
りとして、けふのあるじがたの重村しげむらの、さきに立ちて路踏みちふみみわけらるゝに、行  
く／＼。

草の皆花の紐とく秋すぎで、とけ霜さむし山の外蔭かげは、

寺の門入るより、苔深く林おひめぐりて、竹むら茂り合ひし中に、紅葉は空  
を蔽おほひてかゝやかしき、瀧の音岩いわにふりて、さや／＼と鳴るも静かなり。流  
淺あしくいさご明かに、心を是に洗はれてすが／＼しき。こゝに離れて作られ  
し庵いほに人々まとゐして、酒さけや何なにやもたせし物取ものとりりなみて、腹満はらみつるまゝに  
歌うたよまんと云ふ。翁おきなみそかにまづよむ。

いくしほの色にやあらんむら紅葉、けふは時雨もよそにめぐりて

片山嵐かたやまのあらしのどかにてとよまれしには、いくらの階かたをか下くだりぬらん日ひや、傾  
きぬ。目のくらき我われは同じごとごとにやあらんとて、尼呼にのよびつれて立ちくる暮

れ残る空か十日餘りの月の朧げなるが、つまづく／＼家路のはるかなるに。

初瀬詣

浅瀬

初瀬寺の麓へ椿市の軒並びに、商物くさ／＼賑は、しく積みはへたる麻布、紙の衾、あづま絹、筑紫綿、袈裟、念珠の玉のきら／＼しきたいまつり物、檀香線香、さらけの品々、つみ花木草の時々の外に、けづり花の色のまことしきも香に薫らぬがくちをしき、もちひ果物、何くれのせちみ物、こもり人のあとらへを局々に運びゆく、この菩薩の御功德は、念彼の章毎にいちじるきを打頼みて、都田舎よりはる／＼と詣でくる人の、ねぎことなん様々なる時に、遇はず司解けたる悲びのうたへ言、又人の罪にか、つらひて籠りをるなげき、家に事なけれど、悪しき疾に年を渡りて、惱ましきなどは、あはれ／＼わりなからぬを、尊き君、富める人のおのが世に飽かで、ねぎ言つくり出でつゝ聞えたいまつるぞ、いとうたてとも耳ふたがせ給ふらんかし、又思ひかけまじき御あたりに、戀車七車に積みこぼして、あはれ片端ば

つぶれ

眞宗將  
運昭僧正

かりも聞き知らせ侍らばやとて、布留の神祠の梯立つくらせて搔きくどくや何なり、我を天雲に漂はせて、あたらしき女の許に月をわたりておはすつらさの、しかすがに中空なる心ならば止めさせ給へなどは、をさなきながら罪深しかし、家の嗣生みたる喜び大方ならぬを、風の燈火に打消たれつる悲しさの、やう／＼月日の疎くなるまゝに、再び白玉得させ給へと乞ひ申したいまつるは、いとほしきこの愛でこめたる寶の鏡や劔やの箱の鍵抜き折りて取りていにし盗人は、こゝにつぶねする者の中にやと疑ひの心つきしを、あからさまに在り所知らさせ給へなど、こちたきにあらずはうたへも申さじ、昔良少將の妻の、生きて世におはさば行き逢はせ給へと、打泣きつゝ行ふを、隣にすみて現れや出づべく思ひしかど、修行の妨げを鬼のなすにやと念じつゝ、明かせば、血の涙といふ物もまことなりければ、かゝぶる蓑の雫に拂ひ棄て、心強く立ち去り給ひて、其時こそあれ後つひに對面賜はりて、法師位の司になり昇らせしは、こゝに行ひ給へりしいみじさの御徳見給へるなりけり、又住吉殿の古物語、玉島の君の此川島水の逢瀬嬉しきためしは、只々御誓の網に洩れざりし人々の志の

至れるなりけり。人はいさ心も知らずとさかしらせられしに、あるじの法師の花だにも同じ心にと答へしは、み佛に代りて怠りの心を戒めけんとも云は、云ふべかめり。いづれも世の有様にはあれど、菩薩のおん功德はかはらせ給はじを、祈れる人の心こそ世くだりて衰へ行くなめり。ひと夜こもる初瀬の寺の曉に、ねがふほかなるほとゝぎすかな。

餘

齋

曉時雨

む月ささらぎと雪ませの雨を、春の物とは誰ながむまじきが、卯の花くたし五月雨に大方も降りつぎぬべし。人の待ち戀ふ夕立は、けどほき夏の日。の年並ならぬ暑さを喘ぎ暮しつゝ、中秋の月にはさはらで、廿日まりより又日毎に雲立ちかさなりて、軒の玉水も庭漑も、いとなかりける年にもあるか長月の朔の空いと清う晴れたるに、向ひの家の老いたる櫻の木に、いとめづらしな、鶯の春告ぐるばかりに聲綻び出たるは、温かなる此頃の日影よろこべるならん。清少納言の草紙に、秋の末までも鳴きて、蟲くひなど

よくもあらぬ名を付けらるゝよと言ひしは、この年にや同じかりけんとも思ふ。あした毎に轉りつゝ、月をわたる事の面白く、且はあやしくもあるか、神無月の是の日の夜すがら、いふかひなく仇々しき事ども思ひつゞけては、明けやすると戸少しやりたれば、まだ暗きに雨の打注ぐ音すれば、

今朝はもよ時雨をそへて、曉の鐘つく寺のちかき枕に。

といひつれば、いとあやし、このせばき庭もせに聞き咎むるものゝあるは、人ならず何ならん、いと細く聲のやうにもあらで、

鐘の音に時雨をそへて、明くる夜の、いざよふや冬のおはれなりけりといふを、聞く程に窓の白くなれば、明けにけるよと思へど、いとあやしう恐しければ、たてこめをる。又向ひの梅の木末より我軒に飛び移り来て、

春冬のおはれを我はわかなくも、時じく雨にうぐひすと啼く。

とかへしめきて詠みたる後に、鳥がこととへる、翁はこのやどりしたるいつの頃よりぞ、我は志賀山より年々このあたりにさまよひ来て見知りたれど、今朝こそ物はいひかはすれといふ、こゝなる者の、我は紀の海の磯廻におひたりしが、三とせばかりさきに都の人の玉津島まうでして、かたち



をかして獲られしを、此庵のあるじの又奪ひてこゝには住むなり。恣いふ、このあるじも歌よむか。答ふ、天が下のえせ言をよむなり。さるから世に交はらず、はかなう打泣きてのみよむ。老やみならず、暗き眼にたゞ清くいさぎよき事を好む。それも世に多かる手洗ひ塵も踏まじとするにはあらず。世情の濁りを忌み避く。とつとむるか。と見れば、或時は出で交りても遊ぶ物狂ひなりき。こゝに在りて聞けば、此庵は大屋の君の年に三度、月待といふかし。此事を行ふ爲に造らせしを、借りて住まゝに、おのが名を清處士と呼ぶべく。一たびは思へりしか。ど、廁の一つの名をもちこしには清とよび、字には圃とも作りて書くといふを、立ちかへりて思ひて、元名づけず。ぞある穢れを忌むあまりには、清しなど呼ぶべくいふよ。愚なる心の煩ひならずや。清きも汚しきも清むも濁るも、かた／＼のみあるべきかは、いさぎよからんとては却りてきたなきにまみるゝにあたりて、おのが病をつのらす、いと淺ましといふ。鳥のほゝと打笑ひて、蓮の清げなるも、冬の池に莖葉のはてばてを見よ。雪の降りつみしに比ぶる物なき。清きも、消え残りて黒み垢つきたるは、いかに眺むるや。人の心も清き名を好みては、江に落

ち入り山に飢ゑたる人の屍の、誰とりをさめぬ程は腐れ爛れて、其香は何に譬へ難く。悪しきを、思はざりしならずや。いひもてゆけば、語るをさへいみじくうたてきぞ。よろづの物の終なるといふ、このことわりどもの有難きに、戸をやり放ちて、猶こと問ひせんとするに驚きて、あなくわやとて、鳥は向ひの木に飛び返りぬ。雨しきりなれば、雲こゝに落ちて、暗き目をはたけて見れば、我庭もせなるは、何某に乞ひ得つる蛙の形せし。さゝれの物言ふなりけり。あなたふと、かくも心得たる翁とも知らで、捨て置きつる事のなめしさを、今はわぶるばかり也。翁がいふ如く鳥のさとせるが如くに、或法師も悪しきを忌むをよしとや。その忌む心ぞ悪しきはと云ひしを、いと辱なしとて、常に好める茶もて此心を洗ひすゝぐとすれど、猶やまぬ事の悲しさをいかにせんといへば、渠いふ、いな、君が好める茶の歌に、眞茶眞水共清韻、貧必非清清自貧といひて、貧しきに誇り給へど、財寶をこそ早く散らし果て給ひたれ。よろづをおぼすまゝありたきまゝにて、世は渡り給へるにあらずや。この探るばかりのやどりをさへ、我見ても幾度か修理加へ給ひし。それいかで貧しき人の爲すべき。かく思ふに叶へるは、耕す硯の水

子し孔

の乾かぬものから、その著せしふみのことわりにつきても、いとよしいさ  
 ぎよしとのみ聞く人はあらで、あなひがくしの名を好むしれ人やと、云  
 ひ汚す者のなくてやあらん、君常にもいはすや、前のほまれ後のそしりも、  
 おのれくが好める方に綱引きて争ふのみ、くし釋迦の聖たちの外は、よ  
 しいふもあしといふも、實の定めこそなかるべけれど、の給へるにたが  
 へて、みづから清しと思す事の、尙よそ目に濁れりといは、いかに、茶も三  
 盃に過ぐれば胸中の五千巻も空しく、或は仙に通すといひ、七盃つひには  
 飲むと能はずして、清風兩腋より生ずとは、清きに過ぎたる酔ひ心地の、聖  
 達のすめりと云ふにはあらざるべしといふ、うちもだされて、誠にも過ぐ  
 るはあやまちなりといふことわり、聞き知らぬにはあらねど、只々病の爲  
 に身をあやまりぬる事の悲しさよといへば、否、身こそあやまり給へ、人を  
 損ひ給はぬは清きをつとむる一つなり、されば是つとむるは心を驕る煩  
 ひにて、はてくは世に咎めらるべきものぞ、大悟いく度小悟幾たび、洗ひ  
 すゝがんその限りには糸筋亂れて破れまよひたため、命の後の名を清め  
 んとせば、活きての世にそはくしき心をつとめてん、それぞ忌み嫌ふが

あしき心なりといふにぞ當るべき、只いさぎよからんとも濁らんともお  
 ぼさであらんこそ、清き限りなるべけれ、君茶を煮ていはすや、眞水は香な  
 し味なし、能く試み給へとて、再び口を開かず、此物を見れば、むべも眼高く  
 腹大いにして、我にはまさりたれ、されどまことには物言はざりきあやし  
 よるをすがらのあだなりし思ひの、心をさへ煩はすよと、やうく思ひな  
 れば雲こめたる今日の空の、日は西に傾きぬらんかし。  
 明くと見し空は時雨のふりく、て、ゆふべの寺の鐘ぞ聞ゆる。  
 花に鳴く鶯、水にすむ蛙の歌よむを聞くも、ともに心の煩ふにやあらんか  
 し。

背振翁傳

雲水にたぐへて、筑紫によき師おはすと聞きては、ろく出でたつ、春山の  
 岨づたひ、日影はがらくと温かなるに、汗こき性の渴をおもへど、谷遙か  
 なり、ゆく手に大なる巖のひまより漏る雫のまづ嬉しくて、手をくぼかに  
 して受くれど、僅に唇うるほすばかりに心ゆかず、うしろに人ありて、よき

此文自筆  
本による

あかてむすも  
かかむすも  
あかてむすも  
かかむすも  
あかてむすも  
かかむすも

水あり少し歩ませよといふ見れば六十餘りの翁なり、いづ方にも參らんと、あとにつきて行き至りて見れば、おし伏せたる庵の門に岩井の玉をばしらせて流るゝ、笠もぬがで立ちよる、是にとてしろき兎毫の盥とう出て與ふ、あかでも人にとよみし古ごとと思ひ出らるべし、猶去り難くするを、清くとも水は害あり、茶烹ておませんといふ、今は汗も忘れ、咽濕ひしかど、しはし足休めにと立ち入りて見れば、土のうへに山菅の席二枚敷きのべ茶、庵一つ築きたる外には物も見えず、翁小柴折りくべくゆらす、瓦の釜やがて浪を躍らせたたり、木の皮曲げたる器より茶一つみとう出て投げ入れ、よしと獨言して、さきの白きに汲みて與ふ、色よりして香も味はひも、ついに試みぬには又三盃を盡す、やうく心づきて翁に向ひ見れば、色黒く、目鼻口あざやかに、遂に病せぬ人ところ見れ、かう里はなれたる所に、のどかにて住みつき給ふいと貴し、在りて久しければ人戀しくもあらず、稀々里人の來て物いへど、答へず啞ごろにてこそと、指ざしして笑ふく去る、山深からねば木立茂からず、さやれまじりの岩村は雲の根なるもあらずてよく晴れたり、このいほり繞りて茶の木あまた生ひつきしを、春毎に心なぐ

さに摘みて納む、今すゝめしは去年のなりといふ、いつの年いづこの人のこゝにおぼし入りて、住み給へる、山中には曆あらねば、鳥の聲草木の萌ゆるに時を知らるれど、數ふるに用なければ忘れたりな、わがうぶすな國ははるく、の海を渡りてあなたなり、此國の大徳の歸らせるに誘はれてこゝに來り、宋といふ御代にてありしが、わが祖は葉氏にて唐帝に仕へ、一たびは擧げられ又退けられしかど、遂には用ひられたるなり、かの大徳こゝに一やすみして又都とかにいき給へるに、わがはらからどもは附き従ひて遠く行きし後、かしこより便して思ひの外に逢ひて、祖先の名おこすべき時なり、とく出でたゝせよと言ひおこせど、人の面目といふも、またそれにつきて立ち走り煩はしき事ありと聞くには、答へもせずと云ふ、さほもろこしの人の思ひかけすこゝに住み給へる也、めづらかに物語して聞せ給へ、いな、かしこに在りても世に交はらねば語るべき事もなし、あなたふと、儒佛いづれの道に入りて、かく行ひすまじ給へる、聊にても教へ知らせ給へ、いな、さる事露ばかりも學ばねば聞え知らすべき事もなし、佛といふは本師の旨を今はさまぐに説きて、千またに分れしとや、あな煩は

し、儒も亦智略文史理數任俠の心々と聞くには、吾は道德の儒を修したらんといひし人もありとや、さる人の名、後にかたりも傳へず、一條ならぬ道々を底なき耳に聴きて何せん、たゞ此門の岩井に心澄まされて、生きんとも死なんとも思はねば、寒くも熱くもあらず、僧かしら、を地にくだし、手撮合せ九度拜して、佛とはまこと翁にてこそおはしつれ、世に聞えし師も思へば、かく有りがたき事語りも聞せず、御許にありて心を修せん、しはしたまへといふいな、く、無益なり、今いひし外に心もなし、足休めたらば疾く去れ、うけ給はりぬとて、心ばかりをとめて出づ、後またこゝを尋ね入りて見れば、ありし岩井の湧きかへりて、庵ありしと見し跡は老いたる茶の木の花をさかりと咲きしより外に物もなし、さては翁は茶の神にてこそおはしつれ、むかし榮西禪師の宋より歸らせし時、茶の實あまた取り來て、背振山といふにまづ植ゑさせしといふ、こゝ其山にこそ都にもち歸りしは、嵯峨の帝のあとにつきて、山城近江の二國にもはら植ゑさせしが再び用ひられしを、はらからが面目めんぼとはいひしよ、いとめづらしき事とて語りしと云ふまゝを、聞くまゝに書きとめぬ。

老弱きより愚に物狂はしきさがにて、萬にすゝろにのみ有りし、世に落はふれ十年餘りこなたは、それにつきてほれ、く、と憂事のみなるを、歌や文や拙き言にまぎらはされしかど、やゝ心つきてかくて終らん事の悲しさに、此一巻に心をやりぬるも、謔言ながらになん、著書滿辨註解若干編こと、く、庭の古井にしづめて快しとす、咨々。

ながき夢見はてぬほどに、我魂の古井に墮ちて心さむしも、いにし年月に木にゑらせし事どもの、今は取かへさまほしくともいかにせん、たゞ、く、打ちうめきて生きうき後の齡をや歴ん、あゝ、く、老いぬれば世の人数かなには江のあしかるわざの男なりしを、文化五年の春正月

瑞龍山下の老隱無腸七十五齡書

此頃いと貧しきに、來る月の十五日には、先考の五十年に珊瑚が十三年をくはへて祭らんと思ふ、香花何くれ供養の物もとむべきたより無し、此茶神の物語、この比の手習也、金二百疋にかへて賜はらばや、ゆめ、く、

大澤にな告げたまひそあなかしこ。

鶯 央 行

四〇〇

居然亭雅兄

(花押)

### 鶯 央 行

昔高市の黒人といふ人ありけり。おほやけの御使して遠江の國にいきけり。そのめの小辨といふは萬にさかしく形まほなりければ、いとかなしう相思ひてけり。此度の御使は近江美濃尾張を歴て行くべき仰せごとを畏みてければ、いそがぬ日數なる程に、忍びに我をも召しつれさせ給へと云ふ。いとわりなしや、人目憚るべき事なれば、事に臨みては道の空よりかひがひしく歸り給はんにはとて、老いたる從者を是が爲に召しつれ、めもをのわらはのさまにやつさせて、數多が中に召し加へてけり。近江の國にこえて、大津の宮の跡たちよりて見る親おほちたちの産土國にて、うからやから此宮に仕へ給ひし故よしの所なればとて、こゝには來けり、いと悲し、大宮の跡といふは春草生ひしげりし中に、焼き亡されし礎や瓦やこゝか

しこに苔蒸して、置く露は秋の時雨めき袖もすそしと々に濡ひつ。浪くら山うしろに立ち廻り、前は唐崎の濱邊の、波空城を打ちてかへると云ふ句のさびしさしたるに、只浦洲の鳥の千代々々と鳴くはいかにと、妻のさゝやきて云へば、さればよ、今の御時には忍びにも語るまじき古ごとなるを。我おほ父達そのぞうの人々も、この都の御爲に亡び給ひしには、かう荒れはてたるを見て、海吹く風も骨に泌み通りて、いたくもいにしへ偲ぶるよとて、打泣きつゝ歌をなんよみける。

いにしへの人に我あれや、さゝ波の古き都をみれば悲しも。  
ひと歌に尙あかずとや、

神樂聲浪之國津美神乃宇良佐備天荒而有都所見者悲す。

と歌ひあげつゝ立ちもとほるに、妻も云ふ、我しらの昔の事ながら父母の語り聞せ給ひて、かゝるまじきはじめ終のいといたう悲しかりしには、この御跡一たびはいきて見まし、いないき見ではとさへ思ひ亂れしを、今日こゝに來てこのあはれなる事をも聞せ給へるにはとて、いといたう悲しげなる聲してみそかによめる。

かく故に見じてふ物をさゝ波の舊き都を見せつゝもとな、  
さすがに心弱きは身にしむばかりなり、長居せばいきす魂のさそひやせ  
んとて、やう／＼立ち去る、沖へを見れば、

旅にして物戀しきに、山もとのあけのそほ舟澳に漕ぐみゆ、

あれなん我上つかさの御舟なるべし、後れてはとて、こゝより船もとめて  
漕がれ行く、堅田の浦に松崎など、ゆく手に面白し、日や、暮れなんとす、舟  
路習はねばいと恐しけれど、頼む人につと添ひ居て、今宵いづこにと問へ  
ば、くろうづ、

我舟は比良の泊に漕ぎはてん、沖へな行きそ夜は更けにけり、

と舟子にあつらへ聞ゆ、長打畏みて、よう候ふ、このわたりの泊不用なり、あ  
の火の見ゆるは、高嶋の勝野の原なり、梶枕わびしくおぼさは、かしこに寄  
せん、彼の野にいほりし給へと申す、風波かしこからねば、只このまゝにと  
て筈の下臥して明けにけり、朝心何となくのとけく思ひなりて、

磯のさき漕ぎたみゆけば、近江の海八十の湊に田鶴さはに鳴く、

東に漕ぎ渡りて、こゝより陸路を不破の關山にかゝる、打越えくれば美濃

の國なり、此國の守に言ひ合はする事など果して、尾張の國へ越ゆる、汐な  
き渡りをさへいと覺束なかりしを、此海邊に来て見渡せば、茫まうと雲と  
波のけぢめなく限り知られぬにぞ、神代より語り傳へしわたつ海のしめ  
給ふ御國にやと、かつ恐しくかつはめづらかなり、澳へ遠く行く舟の波に  
さゝげられて雲に入るを見れば、かくても乗る人のありけるよと、長き息  
つぎあへるに、黒うづ又よむ、

櫻田へたづ鳴き渡る、あゆち潟汐干の方にたづ鳴きわたる、

繪にや寫さまくとあはれがる、小辨のいへる、この御歌のめでたきにつき  
て思ひいでらるゝは、今の上の伊勢の國に御幸の時のおほんとして洩り聞  
き奉る、

吾妹子にあごの松原見渡せば、汐干のかたに田鶴なき渡る、

と遊ばせし、又紀の明光の浦にいでましの御供奉にて、赤人のよめると聞  
きしも、

和歌の浦に汐満ちくれば、潟をなみ、蘆べをさしてたづ鳴き渡る、

といふ歌を、人なべてよしとめでたがり給へり、又誰人のにや、

難波湯沙干に立ちて見渡せば、淡路の島にたづ鳴き渡る。  
 いづれもく御製をはじめに一つ心のながめ艸とぞ承るは、おろかなる  
 よりにや、そと教へ給へと云ふ、さればよ歌は物に臨み時にあたりて、おの  
 があはれと思ふ事を聲永く歌ひいづれば、同じながめ同じ有様のあるべ  
 きを、さきに誰かく言ひしかば、我は少し引きかへてなど思ふは、心せばし  
 や、千くさの花の色、鳥の聲はいつも變らぬを、人の心のさかしきに曲り撓  
 みつゝ、思ひを深め我勝らんとする程に、はてくよからぬ巧をさへなし  
 人をおとしめ我もおひつきて亡ぶことの悲しさよ、此浦の見渡しのみな  
 らず、いづこもく遠くも近くも打眺むるに何のたがひやある、さるを人  
 のいひたる跡ぞとて、いかに改むべき、獨赤人のくはしめきて云ひしかば  
 人の耳に近く是をなん言ひはやすは、歌のよきのみにあらず、いにしへに  
 云ふ言靈のさちに逢へる人なりける、そのまし劣りを我は知らず、只萬の  
 事をくはしく言ひとかんに、は、打聞き誰もくよしとこそ覺ゆれど、歌は  
 しかのみならず、ことわりだに立ちなば、歌ふに永くも高くも聞く人の心  
 をなごせるは、しらべのよろしき也言ひすくめ我さかしがらんには、田長

つゝみな  
に無事

山賤のなまさかしきたぐひに成りもてゆかんとたてし、思ふ心ながけれ  
 ば言の數もながはへなし、猶飽かぬには返しもて歌ひ、ひと歌に心ゆかね  
 ばいかばかりも詠みたらめ、おろかなりとともたましく物言はんと思は、  
 このことわりを常に忘るなど、まめ語りしつゝ行く。  
 相思ひ相離れぬ中らひには、うらなく心ゆく物かなと、老いたる従者は信  
 じ聞きをる、上つかさ早くこゝに來て、萬を語らんとて召さる、さてはこゝ  
 にて別るべきなりとて、老人に萬をあとらへ仰せて歸すべくなりぬ、こゝ  
 は三河の國にて二見といふ所なり、くろうづのよめる、  
 妹もわれも一つなるかも、參河なる二見の道に別れかねつる、  
 女は今更になりて打泣きつゝ、

三河なる二見の道に別るれば、わがせも我もひとりかも行かん、  
 ことよくつゝ、みなく果し給ひて、鳥の翅をかりても疾くまうのぼらせ給  
 へと繰言しつゝ立ち別るゝ、わらは姿にやつしたれば打振るべき袖も領  
 巾もあらで、只顧みつゝ遠くなるまでかたみにせるも、やうく岡林にさ  
 へられて見えすなりぬべし、あはれく昔の人は心にうらなく誠の限り

もてつかへしものぞおほやけの御使ならぬには男もわたくしざまには旅ゆきせずさるは出で立つ毎に面白き所に來ては此浦山のたゞすまひを父母妻子に見せましなど打歎きてよめるは誠の限りなり治れる今のおほん時にも仕ふる人の私なる草ぶしはせぬを民草の上こそいともうらやすけれある人芳野の花須磨明石の月こゝかしこの拜ませにもしりに立ちて相離れず行くは今の御代の忝なきを推し戴くべきにぞありけるさるはあまさかる鄙の旅路もおのが宿にして相思はゞ白金も黄金も玉も何せん心には世の業を忘れ目には知らぬ境を見渡し翹あらねど花に木づたひつゝ日毎にながめを改めて遊ぶらんいとこそ羨しけれ

行くさくさ離れぬ鶯のふすまには霜の枯葉も馴床にして  
 誰も若からんにはと身におはぬはかな言をぞ打出づるかへりては人わらへにこそあれ

ますらを物語

原文題名なし

文化三年卯月十七日けふふたら山の大神の祭こゝに行はせ給へり又こ

おろし  
が供物のさ

こ一里ばかりなる山里の圓光寺といふ山寺に詣で侍る閑室和尚と申す大徳の大神駿河大納言と申せし昔に近くまゐりてつかふまつられしがかばねを乞ひてこの御寺をひらき住ませ給ひしとぞ木立いと深く茂りあひ池の心廣く瀧の音さゝやかながらあはれ也

御宮居は高き岡の上にはひ奉るといふに人々に扶けられ辛うじて上りつき見奉ればこの御あとにはかゝる假初づくりしたるもありけりと却りてたふとくも拜まれさせ給へり又室の御内にけふ御姿繪を懸けられたりその左みぎに十六騎の御姿ともに御いくさ立のかたちなり左の方松平甚太郎殿、柳原式部大輔殿、大久保七郎右衛門殿、鳥井彦右衛門殿、大久保次右衛門殿、高木主水佐入道殿、服部半藏殿、蜂屋半之丞どの、右の方酒井左衛門尉殿、井伊兵部少輔殿、本多中務大輔殿、平岩七之介どの、鳥井四郎左衛門殿、内藤四郎左衛門殿、渡邊半藏どの、米津藤三入道殿なり、いづれの所の御軍立にや、恐れおれば問ひもとめず御おろし寺主かはらけ取りはじめ給へり、此座につとへる人々の中にはやうより参りたる翁あり、渡邊源太と申す、齡六十を越え給へど、わらは顔してうるはしくおはす酒好



なまさか  
しき人  
建部終足  
なまさ

み給ひて物のたまへるけはひ、いとかはらか也。此翁の事一たびは世に響き聞えたれど、今は四十とせ過ぎたりし昔物語なれば、かくて世におはすとも知る人なく、我もそのかみこの目ざまし草を傳へ聞きし時、かゝるますら雄も世にはあんなるはと思ひしが、生きてけふたいめするこそ、齡といふものゝかたじけなきなれ、あないせし大澤はもとより知る人にて、この昔がたりを時々聞えられし、此事なまさかしき人の西山物語といふ事作りなしたるは、却りてよき人をあやまついたづら文なり、もろこしの演義小説、こゝの物語ふみ、その作れる人のさかし愚にて、世にとどまると、やがての時あとなく亡ぶるにいちじるければ、いふも更なりき、是もはやくに亡ぶべき數にぞありける。

さてこのまさし事おろそげにては書きとゞむまじけれど、いつはりならぬ語言して、後長く傳へよとぞ思ふ、讀み見ん人繰言めきたるを推し量りして、又こと人に語りつげよかし、此翁の又さきの翁の世よりにかありけん、この里にては門高く人のおほえいみじかりし家の、時を失ひて貧しくおはしけり、はらから多きが皆母刀自ひとりをおし戴きて、何事をも御爲

には露たがはじとつかふまつられけり、又同じ氏人の是は引きながへて山はやし田はた多くぬしつき、もとよりふりたる家なれば、富に誇りてなんありける、をのこ子ひとりもてり、實様にて悪しき行ひせず、家のわざおこたりなきを、父喜びて早くよき妻あはせてんと、こゝかしこ齋ごもりなるを擇ぶ程に、この貧しき家とは親しき族にてありければ、常にいきかひて遊ぶ程に、ますら雄の次のおと姫とみそかに物ら言ひかはしけり、母の見あらはし給ひて示さるゝには、彼の家は昔々遠つ祖の住み分たせ給ひて、かたみに親しみ助け合ひていと頼もしく、多くの年あまたの世を経たりし也、今の翁はさいはひ人にて、年々富み榮ゆるには、我方の貧しきをいみじがりつゝ、事のためしども大かたに改めて、疎き方にのみもてなす、このしわざは彼の人のみにあらず、世に榮えんする人は必ずしかひがみねちけて鬼々しく、あだし人にもおのが心に叶へるには親しく問ひかはし、族の人には情しき事なく、却りて忌み憎まればやと、し構へるぞかし、ましてこちゝに枝さしわかれつれど、根ざし一つの家なれば、是をよき事とはせで、いみじく恥與へつべきもの也、佐野の舟橋とく取り放ちて中絶

えよかしと、いとこまやか也。御教へかしこまり侍る、御ゆるしなき事し出でたる罪ゆるさせ給へと、泣くく、いひつれど、猶かたみに情しく忍び忍びに逢ひにけり。今は教へ煩ひて、強言せば淵にや沈まん木にやさがりな、言ひ結ぶとも彼の人かたく許すまじ、只是が思ひやりばかりにとて、兄のますら雄召して、しかく、の事いか、思ふや、大島のからき渡りして、成ると成らざるを人していひ寄せよとなん、打畏まりて、御心の如く必ずうけ引くまじきに、懸橋せんは世の常ながら、もしいかさまに言はれて恥見んより、只さし向ひて言はんには、人ぎさうたてからまじといふ、いかさまにも計れ、とても喜ぶばかりの事あらじにはと云ふ。其夜かの家にいきて、忍びやかにかうく、の事なんある、もし御許しあらんには母喜ぶべし、若き者らが心も落ちぬん、貧しく育ちてよろづうひくしくこそ侍れ、御宮仕への一つは怠るまじくといふ。翁打嘯きて、かたはら痛き事也、氏こそ一すちなれ、今は世を経て疎々しきのみかは、わらは人ひとりだに使はせず、菜摘み水汲ませ、落穂拾はせて生ひたせし者の、わがうからやからの交りいかでせん、筋よろしくて貧しからぬ、又市人の富み榮えたる、方々いひ

吉祥天女  
神徳の

入れ來たる此頃也、我子のさるいたづらごとせしは、こゝに諫むべしとて、塵もつかず言ひ放つ、無禮なり、かくあらめとて、母の給ひしよとて、強ひても言はず立ち歸りて、思し給ふにたがはぬ夷心なり、をさなき者にはまづ聞えん、猶こまかに教へ給へといふ。荒夷がなとうけ引くべき、かれ富みたりとておのが世よりもあらず、吉祥天女をいつの世にか宿しまゐらせし、わが家には御姉君と申す、黒暗天の入らせ給ひしにこそ、かうも衰へつらめ、あなうるさの富人やとて、爪弾きしておはす。さて弟姫召して、しかつきなくいふ也、今はたゞ思ひ絶えよとなん、打泣きてのみあるを、若き心には世をせばく思ひなして、親の給ふ事をさへ背くは非道なり、日々に疎からは物言はざりし昔にかへるべし、おのが心を心として、親を苦しめ奉る罪重しかし、此世後の世猶いく世を悲しきもの等にさいなまれん事を思へよと、是にも答なく涙を袖におさへて立ちぬかし、この翁も我子呼び出でて、親の心に叶ふまじき、常にも知りつべし、あの貧しき者らがために我門柱も朽ち倒るべし、只今たゞ改めよと、眼かどかどしくてさいなむ、御心にたがひし事いかでせん、とて、そこ立ちておの

つぶれ  
奉公

いほうじ  
主婦

が臥戸に入りて心地あしとて物もくはず、衾訂被きてけふ暮れぬ翁外よ、り歸りて猶かくて在ると聞きて、戸あららかにやり放ち、このしれ者よ、あのかたなりのみ女と思ふか、都に出て人の家につぶねせば、飯炊ぎ庭門掃きなどして、あかがり足ならんものよ、かゝるまぢをさくわえて、つひの世にはこの里住だにえすまじき也、刀自我にはかり物いはず、もだしをるいと心なし、猶こまかに言ひ聞かせよと、罵るく、いはうじ立ち代りて、御心のきすぐに矯め直すまじきは、兼ねて知りたるにあらずや、いかばかり言ひ堅むとも、神の結ばせ給はぬはいかにせん、思ひくづをれて身のいたつきとならん、不孝の罪かろからず、とく出で、内外の事田畑をも見巡れよとて、かしらをかゝへ上げて出だすに、ぶくくに立ちあがりて事ども行ふ、又かしこの弟姫は母のお前ににじり出て、度々教へ諭させ給ふ御ことわりの骨身にしみとほりて侍るを、たゞ鬼々しき心のおもひを燃やさせて死ねと教ふるにぞ、胸つぶれてうつゝなく侍る、さらば尼になりて佛に仕へ奉らんと思へど、親兄の御心に背きて、入るべき道にもあらず、あはれ今までの命ぞとおぼしなして、御暇たまはらばや、只怨みつべきは男の

せうと  
兄

心なり、親ゆるしなくは一たびはいづちにも逃げ隠れて、出で交はる世を待たんといひし、猶慰めかねてか、死は易し、ひたぶるに頼みてあれと言ひしは、きのふの事なり、我まづ死なん、いひがひなき人の音づれば待たじとて、深く思ひ定めたるつらつき也、母打守りておはせしが、せうと呼び出て、この子は物のつきたるぞ、されど犬猫のさまにてあらん、彼が後の世いとほし、かの翁が心は常の事也、右内こそいふかひなけれ、養ふとも捨つるともいかにせよかし、つれ行きてかしこにて事行へよとて、思し定めてのたまへる、夜にまぎれては物のつきたりなど人いはん、あしたを待ちてとて、其夜は入り臥しぬ。

うまい  
熟眠

山深からねど世離れたる所なれば、鳴く虫のね松の嵐、たかむらの風に通ひていと悲しげなり、母は夜中過ぐるまで持佛の御前にたきくゆらせて、阿彌陀ぶちみそかに念じておはす、弟姫ひまなき涙の玉をや數へて明かすらん、いつも寝さむる鐘の音をけさはおそしと、厨に出で、柴たきほこらす、鳥のやどり立ちゆく聲に、せうとも起き出で、うまいして心よしとて、烟くゆらせつゝ、母の御目さめば又繰言もやあらん、とく行かん、かたち

とりよそほへと云ふ、かしこまりぬとて、白き小袖に帯結び垂れ、かしら髪長きを解きすべらして、けはひよく打笑み、母の臥し給ふかたを伏しをがみして、いざと云ふ、母君え堪へず起き出で、女はよき家に娶らるゝとも、又其家のをしへを戴きて、おのが心なる世はなきもの也、たまゝ義と信との爲に刃にふし縊れなどするを、烈女とて語り傳へたれど、思へ、それぞ身さいはひ無きものの、死に迫りたる男だましひにてこそ、是に數へられ、て命おとしなん、貞操にかへて孝忠にたがふ罪かろからず、かく歸るべからぬ迷ひ路に入りたるはいと苦しからめ、とく行けとて、涙かけす奥にゐざり入り給ふせうと、迷ひ路なれど一すぢなり、わがさす枝折につきてこよとて、さきに立ちて出てゆく、誰が家もまだ朝げの煙軒をもるゝ頃なり、かしこには今朝みおやの祭する日なりとて、法師迎へて誦經終らぬ所なり、かくて入り來たるを見て、家の内こそりて怪しむ、せうと翁の前に居向へば、弟姫つと添ひてうしろにをる、何事すらんいみじき物狂ひとかおぼすべし、けふ召しつれしは、此頃よりことわりさまゝ言ひ聞かすれど、一たび立てし操に玉と碎けても、瓦のまたきに習ふまじく、たゞ暇たまへと

いふ、一人木にさがり淵に浮び出て、親兄の名を汚すべきには、彼の庭をたまひて死ね、翁許さすとも男のもと也といふに、すゝろぎ立つ、母のつき添ひゆきて見苦しからぬさまにとり行へとあるを、承りて我來たる也、右内いづこにぞ、親大事なりとて、人の子を犬猫とや思ふ、こゝに出ていとまくるゝ由いひ聞かせよ、其後ともかうもせんと云ふ、翁あざ笑ひて、こゝなる者はをとつ日の夕暮にまぎれて失せぬ、必ずそこに隠されしと思ひて尋ねもせず、親の心ならぬ者家には入れしと思へば、我子も犬猫なり、歸りくとも養ふまじ、このふるまひ何事ぞ、俳優とかいふ者らがあやつり工むに習ひて、我をこしらふるよ、とくいねと、聲荒くまなこ見張りて、恐しげなり、打笑ひて、親に似ぬ木隠れの女々しさよ、たゞ放たれて我もとに來らば、聲にせん、死にたりとも聞えぬには言ふかひなし、今はいかにするとかへり見れば、はた死なんとおぼして、いづち知らず出で給ふならん、かた時も後れてあらじ、御手給はらずは懐の物もていさぎよからん、願ふはこゝに只今といふ、其爲にこそ母のつきそひ行けとはの給ひしなれ、こゝ汚さん、御許しなくともといふ、えせじと思ひて、いづれの所なりとも心にまかせよ

といふ、さらば同じくは佛の御前にこそとて、花つみ焚きくゆらせたるに向はす、手合せてうつくしう居りせうとうしろに立ちて刀抜き放すを見て、今は驚き惑ひつゝ、これ支へんとするに、および二つ疵つけるにおちてしりへすゝみするひまに、弟姫のかうべは膝の上に落ちころぶ、家の人々誰もしかするやと、こゝかしこに這ひ隠る、せうとは首を取り上げて、佛の御前に奉りおきて座を改め、今はおほやけの御沙汰を待たんとて、面の色聊かも變らず、朝げ乞ひて快くひ給へりとぞ。

里長聞きつけて、わなゝくゝ、此有様を見とゞめて、彼の家に向ゆべく走り惑ひ入りて見れば、母は窓のもとに棚機女のわざしておはす、まだ露知らずこそ、源太殿こそ物狂ひとなりて、じかゝの事し出でたまへりき、此里のはじめより聞きも知らぬ事なり、いかゞし給ふらん、道理はさておきて、渡邊の家々は昔よりめいぼくなるを人たふとみて侍るを、いみじき疵もとの出で給へりといひつゝ、慌て惑ひ立ちさうどく、母刀自機をもおろす、さてはしかつかうまつりつるとか、いかにせん不便の事よとて、猶うつ箴の音亂れず、又是におち惑ひて、昔物語に渡邊といふつはものの鬼を捕

指および

へしといふ、寔に此氏人は鬼にもまさりておはすよとて立ち去りぬ、かくてやむべからねば、都のかしこ所へうたへ出でぬやがて召し給ひて、はじめ終問ひ明らかめ給ひ、若くはやりたれど親のしかせよと許したる事なり、母こそたけきに過ぎたれ、又團次は心強く見るゝ殺させしは、我手してあやめしに同じ刀許されておほやけに参りまかんづる者のことわり暗しとて、ともに人屋に繋がれたりける、月日経て二人とも罪ゆるされ家に歸りて、今はほまれを都田舎に聞えあげたり、團次の翁はこれ聞く人毎に憎みあへたりけり、けふ此翁の人に交りていとうらやかに心よげなるを見れば、そのかみのありのすさび、實にしかこそ有りつらめと思ふ、猶くはしき事は漏らしつべし、老がたどゝしき筆には又も瑾つけやすらん、さるはあぢきなかるさかしら言なりけり、けふは又下の御社の御影もり奉りて、こゝ過ぎさせ給ふ日なり、還幸にいきあひ奉りて、道芝にぬかをつき立て、拜みたいまつる、うたつかさの四位五位あまた、手綱ひかへて乗りつれたり、あを馬に絹笠おひかづかせたる、是なん神の御影なりと申す、御あとへは神ともたち、四位五位鞍笠きらゝしく、あつふさは入日に

輝き合ひて、げにも紅くれないこそ色のつかさなれと、いみじく覚え侍れ、昔も拜みつれど、けふこの山里にいきあひ奉るがめづらかなり、目のかぎり見渡されて、廣き野に満ちくゝて立ちつらなりゆく、神代の事もとは、かゝるに猶まさりたらめど、今は繪そらごと也、是は、

瑞龍山中隱者

七十餘齋書

神代の事  
も業平  
大原の山  
塩の山も  
今日こそ  
今神代の  
事は思ひ  
いづらめ

鶉の屋

あはれ世に立ち交はるべき身は、其程々につけて智といふ物のあらまほしき、そも習ひもて付けたらんが、己が性の如なれるはいとも難しかし、常にはかどくしく打ちふるまへるも、いでや事にさし當りては、我心から頼もしからぬよ、父母のたま物ならぬをいかにせん世のしれ者に嘲めらるゝ身の、人には立ち交はるべうも有らじなど、やうく思ひしめるも、此二十とせばかりが程、はかなき世に立ちさまよへるを、おぼし返すによりてなりけり、さるは

かはら  
か  
清  
斑

冬深み落葉がしたの山の井の、浅きがまゝにうもれ果てなん、  
とぞ思ふ、又或時は

ありわびぬ憂身ながらの年月を、けふより後のふる世いかなる、  
とも打ちかこたれぬ、病少しひまある比、平瀬の助道が嵐山の花見に出でた、じやと云ふにさそはれ行く、天龍寺の内にて三秀院といふを宿りとす、我も去年の夏ひと夜かりし所なりあるじの法師いとかはらかにおはせば、よろづ長閑けうて三日四日遊び暮らす、此院は世に名高き所なり、き南の格子明け渡して、嵐山、大井川も只この庭の物なりとなせの瀧さし向へる所に、仮初なる庵あり、似雲といひしが心澄ませし跡なりとや、此法師は言の葉の遊びに耽りてと聞きしを、語り給ふを承れば、行ひの方にもまめまめしくおはせしとや、此庵まだ結ばざりしいにしへも、折々まうで来て此あたりに、イみつゝ、飽かぬながめしたるを、我師のあはれと見給ひてやがてこの柱立てして住ましめ給へりける、住みそむる日、師のさとし給へりけるは、年月に執念く見しかば、本意遂げさせつるなり、かゝる事につきてぞ我國師の

思ひ入り住みぬる山の庵にも、心とむれば浮世とぞなる。  
 となん詠ませ給へるを、心得たるかと聞え給ふを、いと忝なくすんじ返し  
 つゝ、やがて風早の中納言實種の君の御筆乞ひ奉りて、朝夕此壁にかけた  
 りしが、今は永き世のかたみと成りにき。又庵の名を任有亭と呼ぶも、我師  
 の書いつけ給へるなり。此文字の心ばへは御寺いまだ始め給はざりしい  
 にしへ、龜山の帝のこゝを、我姑射の山にしめさせ給へりしおほんに

我宿の物かあらぬか嵐山、あるにまかせて落つる瀧つ瀬。

となん詠めさせ給ひし、その有るに任せてふを犯し奉りしにぞありける。  
 かつ此文字は圓覺經に見えて、かたゞ有難き心ばへなりと語らる。此事  
 の面白さにこゝにこのまゝなる旅寝してんと、助道のすきがましきを、あ  
 ないみじ、かく人氣遠き所はあしき氣に觸るゝものぞと、固く戒めらるれ  
 ど、ひと夜ばかりはとて臥しぬ。さすがに山風や瀧の音やおどろくしう  
 て寝られず、更けて川千鳥の聲あはれなるに、蛙のころくときゝやかな  
 る鈴の音して、そゝや昔の歌に蛙鳴くとよめるは、是が妻呼ぶ聲なるを、い  
 つの世よりか雨の澤田こもり沼の夕暮に、うたてかしましき物の鳴く音

とするは、早くの人の誤れるなりけりと語れば、なつかしきものに此彼聞  
 きつゝ、夜すがらにて明しぬ。このやどりすゝろに哀れなりともあらね  
 ど、かねてしも思ひ煩ふ心を、これにつけても獨りごたる。

思ひしむ木の下陰の庵かな、浮世の外、假寝しつれば。

又いほりの名につきて

なげきこる山にも入らじ、けふよりは浮世を命の有るに任せん。

といふも、明日は亦いかに思ひ違ふらん、いと覺束なくなん。山の花はきの  
 ふ今日ぞ盛りなる。都なる田舎なる打群れつゝ、宮人達の狩りくらし給ふ  
 わたりとも思ひ知らで、物恥なき翁若き女共に立ちまじりて、きたなげに  
 物くひ散らし遊ぶ中にも、墨の袖打ちかざし、今様拍子とりて歌ひ詠るは、  
 酔ひ心地とも見許し難くなん。この面かのもに所せきまでおり居て興じ  
 あへるが、山彦に呼びかはして岩せく水の音さへ消たるゝには、見にとて  
 出でこし花のあたりには、えも立寄らず、室の外にも頭さし出だすべうも  
 あらずなん。稍たそがれ時にもなれば、山風の吹きやらふが如、あかれゝ  
 に散り行きぬ。立出でゝ見れば

水上を下す筏のあと絶えて、夕の河に花散り浮ぶ。

あしたの讀經終り、茶かき立て、給へりけふの壁には土佐の光信が書ける六祖の像を懸けらる。こは東福門院の御許へあづまより奉らせ給ふなるが、さる故のありて我寺のみ寶となりぬるなり、み表装はからの紙もて調せられしを、都なる柴野の邦彦といふ博士の見侍りて、繪のめでたきは更なり、このよそひのいと忝なきとて、めで奉りしと語られき、寔やかゝる物は市人のともすら古代の唐織や何や價たふとき限りもて装ひ成せるにあらざれば、觀る物にあらぬかたに言ひ下せるを、かゝる上なき御あたるのこればかりなる御玩びは、かへりていとたふとしな、博士のめでられしことわりのむべなりけり、けふは都にいづとて

山の皆散り果つるまでながめせば、我世に春の憂さや添はなん。

助道は猶とゞまられぬ。

彌生朔御築垣のあたりを行けば、人あまた立ちつどへり、何事ととむれば、鷹司の大臣の一の人になり昇らせ給ふ拜賀の御參りなりとぞ、南のみ門の前に人ひしと立ちこみて待遠げなり。とばかりしてねり出でさせ

給へりけり、みさき追ふよりして供奉の人々の、よそひいかめしくかやかし、御手輿四つ、大臣の御輿若君の御輿、二つはれんせいの爲やす君、ためふみ君なりとぞ、見知る限りは、何の君、くれの殿と教へ聞ゆれど、なめて御光のまはゆきに、いみじくさし仰がれて、あなたふとと拜み奉るばかりなり。

さてしも浮世の外の假寢、身に負はぬものから、又も立ち交はらじのひたぶる心より、老いたる人々をもすかしこしらへつゝ、昔の長柄の濱松陰に、元よりのしるべして、怪しの小家に移りきたるは、身の病をもいたはり、且はつひの屍はふらすべき境もとめたるなりけり、此春の雨間なきに聊かの修理をも煩はされて、卯月の廿日餘りにやうく移りて、一たびは刈り拂ひしも、いつしか深き雨の中にもと見し草の原となりんたり、例のかこたれて

結ぶより荒れのみまさる草の庵を、鶉の床となしやはてなん。

まことや鶉といふ鳥は常のすみかを定むる事なし、露けき荒野、或は垣根の葉隠れに、しばしが程身を安からしむるとや、皺かきたり八東鬘霜おけ



田長鳥  
時鳥

るにも猶住みつかん所だに定めずをちこちしありく淺ましさを彼にだもあえなばやの下歎きして庵の名を鶉の屋と呼ぶ事となりぬ麥の秋風吹き渡りぬれば田長鳥や鳴かんのいそぎして刈り干す葉のあわただしさよ此春の長雨に損はれて年の半ばかりにもあらぬとて戸毎の歎きを聞く事のうれたさよ昔鎌倉のおとやの

時により過ぐれば民の歎あり八大龍王雨やめ給へ

とよみませしはかゝる年の御憐みにこそ年のよしあしは公の御位にかかれるものに博士連は云へり聖の君の御代にも年あしゝとて御心を苦しめ給ふ事唐やまとの何くれの文に見えたり天地の自らなる事共は人のあづかるまじきにやと思ひ寄れる事も侍りそはとまれかうまれまたうひくしきりに来てかゝるを見聞く事のうたてさよ

身の憂さに年の歎きの數そひて露の命のおき所なき

あかとき水鶉の聲を聞く

棲みつかぬ宿の朝戸のおどろきは誰ぞや水鶉の鳴く音なりせば

難波人たれかれとむらひて使してあはれがるもあり文こまやかにて覺

束ながるもありかゝるにこそ人の心は見らるれ常には交り深かりしもあからさまに頼もしからぬ數に此度思ひ棄てつゝさばかりならざりしもいかで此年月疎かりけんとおのがまなこの敏からぬを悔ゆるもありき又かくて在るをさがなく言ひ譏れるもありとや世のしれ者が骸骨の棄て所とは情知らぬ人のいかで思ひ知るべき中々にあはつければ稀にも問はぬぞよき

世の中のおふささるさを身にしめてとありかゝりも言はで止みなん

### 寛政改元

む月それの日橘の經亮の文ありことし天明九年を寛政元年と改めらる勘文は高辻前中納言胤長卿なり左氏傳の文字とか承る寛安文長文化享和など撰奏ありしかど諸卿の僉議にて定められし也其日ことほぎ奉れる

逢ひにあひて我すべらぎの政事ゆたけき御代に住むぞ楽しき

と申し侍るもまたく白河の清き流よりと思ふ給へらるゝになんと内の

島の大  
臣  
兼  
我  
殿

仕へ人すら今のあづまの大政事をかうまでいみじくさし仰ぎ奉れるな  
ん私なく有難き事にしも侍る、抑もあづまの大とのの天の下預り申し給  
へりし元和のはじめと云ふ年より、ことし寛政の春に至るまで百七十五  
年を歴給へりき、此御代への事をおぼし渡すに、いにしへよりかゝる御  
時はあらぬところ覺ゆれ、天なる神代の物語、又皇孫の尊の天降りましま  
せしより磐余彦の天皇のはつ國しろしめし、までの事は、大ぞらごとし  
して措きぬべし、天皇日向より出でた、して、大和の國に來り給ひ、まつろ  
はぬ仇を亡し、畝火の榎原の宮に大政事開召し、後、崇神のおほん時まで  
御代は十嗣、歳は四百五十餘年が間、するすべき事もあらざるは、君は神な  
がらに直くまし、臣達は私心なく、民草も偽をならふ事なきにぞ、浦安  
の國と祝ひことほぎ奉るなりける、彼のおほん代に武植安が叛きまつれ  
るを事の始めにて、代々毎にこそあらね、或は御はらから御墻の内に闖ぎ  
あひ、或は臣達もきたなき心を抱きつ、民草をさへ横風に吹き靡かする  
ほどに、凡そ千七百餘年が間は、弓末振りたて、劍とりし、ばる事、百とせのい  
とま無かりし、それが中に島の大臣が三世の勢ひを振へること、皇統もほ

江  
村  
一  
專

とほと奪ひやすると、讀むに汗を流すばかりなれ、妖僧威權をほし、いま  
にして、君を淡路へ遷し奉りし事の淺ましきよ、それをさへ例として、上皇  
を讃岐に苦しめ給へるはいかにぞや、君かくまで禮を亂り給へば、臣達も  
即ならひて、三代の帝を嶋守となし奉る世さへ出できぬるぞかし、つぎて  
君を吉野に逐ひ奉りてより、天の下續芋の亂れなして、世の末にはいふせ  
き、蘆垣の宮に荒き風を痛ませ給ふ御有様を、江村の何がしがまのあたり  
見奉りしといふを見るにぞ、涙すゝろにとやめかねたる、其間武將と申す  
もかなたこなた取り代りつ、只々虎おほかみの争ひに、三百餘年を過し  
來りぬ、これらの跡を考ふるに、君はかしこきためしを取り違はせ給へる  
故とは申しながら、臣達の罪ぞ輕からざりける。

今のあづまの御徳の有難くも百七十餘歳、吹く風條を鳴らさず治めさせ  
給へりけり、又御國のみにもあらず、もろこしにてもかゝる世は、唐虞商周  
とか申す後には見渡らすところ覺ゆれ、文王の澤枯骨に及び、魯公の賢を  
たふとび親をしたしみ給ひしも、ほと／＼百年を待たずして、周の道や、  
衰ふと云ふ事、昭王の代に至りて見えたり、ひんがしの都に遷りましては

我足利の世々に等し、漢帝の器大いにして有爲の君とか仰ぎしも、骨だに冷えぬほどに呂氏の亂れあり、文帝は沈潜にして柔に克ち、武帝は高明にして剛に過ぎ、共に面に譲りてうらには實なく、僞を民に示す事こゝに始むかといへるもあり、周朝八百年、漢家四百年といふも、指を屈むればさることにて、治はわづかに百年を餘すこと能はず、唐の太宗こそ希世の君とたふとめるも、其弟の妃を納れて内の守り無し、武氏の篡、太眞の亂、端を此君に起せるものぞ、五代の争ひに及ぶまでを、なぞも三百年の朝と稱すべき、宋祖の志の有難かりしより、仁宗つとめて民の心を得れば、英宗の賢良を擧げられしにつぎて、垂簾の政事の忝なかりし、建隆より元祐に至るまで百三十年の治、三代の後に越ゆる時なしとなんいへる、明の世も又三百年をもて稱ふれど、宋の百三十年に似たる時もあらず思ゆ、こゝをもて思へば今の御代ばかりなるためしは、かしこにも有らぬよと心得らるゝなりけり、むかし加茂の眞淵のよめる歌に、

ちはやぶる神の鎮めし二荒山、再びとだに御代は動かじ。

此心なん寔によく詠み叶へりしとぞ覺え侍るを、けふの喜びにつきて思

ひつづくるまゝを書いしるし侍る。

二荒山あづまの空と聞きつるを、繁き御蔭はこゝにしありけり。

うかれ鴉

原文題名なし

例よりはすさまじき水無月の空に、小草の葉のそよぐばかりも、せめて吹けかしの風の便に、都のそとの騒ぎとて聞えくるは、祿山の亂れならで三千餘りの歌姫らが、いかになるらん身を泣き叫ぶ聲は、こゝにまであま産の呼び傳ふる心地ぞする。かねては淺ましの苦界とも思ひたらねは、盃の流に我をせき入れて千々にくる情の中にも、かなしき男によかれせじとさへするものを、今は死はやすかれと任せず、さりとして生きん命とも覺えずかし。その思はるゝやさ人も、あはれ身を透間の風になしても逢ひ見るよすがもがなと、思ひくづをれては、親ありとも身ありとも、まして世渡る業などはいと遙かなる物にて、客だに取らぬ起臥は、おのづからの惱みにもかこつけべき紅の涙ばかりは何にかまぎらはさん、又田舎なる少年の道の學びのための京住みに、大和大路の君に招かれて、夜毎あざれあるき

しも机の面杖つらづらに獨言するは

坑儒秦帝暴、驅妓越君仁、紛亂落花暮、吾唯悲一人。

など、うめき出で、は學藝の譽れも國手たらん志も、大ぞらの物にやなすらん、又末の玉の興をひたすらに頼める親の心は、荒鷲のかけりに、いとし子取られたる心惑ひしてよ、すべて洛外無數の酒を賣る家々には、淺間の嶺のとみに焼け誇り出でしに譬へなされて、おのが常々罪ありとも思ひ知らぬには、あな恐しの世や、あな憂のけふとも打ちかこてる中には、まれまれ火くひ鳥の非を悔ゆとも、今はかひ……ものぞ。

二十日餘りの月しらぐとさし出でたる河原面に、山嵐や水の音や打合ひてさやかなるにも、浮れ鴉の心がらや闇のうつゝに惑はれつゝ、何かはもてあそばん、さるは素湯すたうにこがしの川瀬の牀に、流を尋ねてすむ影のいかに涼しからんと、蘆火あしひたく屋のいぶせきには、思ひやるさへいときらきらしきをや。

寛政二年夏河東妓館騒動之後見寄

流を尋ねて  
石川長瀬  
見の清け  
の月も流  
を尋ねて

### 田父辭

難波人和田正尙に耕夫が清來山坊にいきあひて、何くれと物語するに、彼の人云ふ、われ年比蝦蟇を見て喜ぶ、是にも詞ありや、文書きてよとぞ、有るべし、されど物いはゞ様々あやしき事のみならん、君が是愛するは形のふくらかに靜なるをもてか、それは春雨しめやかに降る日、庭もせの垣のものとにおほらかなる様して這ひあるく翁さびたるがをかしとにや、木末の平に瞬きをだにせで、聲はさゝやかなる笛のね時々調べ出でたるは、心ありげにこそ見ゆれ、鶯に打向ひて歌よむは秋の蛙といへば、山川の瀬にころころと妻戀ひするにと、是とは違ふべし、鳥虫をまもりて睨まへおどしにくらふは憎げなれど、人には聊もあやまちせぬいとよし、淮南子論衡に化して鶉となるとしるせしを見れば、田鼠とも呼ばるゝは是よ、煮て喰へば上味と云ふ、それは蛙のうちにて物たがふべし、三足なるもの月の中にと誰見て傳へけん、何をか常にもとめ顔してあれど、ほしき物にあらねば腸とり出でて流れに洗ひ清むとか、是ばかりは學びてありたれど、物貪り

くらふ若きものは羨みつべし。既に云ふいにしへ今に見聞くあやしき物語どもは事さめて、君が愛するに違ふべければ云はじ。歌一つ二つよみてん、歌となおぼしそ、彼が雨静かなる中に笛吹きて遊ぶよと聞き給へかし。

春雨はあすも降るとや告げ顔に、君を仰ぎてこの日くらしつ。

香久山にはすと聞くなる濡衣の雨にしとゞにいつちかへるぞ。

櫻散る花の木陰をよきてかへるしこの翁よ、目は空ながら。

瑞龍山下無腸隠者七十四齡書

雜 祭 詞

原文題名なし

春雨や、霽るゝ空に百千とりくゝの聲、ほがらくと草木の立榮ゆる中に、櫻こそ芽のふくらかに末枝はつゝも匂ひ出たる、いとこそ嬉しけれ。桃の花、ひとへは麗はしきを、あら染とて髭むつかしげに生ひたる仕丁等が、ふつつかにふりはへたらん袖の色にや目馴れさせ給ふらん、唐土人の此花の林のした行く水に舟浮べ、杯やり巡らせつゝせし遊を、こゝにもい

あまがつ  
人形

にしへ仁賢の玩び初め給ひしより、代々のためしの如になんありしとか、ひゝな遊、昔は上童のあまがつに手輿まゐらせよなど、いつとなき御なぐさなりしを、たが家の風よりや祭りそめけん、御臺さゝげ、瓶子に桃柳さし加へ、蓬のもちひいとをかしう作りなしたる、けふ母子なしとな稚き人の御爲にいひそ、時は彌生の三日四日の空の氣色なん、いとどけき頃のおそびなりき。

夏山里に遊ぶ 探題

足曳の山の外陰に人住まぬばかりのいほりあり、博士法師いづれのかしこきか住みつきたらん、垣根の卯の花月夜心あかるくやおはすらん、さしこめし門の柳葉の、さすがにを暗くもあらねど、人脈ひざまに南のあかり障子少し開きたるは、ふみ讀むたよりにや、軒の木立どもの花田緑の色々、濃きにのみ成りまさりゆく此頃は、庭もせの小草の生ひ茂るをこそ、世のうたてき物にや思すらん、寛の末の垣のものとめぐりて落つる音、都の人は是ばかりをも羨みつべし、巢立ち程なき雀子の簀子に這ひあがり、人恐し



火のすく  
れどおの  
が妻こそ  
とこめづ  
らしき

思ひか  
れ川  
風寒く  
鳥なく  
遺水の  
目源氏  
空蟬に

初秋の夜を遊ぶ

四三六

くさし入れ、西に立たせる神垣は夏の蔭と茂りあひて、しづ枝もるゝ入日  
も匂ばかりはあつかからず撫子ことしはくさくさ、養ひ得て露のこまかに  
置き亂りたるぞ嬉し、麥秋の木草も無得ながら、緑はなだの濃き色して涼  
し。

蚊遣火のくゆる煙も横をれて、梢吹きならす夏の夕風

夕かけて月は中空なるに、垣隣のをのこらうばら、門筵に打腹這ひて語り  
ごとするは、頼む秋より外はあらじかし我は扇拍子とりて、思ひかね妹が  
りゆけば冬の夜のと歌ひつゝ、なほ遣水の面目あらんあたりをまで思ひ  
やれば、あやしう奢を思ふよと、もろこし人のいひけん心地するぞうつゝ  
なき。

初秋の夜を遊ぶ

やどりの御寺の門の柳幾世をか經にけん、空を覆ひ土に垂れて秋立つ此  
頃も知らずやある、月のあかき夜、御堂の簀子に人々涼みとりて置き忘れ  
たる扇の上に、さゝやかなる音あるを手まさぐりして見れば、風の末の一

影も馬  
にあすか  
すべし  
もほし  
もしも  
しき草

葉のまだ青やぎたるなり、これ見給へ、天の下に秋を告ぐるよ、桐の葉なら  
ば音はしてましをと歌ふ、あないぶせ、はやも散りね、宵々月のさはりして、  
木深きは興慶坊の前に夕鴉の宿りなん、この陰には似たらめと云ふ人あ  
り、いでや此陰に清き泉の流れたらばや、影もよしに涼しからめと云ふ、又  
一人がさる川波に此一葉の浮びしを、ふとしも見て、萬里の海原をさへい  
きかひする浮寶は作りしとや、御國のはじめには浮橋とよばせしは、蘆原  
國の水陰艸の一葉にやおぼしよらせ給ひし、それもこれも臙げの神代が  
たりは置きぬべし、只この老いたる枝々に露の玉貫き垂れしと見給ひし  
西の大寺の面影こそなつかしけれ、思ひ出て歌よみて聞せよとて、さすが  
に月の光の臙げなるを、いでかゝげよと筆とる人のたはるゝに誘はれて  
なん。

今はしも一葉の秋に驚かぬ老を友とて散るか柳は、

月照沙

庭もせの清きいさごに影落ちて、しらくし夜の月を見るかな。

露降薨

秋成道文

四三七

秋の夜の更けゆく空に数そひて、露をくだる露の玉ゆら。

虫鳴庭草

秋はまづ草葉がもとに知られけり、露ちる庭の虫の聲々。

松無聲

枝かはす松に聲なき秋の夜に、時のつやみの空に音澄む。

初がりの詞

春霞古今々  
春霞かす  
雁がいに  
し雁がいに  
し雁がいに  
し雁がいに  
霧のなる上  
に秋の

菅の根の長き春日、山鳥のながくしてふ秋の夜も、ひと日ひと夜の名だ  
てにして、過ぎ行く月日はいとなかりけり、春霞かすみていにし雁の聲は、  
耳の底に残りて、きのふかとおもほゆるに、今日は霧のまがひに、木々の紅  
葉を慕ひて落ちくる聲するは、待つ人にしもあらぬものから、いとめづら  
しくなん、遠き境の人をしのび、あるは人の夜寒を思ひやるは、防人が妻の、  
おのがせこが玉章やかけて来つらんと打咏め、寒さも思ひやられてあは  
れなり、又老いの寢覺なぐさむるよすがにもなり、はた涙おとす種となれ  
るも、聞く人の心なるべし。

十六日朝雨大文字を思ふ

書は何の爲ぞや、事をしるして後に傳へ、又遠きに通はず、是を國つ寶とは  
たふとませ給へる也、此比の事よ、都の西の何某といふくす師が東山に出  
て徒弟等召しつれ、大書をかゝれしとぞ、見たる人の語るは、徒弟は一字二  
三十席に過ぎず、師は六十席なりしとぞ、徒弟等衣の袖袴のすそを墨に汚  
し、師は一點一滴をも飛ばせざりしとぞ、奇なり妙なるかな、當世の一人な  
るべし、然れども人の目驚かすのみにて、國つ寶のいさをし無しと人はい  
ふなりけり、文月のけふのこよひ、如意が嶽の高きに里人かねて谷を深め  
し跡とめて、こり柴つみ入れて跡をうづみ、暮るゝを遅しと登りつきて、是  
に火つくれば四隅より始めて燃ゆと見る、猛々と盛んになるを仰ぎ  
觀れば字也、大は豊也、此秋の豊年ならんと神にねぎて、御目慰めたいまつ  
るに、やはじめなる、此字作りしは相國寺の横川和上といひし師なりし由  
なり、或は亡き魂送る火よといひ傳へしはいかならん、鹿苑院どのの壯觀  
に奉りしともいふ人あり、是はしからぬ、奇なり妙なるかな、一寸をだに工

鹿苑院  
足利義政



み煩へるをや、大かた人は弘法の筆也といふ、何事にも此師の御わざに托し奉るよ、此師真言の密術にて、凡ならぬ事ども能く行はせしには、是も托すべきもの也、大師出で給ふとも此字の形の成り整ひしには、目驚かせ給ふべし、四隅の火もえく、て字の形也、又燃えすさびて形亂れたり、其間一刻に足らざるべし、都の内外の老若男女塘に上り立ち、川面に集ひてこれ見る、いつもく飽かぬは筆の妙也、あれよくといふ中に烟のみ靡くがあら名残をしともいふなるべし、是に倣ひて北の山丘のべに物の形なせれど、船岡の船のみそれと見定められて、其餘りは稚あそびのしわざぞかし、是等が中に妙法の字いかにしてと見るが中に消ぬれば、誰も見定め難くいふよ、かゝるこちく、しき字は、横川師たりとも整へ難くて思ひもつかせじ、まして几僧のしわざをや、彼の里人等柴に火つけて我さきにと走りくだりて、今宵の盆のをどり、手打囃し夜すがらなりと聞く、餅酒いひなと積みたゝへたるべし、餓鬼といふ者の是がひま窺ひて、うゝとうめきて盗みくらふらん、目にこそ見ゆべからね、此里の浄土院の圖南和上はいみじき物識にておはせば、逢はゞ問はんとぞ思ふや、けふは朝けより雨降り

いふぞの  
下實の字  
股か

て柴打濕り、里人等も勇みなからん、こはたふとき御方の壯觀と云ふよ、實なる、送火といふぞならん、雨ふらば魂も還り給はじやはと思はぬぞ、世の人大方心なかりけり、庵の軒よりその字のかたへは見ゆれど、今宵はいかで、餘りに降りて十七日の夜になりし事も近き年でありし、さらば一日なとは亡き魂もとままりておはすか、地獄といふ所のたより遠からずて、かくいきかひするには、雨にこめられしとたよりして詫ぶるにや、鬼とて恐しき者もこのことわりは聞き入れたるや、さらば十七日も地獄のいとまあらしむるは雨也、年のよしあしに過ぎたるはうからん、足らずはさはらんものぞ。

十六日の曉より晝ままで雨しめやかに降りたりしが、や、晴れぬるには大の字の形はとまれ、亡き魂こそ雨をたのもし人に思ひしならめとて、此筆は執りし也。(花押)

雪の詞

雪の清きには比ぶものこそなけれ、八月十日餘りの空の濃き花田の色合

世もひ

したるに、月白くさし出て、練の薄物のやうなる雲細く棚引き、風ひやゝかに物皆露がちなる夜は清し、梅の花のきはくしき、水仙は少し曇り氣ながら清らなり、金盞銀臺の名あるやめでたし、若竹に朝露むすびたるも清し、去年の古葉は露もあげねばなん、水晶の片おもひに清水汲み湛へて、李唐桃、何くれの果物浮べ出たるが、かゝよふ燈火に照りかはしつゝ、わざとながら涼しう清げなり、又よき人といふ人の心は、昔も今も君に擧げられ民まつろふを、わがきたなきに思ひ知られてかしこしかし、五十鈴川、みかの原なる泉川、清瀧川の岩こす浪、越前守助廣が帯ものの能く鍛ひたりといふを見侍りしが、清くいみじきを譬ふるに物なしとぞ覺ゆ、このつるぎ千世萬世の後までも、汚れなくてあれかしと惜まるゝなりけり、されど人の爲せしものは猶限ありぬべければ、今日のながめに劣りなんことはた

文化元年二月朔雨雪、遙思故國歌

む月立ちあした霞みて夕されば野邊はかげろふ、袖はへて若菜つみにと宮人のしめしをもとな雨まじり泡雪降りて、大日枝や小日枝も比良も、八

重雲の籠めてしあれば、千鳥鳴く賀茂の川瀬の繼橋の繼ぎてぞふれる、返返の春日の影も曇りあひて幾日なるらん、きさらぎの月はたてども、あしたより霞も立たず、かざろひの夕さりくれば雨まじりはだれ雪ふる、やれ迷ふ衣重ねて寒らにも歎きてしのぶ、故郷の浪速の菅のねもごろに、みつの濱松あを待つと風のと聞ゆ、けふくと思へどもとな手束杖腰にたがねて翌もがと思へどすべな、雨ませにはだれの降りて、白栲に積めば降り消ゆ風ませの雨し怨めし、きさらぎの月立つけふの今宵しも降りつぎて猶いく日なるらん、

反歌

雨に著る難波菅笠ふるされし、あを待つといふ難波菅笠、

八月下旬歸京後淫雨連日復思故國歌

初鴈のまれ人來たる中秋のよひく照らす月影は、年に稀ぞと魂あへる友よびつれて、霰うつあられ松原住の江の濱におり居て忘れ貝家路忘れつ、續麻なす長柄の古江橋こそはかけ絶えぬれど、射干玉の夜霧立ちわた

り、榜ぐ舟のかちのと聞ゆ、歌しぬび言しぬびしつゝ、遊ぶらむ夜比も過ぎぬ、ふる里にあらぬ都も年を経て住みつきぬれば、足引の峯に立つ木のまつ人のありとはなしに、歸るとき三室の山の神杉の過ぎぬといひて、蘆鴨の水に浮寐し、いぬ人の伏見の岸ゆ肩車おひかづかれて、みるめなき醜のしき屋にさゝがにの蛛のい拂ひ、八千矛の神のつかはす劍刃の岑嶺の鼠こよひより古巢を共と、あらし雄も心あれやも打しづもりやすしいしにけり、二十日まり三日の夜中の月影をほのにも見せず、八重雲の立ちかさなりて、降る雨は夜をすがらに、赤根さす晝もしみらに、今日をしもいく日と問へば月ごもる三十日ぞといふ、あはれく我庵ながら難波江の蘆間の泊ひまあらさ管吹き荒らす枕邊は櫂の雫か、あとべにはさゝ波よする庭たづみたざり流るゝぬば玉の夢の浮橋かけ渡し、たどればたゞに昨日までふる里人にあひ見つゝ、語りしまゝの宿にやはあらぬ、故郷の難波もこゝも草枕旅のころもは雨しづくせり。

浄光精舎にてよめる

五月望の頃病ひまありて難波にくだり、浄光精舎にやどりて在るほど、あるじ筆とりてすゝろぎ給へるに、よみける歌の中に、

む月を

わが門のはひりの柳芽をはるの時にしなれば鶯のなく、

山を

里にいで、吹かぬ嵐を山深きいほりにくれば衣さむしも、

塵ひちは心に積めど世のうさをのがれん山のなる時やいつ、

中春

花鳥の春になりゆく如月に、をりく風のさえもするかな、

別れがたき歎きをすれば天飛ぶや鶴の林の陰の露けさ、

野

をりくの便悲しきいほりかな、嵯峨野の原の都近きに、

春のはて

秋成遺文

み山木におひはまじれどかは櫻深き色なる春を見せけり。

河

風ませの雨のとゞろに峯を落つる眞木のながれの岐曾の谷川、  
かち人の弓杖にさぐる渡り瀬に、さゝれ流るゝ關の藤川、

神まつり

卯月たちて君よりぞまづ御ぞかへの伊勢のかん宮使たつなり、

うみ

打寄する駿河の海の白波は、富士のみゆきの影かあらぬか、

鶺鴒川

夏されば狩場の小野の道たえて、夜ごと大井に鶺鴒川たつらし、  
長良川川邊すゝしき里なみに、鶺鴒飼がともの夜舟こぎ出る。

皇都

飛鳥より移りて來れば豊崎の長柄の宮も河洲なりけり。

扇

夕暮は遊ぶ手ごとに空にかかる扇の風のひまなかりける。

秋風の涼しき庭の遣水に扇ながして夕あそびせん、

里

みよし野の里の田面の夕暮に、翅かさねてかりくの聲、

萩

高圓の野萩折りふせ宿りして、初秋の夜を長しとぞ思ふ、

笠

水こゆる眞菅刈りほし小笠ぬふ男をみなが軒のならびに、  
輕の道にいづる市女が目せき笠、絹買ふ人に袖をひかれて、

秋の蟲

庭草の花の洞める此頃は千草の蟲の聲さかりなり、

垣

足引の山田繞らすしゝ垣のこぼれて秋をいく年か經し、

霜

霜深きあしたの野路を立ちくれば、まだ門あけぬ寺も見えけり、

ころも

山藍もてけふはぞ摺れる小忌衣、豊のあかりの年のためしに、

狩

馬なべてし、踏みおとし追ひまどふ山霧深し冬の朝獵、

酒

幾ひさ、歌ひあかせば三輪の殿の朝戸の御酒の神代しおもほゆ、

秋月十章

あしたより雲なき空をたのまれて、月見る家に人のつどへる、

月みればさやけき空を露わけて隈こそありけれ野路の萩原、

墨江の敷津の蟹がいほかりて、去年も今年も月を見るかな、

ものゝふの弓張月の影みれば、引きて放たぬほどにぞありける、

山里に住みそめし夜の月澄みて、秋を深しと思ひこそなれ、

浪よする淀の美豆野の蘆陰に、誰いほしめて月は見るらん、

遅く出てはやも入らぬか秋の月、物思ふひまもあらぬばかりに、

ありし世のうさを寒さにかへて我麻の衣に月をやとせる、

蟲のねの盛の秋の艸叢に、うもるゝ沼も月はすみけり、

雁なきて時雨うちそゞぐ小夜中に濡れぬ色なる月わたる空、

瑞龍山下に庵ずみの時雪の日獨言に

花さかば告げんと言ひし山里の使は來たり馬に鞍おけ、

又興盡きて歸らんといひし人、棹とらせし僕が腹たゞしげに古杙に漕ぎ

のせ石にさしあてゝ幾たびか危し、今は歸らなといへば、をうといふまゝ

に中流に漕ぎ出でゝ、舳より疾くあがりしならん、雪ふらば必ずも湯あみ

にこんといひし、詩歌拙からねど飲みくらひに忘れたりき、おほ寺の庭の

むら松ふかく、竹の聲たえて偃臥たり、園の豆の葉降りも埋まねば、青やぎ

ておかし、ひよ鳥のきゝと鳴くより外は音づれなけれど、釜の湯けき汲み

し谷水の音河に似てさびしからず、昔このあたりに善補といひし法師の

手とり釜一つに粥煮また茶點じて遊ぶと聞しめし、其釜提げ來て茶立て

よと、利休を御使にたてられしに、あな恐し、阿彌陀が峯の瘦法師いかでい

かでと言ひつゝ、釜は庭の石にあてゝ打碎きしとぞ、其釜いま良恩寺とい

ふ寺にかたちとやめたりき、茶といひ歌よむといふも、共にいたづら遊び

ならずもがな源三位はまこと歌よみにておはせし善補はおかしの茶人にてこそありけれ

誰が庵にわが手とらせよ手取釜まろびやすらむ足たゝすして

山村除夜

久方の天なる道の年の内に春は來にけりしかすがに皇孫の御子の遠長き都にはあれど足曳の山邊にをれば時じくの峯の嵐に沫雪は日毎降りけり軒繞るいさゝむら竹さや／＼に松の林は絶え／＼に聲寒けしも立ち並ぶ民草の家にぬこ童呼びたてもせず門たてゝ夜や守り明すおちおきな刀自も子ども居ならびてことほぎす也早苗とり水堰き上げて植ゑし田を雁啼きわたり露霜のさむきあしたに夕闇は暮れまどひつつ刈り入れて年の貢をかしこくも納めまつりて庭もせに身のほど／＼を積みはてて君とかしづき親としもゐやまへるなめに山畑の白たゝむきの大根ほり青草摘みそへ芋の子の妹に子どもに父母にまして取り着すあらたへのあらたなりせば飽くばかり思ひほこらむ貧しきはいかにかせ

誰が庵の誤寫か

父の意か

しにあれどにしかれの誤か

枕かんの誤脱あるべし

まし市人のおきのりわざはならはねばしみ垢つきし古衣解きあらひして張りやりし肩のまよひをそがまゝに打重ね着て山風の荒きを忍び此年を豊年とさへかたりせずしにあれどこん秋は隣の富におのが田の粟生豆生も打靡き垂穂八束穂生ひ茶え刈りて收めむ言穂咲せな

反歌

くる春は雨もさはらで逢阪の關山こえてこゝに到らむ

山寺の佛の御膝枕かん年の一夜も旅寝する我

山邨元旦

瓢形のあめなる道の年の内に立ちにし春は十日あまり過ぎにけらしも珠櫛筒けさ再びの璞の年むかへすも皇孫の神の立てにし人の道なほく守りて大宮の内にも外にもつかへするつかさ／＼は玉敷の御庭に裳曳き袖はへて千秋によほひ萬とせの幡靡かせて言穂咲申したまへりいつのまもふゝめりと見し梅が枝は雪の下より香にほひ聞き初めぬる溪の戸をきのふや出でし打羽吹く深山鶯木づたひて春と鳴くなり心あり

もあらずも知らに、野邊見れば垣根みれば、にこ草のなよび芽ぐめり、山見れば雨雲なびく絶間より、日影うらゝに高照らす今朝は

反歌

足曳の山べにをれば、鶯のまづ我にとて初音きかすも

雨そゝぐけさ鶯の花笠を我にかきなん、老かくるかに

都には又も出でじと思ひなる、世に似ぬ春のけさのしづけさ

文化二年秋葉、小廬投宿瑞龍山下香花院、因以賦焉七十三翁無腸試筆

多福言

此蟹やいづこの蟹ぞ、蘆が散る難波の濱邊、横さらふうみのまゝにはぬば玉の闇に月夜に、村肝の心たらひて、草深き鶉の床と、住むかたも定めざりけり、うとき目は空ざまなれば、久方を常に仰げど、富士の嶺の高きあたりは、石の上布留の高はし、懸けてだに思ひもよらず、都べに難波田舎に、横走り年はへぬれど、濱洲鳥友まどはして、今までも在りのあやしと、人皆が語りにすとふ、足曳の山田もらねど、ふせ庵に雨の漏らねば、天地と思ひひろ

ごり、月雪は窓の光に、花紅葉敷き寝のむしろ、春の鳥さよほとゝぎす、秋の蟲をのへの牡鹿、時々をやつこになして、岩根這ふつたなきことを、言ひほこり人にかたらずで、さき草の我さち人と、身のほとろ思ひたらはし、在りはてんかに。

反歌

蘆蔭のあな憂とも知らで、おのが世を横走りてぞ在りはてんかに、

右對貧窮問答之作

近頃題詠の歌ども

吉野秋

秋風はよひく、寒し、三吉野の吉野の都いく代なりけん、

雁越嶺

あらし山關守するゑし昔より、よるも峯越すかりく、の聲

曠野霧

放ち飼ふ秋の霧原夕こめて、そことも見えす胸嘶ふなり、

小舟運稻

川隈の百束稻を刈りつみて、横の島人小舟漕ぐなり。

庭砌菊

石だゝみいさご敷かせて、秋菊の花見る人を待たずしもあらず。

夕時雨

時雨とて宿ればはるゝ薄雲の名残にさむき冬の夕影。

松林神祠

むら松は生ひかはれども、寄せ返る波ととこよの宮崎の神。

山院

墨染をまだゆるされぬ山寺に、わび泣きしつゝ月も經にけり。

城市

林なし木垂るうゑ木のめも春は、東の市のまづ立ちそむる。

喬松

浪こゆる洲崎の林吹く風に、ひと木千とせの高松の聲。

馬上寒衣

原本題名なし

あはでくる道の長手に、雨衣のぬれとほる夜は駒ぞ蹶く。

釣舟遇雨

島人の田蓑をけふはもたらねば、釣舟かへる沖のむらさめ。

聽雨

よるの雨は何たゝくらん、音たてゝ物思ふ我を慰めぞする。

名節賛

中納言和氣清麻侶

忠言鯁直、涅而不緇、若矯神勅、則豈有今日哉。

あしの浦のきたなまろてふ仇浪を、かけても清き名に流れけり。

參議宮内卿三善清行

言道實以難、革命意見、空爲字紙、而且右相公不納、左相公默乃止已。

かしこしやこりしく岩根踏みこゆる、いさめの道はたえぐゝにして。

八郎源爲朝

そつ彦の眞弓櫂弓折れつきて、いづこの島にはふれ果てけん。



傳云、琉球國尊重舜天王者、勇士走而終于彼土焉。  
七兵衛平景清

天下之爲大器也、力不能奪之、惟復讐最切矣、然以不遂志、而自失明、惡見彼  
威、嗟呼。

手束杖すがりよろほふ、久方の日向ふ國も光見えねば。

靜子

山ゆかば草むす屍、海ゆかばみづく屍ぞ、大君の國の御爲に死なん命を、  
誰いひさきて世にははふらしけん、狡兎は死にて狗は烹られ、高鳥盡き  
て弓は棄に、うたての古言や、いとほしの我君や。

楠公

君が思ふ君にありせば、劔太刀磨ぎし心のかひぞあらまし。

君こそは君を知らざれ、天地の神し知れば知らずともよし。

ほまれある名をば仰ぎて、大方は君が心を知らぬなるべし。

一説、兵家茶話云、公在于世、改名云櫻崎左兵衛、隱身於攝河之國。

是は書くべき事にあられどふとおもひ出て

原本題名  
なし

茶 の 歌

此贊イマダ治定ナラネバ他見ハ教サズ

茶をちやあと呼ぶ事、その由その聲の因る所を知らず、この品酒に次て世  
に愛玩し、詩賦の興和漢ともに盛也、たゞ國風には字音と心得てよむ人な  
し、字音なりとも今はいはでやあらん、たま〜に春の若草とよみたるは  
拙也、我も昔あかでも春の木の芽をつみて烹てといひしは、今思へば拙  
なり、今年の春の試筆に

うは氷春をとちむる谷水をぬるめりといひてけさは汲まなん。

曉にいつも汲む水沸らせて、煎る茶をけさは春の初花。

濁りしと世は遁れねど、谷水に茶を烹て心すますばかりぞ。

酔ふといへば同じ亂をすゝる茶に、しばしも心すみてあらばや。

世の人に苦し溢しと厭はるゝ、餉やなづなにとへられしを。

あめなづな譬へしや何、辛き世を忍ぶは苦き茶にあらしとふ。

澄み濁るはしにあらなといひし人、茶にも酒にも心あらずて。

谷水は此山の最勝院の瀧の末の七八丁を來て、わが垣もとを過ぐる也、一にはこまの瀧といふ、朝毎にとく汲めば塵垢なしといへども、恒に澆水器を備へて清潔をつとむ、烈氣鈍くて甘味を出すは長流の性也、謝康樂の汲流代井といはれしは、此垣下の清きにまされりや、劣れりや、さて此歌どもよしとはあらず、ちやと約りてもし、らべの口に叶ひだにせばやと思ふをいへる也。

字音こはくしくとも、其物の色香の勝れたらばよますやあらん、海棠、芙蓉、水仙、茶梅の類、又菊はからよもぎと云ふ名あしからねど、大かた人字の音にのみよむ、桔梗は蟻の火吹といふ名のうたてくて、きちかうとよむよ連翹のいたち草などよまばよまるべし、芍薬をえびす草といへど、名にも音にもよみたる人なし、鎌倉の大臣の我宿の八重の紅梅咲きにけり、しらべよく承る。

天保歌

天保定爾亦孔之固、俾爾單厚何福不除、俾爾多益以莫不庶。

高知るや天の御陰に、天知るや日の御陰に、うら安に國しらせますいまし君こそは、饒速日神の尊の虚に、觀つ大和島根に大宮をこゝと定めて、かしこねの島のことく、まつろひて、さきくまさきくいやましにあまねかりけり、いまし君こそは。

天保定爾俾爾穀穀罄無不宜、受天百祿降爾遐福、維日不足。

久堅の天ゆ降りて安見し、わご大君は、八洲國うしはき給ひ、味稻に粟生豆生もおひつぎて千秋に榮ゆ、山の幸海のさちまで物さはに獲てぞさぐと足日知らずも。

天保定爾以莫不興、如山如阜、如岡如陵、如川之方至、以莫不增。

仰ぎ觀る天の御陰に、いまし君こそは、しらします國のことく、立ちさかゆ山か峯かも、遠しろき川の流れてみなざらひ、枯れず溢れすみさかりに廣ごりゆくか、大八洲國は。

吉蠲爲饎、是用孝享、禴祠烝嘗、于公先王、君曰卜爾萬壽無疆。

よろしなべうまし大御食はしらげにあかず、大君のみおや祭ると、花の時は花折りたむけ、秋されば木の實をさゝげ、山の幸はにご物あら物、海の幸

は狭もの廣物とりなめて、君がうらへにさを鹿の肩骨抜きて、かた焼きに  
うらへ給へば、いまし御代は千秋萬世かぎり知らずも、

神之弔矣、詒爾多福、民之質矣、日用飲食、群黎百姓、徧爲爾德、

八百よろづ千萬神の手向ぐさは、さかきの枝に取りかけ、百とりの机に置  
きなめ、うづまさに捧ぐ大御食、豊御酒はくろきしろきに薫らせて仕へ給  
へば、天地の神もうべなひ、みおや神もうけひ給ひて國榮ゆらし、民草は直  
き心にたなつ物身もたな知らず、いや日けに運びさゝぐる、あまねしや君  
が恵みの月日なし、至らぬ隈はあらぬ此御代、

如月之恒、如日之升、如南山之壽、不騫不崩、如松柏之茂、無不爾或承、

ゆふづく夜あけ来て見れば、久方の天の鹿兒弓引きみてる影にかもあら  
な、あしびきの峯さしいづる朝日子の豊さかのぼり、みんなみの山の齡に  
高くとふとく、冬知らぬ白かし赤かし、木たる老松いや繁く榮えてあらな、  
遠長く御代はあれこそ、君が齡も、

反歌 九 如

八洲國海原めぐる、近江の海山つらなりて立ちめぐる如、  
塵ひちをいつ積みなして、は山なし高きをかべの遠長きごと、

神並の山のそがひの銚杉の、いや昔むして立ち榮ゆごと、

芽子の花さかりの秋の高野原の、廣き岡べのたひらけき如、

遠しろき山城川のみなまたの、末海に入る見渡しのごと、

あまつ日の西の遠的夕されば、弓張月の立ち向ふごと、

常陸なる影日高見の神の前に、かけし鏡の目むかふが如、

神代よりかけず崩れず、三熊野の山のよはひのいや高き如、

松柏齡あえなも、おく霜にしはし潤みて春にあふ如、

わかきより唐土のふみ読み習はざりしかば、たま／＼披き見ても、その心  
いかなりとも解きうべきにあらねば、葛城や高天の山の嶺の白雲、仰ぎて  
のみよそに見過せしを、此比或人の天保の六章の心を、こゝの言によみて  
聞せよと云ふ親の高き齡をことほぎすと、うからやから親しき友垣に至

るまで廣き所に迎へ、千秋萬代をうたひつゝ、酒つぎ巡らせるに、春風猶寒からんには、父を居させるうしろに立てめぐらせる屏風に書いてよと乞ふ由を、人の言ひ來たれど、心ことわりを知らぬから、固く否みて止みぬる後に、彼の六章いかなる事をかいひしものぞと、人にもとめて借りて見れば、周の始の代の君の聖にてましまするが、御代治め給ひてのよろこびに、いさをありし臣達に宴を賜ふ時、その臣達の君を祝ひて、うたひことほぎせし鹿鳴、伐木、采薇にならべて言あげせられし歌なりとぞ、彼のから事は學ばねば、いかに譬へてたいまつれるともえ聞き知らず、星月夜のあかるきに、松の下途あゆむばかりのたどりして、おふな〜言ひつらねて見しもの、小倉の山に鳴く鹿の、遠々にも聞き知らるまじかる、是ぞよき人のなすまじきいたづら言なりけり、陶淵明といひし人のいへると聞きし、書を讀みてこと〜に解き知らんとする事、吾は求めずとや、是は絃の絶えたる琴をかいなで、其趣を得て遊ばれしといふ一つ心にやあらん、老も今は此人の心廣らなるに擬ひて、六章の章毎にかいなでかい探りつゝ、その趣ばかりを言ひ試みんとするは、猶律呂叶はぬ鳥むしの音鳴よと人聽

くらんには、晝も庵の戸さしこめて、ひとりつゞしり歌は、やとぞ思ふ、かつから事の心は知らるまじければ、こゝのふる言もて神代に近き御代の例どもを思ひよせられたれば、事はたがひ言は叶はずして、相離れ相背きてぞ、風馬牛もいたらぬものになりたる、老いほけて阿彌陀ぶち口やます唱ふるにも似たりかし。

文化三年の冬しはす三日、雪のあかりをたのむ窓のもとにかいしるしぬ。

瑞龍山中隱者七十三歳書

同 解

近江の天津の人の來ん春は、親の六十の齡の祝ひのむしろに、春風まだ寒き比なれば、屏風めぐらせてん、その一ひらに毛詩の天保の六章の心をやまと歌にも文にも書いてよ、今ひとひらには彼の句中の九如のさまを繪にかゝせんと也いと若かりしよりからぶみ讀み習はざりしかば、たまさかに披き見ては、葛城や高間の山の峯の白雲、打仰ぎてのみ過せしかば、此

詩のあり難き心ばへいかで解き得べき。さらばこゝの上つ世の君臣相睦  
 じかりし古事のさまに取りなして、試みにいひ出でしが、はた齊楚のたが  
 ひとかに云ひなしつらめ、陶淵明といふ人の吾は書をよみて、そのつばら  
 かなる事を求めずとぞ、絃の絶えし琴をかいさぐりて、其趣を遊ばれしと  
 いふも此心なるべし。さる高きに倣ふにはあらで、思ふにまかせ書きて贈  
 りしかば、あなや詩の心はこれ説き教ふる師の、世に多くおはせば参りて  
 問はん、こゝのふる言はあふむ告るもえ轉らじものを、いとかしら痛し、い  
 わたり説きてよと、常にいひ習ひつる事は、人も聞き知るべく物せしに、い  
 とあやまりつれ、さらば来たれといふ逢坂山今は關こそ取りやりつれ、彼  
 の人郡に出でくる事の稀々にとや、あす知らぬ老がなけらにも打ちおか  
 じとて、雪曇のひま／＼にあらまし言して書きつけ、ことわりどもの猶え  
 いひえぬ所々は、陶先生の高きに心を置きてやめよかし、治國平天下、成佛  
 道の教の大事と心と、いむべきためしにはあらねば、

高知るや天の御陰、天しるや日の御陰にうら安に國しらせます君こそは、  
 皇國の開造天孫降臨ありしといふ、すべて何事も高天の御恵みを受く

なげら  
 の意かり

といふ事をまづいふ也。瓊々杵尊の日向に降臨ありて、此國を統治あり  
 しを領知の義にて、しるともしらすともいふ也。うら安は心をうらとい  
 ふ古言にて、保定の解にこゝはいふ也。瓊々杵尊の神孫神武より以前に、  
 饒速日の神東遷して中土の大和に來り給ひ、次て神武のこゝに來て、大  
 和の畝火山のかし原といふ地に、帝都を定め給ひし事をいはんとて、饒  
 速日の地を見たて給ひしよりいふは文言のみ。此國は海島なれば大八  
 洲國といふ、さて大小となき洲島の主も服従して、神孫に仕ふるといふ  
 なり。さきくまさきくは、幸福即ち天賜なるをいふ

第二章

久方の自天降りて、吾大君はこゝに安く國しづめます也。古言延約の法  
 あり、自をゆと約していふ、わがといふべきをわごといふ例、歌ふにつき  
 ての格調なり、吾大君といふのみ、うしはきといふは主張の義にて、大八  
 洲國を統治します也。

保食神ウケモチ 五穀を身より成りませしといふ神なり、味稻うましとは美  
 稱なり、粟田アヲ、豆生マメノ、田生タノ、同訓、海の幸山ウミノの幸、山海の獲物なり、足日し

らすもとは、良民の貢調に飽き足らぬ也

第三章

君を天と仰ぎ観るなり、統治の國々の開けて榮ゆくを、山に峯にたとふ也、又遠しろきとは川の一方に見渡さるゝ也、阜岡、陵、皆こゝには、をかによむ、峯もをのへに峯上と書きたるあり、をかのうへといふ義也

第四章

宜しなべはよきにならひて云ふといふ古言也、よろしきに今はつきてといふ、君の爲にいふには、おほみと尊稱し、おほんともいふ、おほんを後には誤りて、君ならぬにもいふは、古義を知らぬ也、食をけ酒をきといふ也、皇國の王道祖先を尊める外に教はなかりし也、教道なかりしかど、君臣親子の禮は自然にありて、國よく治まりし也、西土の教に習ひて纂立せんとする臣も出し也、花を祭る事神代より見ゆ、佛家のみにあらず、山にはにご物あらものといふ、小獸は毛の和らかきをにごといふ、猛獸は毛のこはくしきを荒物といふ、海の狭ものは小魚、廣物は大魚也、卜占の業、龜を焼くは西土に習へる也、上古は鹿の肩骨を焼きて吉凶を問ひ

し事とぞ、古事記に見ゆ、むさし野にうらへ肩やきとよみしも、鹿なるべし

第五章

神に物捧ぐるは上古几案なかりしかば木の枝にゆひつけていくらもせし事也、さか木とは冬青の樹、すべての名なり、今用ふる物一種とするは後也、几案を西土に傳へても猶木にかけしを机代ツクエシといひし也、うづまさは今いふうづだかき也、高く積みはへたる形也、玄酒白酒、くるきしろきといふ、玄酒は西土に見れば水を供するなり、こゝにも水を奉りし事あり、しろきは白酒にて濁酒なり、こして能く澄ませしをすみ酒といふは後なり、うべなひは諾也、うけひたまふも肯にて神慮にかなへる也、良民の身の勞を忘れて、日々に貢調するをたなしらすといふ也、月日なしは即ち如月日といふにて、徳光の至らぬ所なしと云ふ也、如をなすなしと云ひし事古言に多し

第六章

天のかご弓かご矢は神代の製なり、月弦にたとへていふ、日の升るを朝

西土に  
の誤り  
か

彦の豊榮トヨサカ升りてといふ祝辭なり。

九如第一

海國なれば海のめぐれるを、近江は湖水にて山のめぐれる也其比枝、比良、伊吹などの高嶺の立ちめぐりて榮ゆる如くに。

大山は土壤をも積むといふによりて、塵土チリをいつ積みなして、麓アシをはやまといふ、阜は土あつくて石なしとぞ、その長き丘の如くに。

岡は山の背といふ、そがひは背面也、矛杉は喬木の狀を、曾矛ソノコにたとへし也、神なみ山、是は大和の飛鳥の丘なり、所々に同名あり。

秋芽花はぎの花とよむ、萩の字を用ひしは後なり、高野原は奈良の西、秋篠山などのつゞきにて長き丘なり、平遠の高きを原といふ。

山城川今は淀川といふ、山背と書きしは古きなり、されば王制の後は用ひまじきをあやまちし也、水派ミヅハひ

弦月の西に影あるなり、上弦也。  
日高見の神社、常陸なり、陸奥といふはよくも考へぬ也。  
紀は南國に在りて、熊野は高山なり、南山之壽、不驚不崩、上古のまゝなり。

松柏といへどもしばしは霜に凋むなり、されど又はやく春にあふなり、是は周の開國の君の統治の後、功臣に宴を賜ふときに、臣等が頌歌を奉りしといふ、からぶみ能く讀み得ねば、こゝの神武の開國にとりなして、今は試みばかりにいふ也、字を知らねばよみあやまらじとて物せしなり、猶たがふ心ありつべし、老いほげ目なし鳥の跡は見、咎めずともあれな、咎めばかしらを低て其教を承るべし。

瑞龍山下七十餘齋草

俳句

屎ふむやあまりに奥の山櫻

梅咲くや馬の糞道江の南

人の失語は咎めずともあれな

枕にもならうものなり春の水

春の雲ゆく／＼鶴に後れたり

さくら／＼散つて佳人の夢に入る

東風凍を解く日、或人の許より洛の熊叟の詠を告げ来る、我此叟の俳諧天の下に轟くを知れば、時々得てよむに實に當世の作者なり、然るに其句々の麗藻なるや、其文の洒落なるには相似ぬものにて、うちなめて只唐歌を女文字して書いつけたる様したるは、昔蕉窓にゐくぐまりて杜律をうまく讀み、笠きて草鞋はきながら山家を懐にしたる人の一筋の教なるべし、王母が鍋を霞の打つといひ、牡丹を天の一方にといふは、其語勢をまねび出たるものよ、又釣の糸に秋風を悲び、花茨茂き路に古里を思ふは、其意旨をうつしなせるならん、是やかんなの唐歌ともいふべくと、時々人にも語りあひき、今や老去りて終をよくせられしを羨み、且その麗藻を惜みつゝも

かな書の詩人西せり東風吹いて  
雷に落さぬ箸をほとゝぎす  
弟咲に淺黄が咲たかきつばた  
あなかまと青梅盗む衣の音

鳥の音も秘密の山の茂みかな  
草わけて孤村に入るや團扇賣

武庫川にて

鞍かりて蹴上つめたし朝心

住吉の里に宿る

雁啼て菊を垣根のやどりかな

明日は新嘗まつる日なりとて一里打賑へり

祭餅それが夜寒の粥柱

何もく秋詠めなり須磨の里

月は入りぬ彼の朝霧の明石潟

灰小屋を洩るとも頼め秋時雨

見上れば月に聲あり嶺の松

生野の坂路を越えて山の内といふ所に來れば

山畑や蕎麥屋が軒に花薫る

里の名とへば物のへんといふ、あやし何物か世には變れると思ひつ



つ、そこに書付けしを見れば、物の部なりけるを  
○秋山のしただみけりな物のへん

○ 凧かけなる家ども笹葺にていとめづらかなり、冬構すとや此頃ぞ軒  
毎にとりふく

○ 秋風に聲まだ青し笹の庵

○ 山を洗ふ雨に色なし秋の暮

○ 渡る雁聲をから櫓の入江かな

○ 月に遊ぶおのが世はありみなし蟹

○ 淨几焚香のつとめは誰もすなる夕、例の物狂ほしうてやみぬる、いと  
むくつけきなり

○ 梶の葉に硯はづかし墨の糞

○ 月の秋や二百十日の二十日のと

○ 朝顔に島原者の茶の湯かな

○ 枕ふる翌となりけり相すまふ

○ 露時雨加茂の捨火のふすくと

破れ鉦のなき聲に秋の夕かな  
伏見田に友や待つらん月の雁

城崎の私雨

○ わたくしの名に隠れけり初時雨

○ 寒ふる湯ざめの牀の夜もすがら

○ 月や霰その夜の更けて川千鳥

○ 桑は圃に作りて繁く植ゑたれど木枯に散りかひて無得なりけり

○ 桑の葉の是をや人の老といふも

○ 雨いたう寒しとて道の案内する男共の濁りたる物汲みて興じ合へ  
り

○ その濁り漉す物かさう旅頭巾

○ 天の橋立にて椽の實拾ふ男に何の料ぞときけば白につきて餅に作  
り朝夕の物にすといふ

○ 新嘗を神の降らせる木陰かな

伊丹村にて

○米搗も北へ歸るや天つ雁

○笹山には父のゆかり人の生きておはすれば此便に尋ねまほしけれど心にいそがれて

○霜曇り思ふかたから朝日さす

古市の小松といふ女に

○いざとはん是の姉輪の雪の松

○木の下といふ郷よりなま瀬に來る間、高欄だつ物かけ渡していといかめしく作りたる橋を谷の深きに通はせたり

○霜わけん道鵲の橋ならば

○曉や市のなかにも鐘こほる

弟晋明を悲む

○冬枯れてゆかしげもなき都かな

千鳥さへしまふていにし寒さかな

月夜その夜も更けて川千鳥

○小夜ちどり加茂川越る貸蒲團

夜座

○四つに折て戴く小夜の頭巾かな

口切や老が借錢なしはてん

豊太閤を祭る

おほき一つの位豊國の大神のふとまへに、恐れみ謹みつゝ申さく、年は二百とせをわたりたれど、御光なん只この曉のほのにもさし仰がれて、うすゝまり項つきつゝをろがみ奉り侍るいでや御いさをの目覺しかりし御事どもは、筆にするし言に語りつぎて、空蟬の如、人あからさまに知りて侍れば、今更めきたらん、かつはをこがましく、且は恐れあれば、打出づべうも侍らす、しかのみならず、いにし言靈の幸としもいふは、まづ大御言もて事のりわき給へるをはじめに、君をほぎまつり神を祝ひ、臣達の眞心をあはれむ、其が程々につきて、事によせ物にも譬へなしつゝ、文にも歌にも言ひあやなせるよ、この神の御いさをばかりは、事によせてんにいとさく

うすま  
り群り  
集り

いとさく  
いと狭く



打被きて臥しぬ翁早くもこそ寢給ひつれとおどろかし聞ゆ誰ならんと  
見れば難波人梅屋なりこの比おとづれ聞えねばおぼつかなかりつると  
云ふ打笑みて年月の病名残なくはたしつれば喜ばせ奉らんとて参りぬ  
ふるとし硯の水たまはせよと乞ひつるに即御歌くはへて贈られしいと  
かたじけなき

陰くらき神のみたらし湧き返り閉ちては流る岸のうすら氷

思ふに御むすめの立ち走りて下の社に衣をひたし給ふらん都府樓の瓦  
に萬曆の墨すり流し心ゆく遊びしつるを見せ奉らんとてさげ來たる  
といふいと嬉しき事くらき眼にはあした見んいかに老いたるわざも病  
に煩はされては墨や水や石なめらかなりとも頼もし人にはあらじかし  
又酒や何やに助けられしばしかはらかならんには筆は心に叶ふらめそ  
れなんわざのおろそげなるからと人いはいかにたゞ曉おきの心澄め  
るに、ともし火てらせる遊びにもおのが心と打ちすさびたらんこそ誠の  
心やりならめ君がいさぎよきさかも酒といふ浮雲のかゝりてはいかで  
それこそ年月あつしれて惱みしにあらずやよろづのわざもおのがもの

ならば高き山流るゝ水を思ひつゝ、絲の音にあらはれしと云ふにならば  
ばや耳痛くとも後のため聞せ給へ君はたゞ櫻をも足をも清きにすまき  
まくおはすよと云ふれいにかしらを下げ袖打垂れて親と頼みつる陰の  
筑波山よりもと打泣きつゝ聞ゆこゝには酒もくろむぎもとゝのはねば、  
文字の數かぞへて慰めんとて歌一つひねり出せる、

春の野に君が摘みこしにひ草の筆によ花の咲くを見るかな、  
また、

さかしげに何をまじらの啼く音かも山のかひあることにしあらねば、  
猶語らんとするに、いづちいにけん見えすあすのひるま過ぐさで友垣風  
早が許よりその人は廿二日といふ日はかなくなりぬと告げ來たる夢の  
かたりの猶見えつるには、悲しく打泣かれて、

難波江の岸の一木を吹きしをる、あなうめと誰も風をうらみん、

老友秋翁

間齋拜書

此文もと  
題名なし

## 安樂寺上人傳

洛東しゝが谷の住蓮山安樂寺といふ御寺は、いつの代の創場ならん聞きしらず、後鳥羽院の女房松虫鈴虫といふを、帝なつかしう召しまつはせ給ひしに、いついどませ給はりてか、法然上人の法のむしろに参りてより、御宮仕の暇には、朝夕まめやかに念佛せしが、つひに宮中をみそかに逃出て、上人の御弟子となりて、頭おろせりき、帝大に怒らせ給ひ、不律の僧よと惡ませらる、折から叡山より法の敵ぞとて、度々座主に申す、此處に乗りて、座主又朝廷に奏聞せられたり、事問ひ糺すにもあらぬとて、土佐の國に配流せしめ給ひし、二尼は此山に庵結びて、たゞくねぶつして往生を遂げしとぞ、二尼の塚あはれなる石二つ立てり、此寺の住持は越前の國の生れなるが、こゝに住せられて幾とせぞ、無檀の貧寺にてあれば、雨雪も厭はず、京に出て飛錫鳴らし米呼びて、心のどかにすまゐし給へりき、寺はひとり住には山陰ながら廣くて、東は樹蔭生ひ茂り、西は里の中道なり門を入るより御堂に至るまで、さ々れを敷きなべ疊み成しいと清らなり、是は和上の

明暮の心なぐさにて、京に出給ひては、鴨川に石を擇びてとり添へらる、又猫に物くはすとて、京よりのかへり路に、ニシンとかいふ魚のいと臭きを、買ひて、錫にかけて人の見るとも心にかけて給はず、もてかへり給へり、此寺の庭に霧島とかいふつゝじ花いや咲けり、人まにこぞの春さかりを窺ひて、盗人が残さず切りていぬ、和上腹たゞしくて、其日より市町に出で、花のありかは、と尋ねありかれしに、或寺の門にこの花商ふ店あり、この花誰かに買ひしと咎めたれば、しかぐの者にと告ぐ、即ちいきて捕へ、まづ寺にこよとて引立てらる、盗人許させ給へとわびて従ひ行く、さて寺につれ歸りしかど、いかいさいなまん、夕めしくはせて還されしとぞ、又こぞの冬か、この春か、越のふる郷へゆかれしに、白山禪定おぼし立ちて、雪の深きにひとり登らる、今一峰にいたりて、積みし雪の下崩れして、谷へ八町ばかり陥られたり、雪杖はともに落ちて、かたはらに在りしを取らるゝに、左の手は折れたり、いかにせんとのみ、に又峰に登りて拜みはて、下山ありしとぞ、骨繼を迎へて、骨はいくるともとむるに、折れたりしかど、繼ぐべしとぞ、身ごしらへし給ふべしといふ、何の身ごしらへぞ、只今このまゝにといはる

る、醫士さらばとて、左手をつかまへていたくするをも、烟くゆらせて木偶人の如し、もろこしの關羽がためしにもと、人いふなるといふ物語、西福の長老の物語りて聞せ給ひしたとく有難き和尚の今の世にもあんなる。

瑞龍山下 七十五翁書

和上も七十にはなられしとか、

文化五年四月この日しるす。(花押)

### 遠藤氏假山記

山に足を疲らすは高きに目を悦ばしむとてなり、江にたまげなどするは、瀾きに心をすゝしめばやの遊びなりけり、足引の山人も道ある御代には山を出で、まめなる大宮仕へをなし、みるめ刈る蟹の子どもも浦安の時に遇へりとして、市に商物もて運ぶらんには、山や江やいつしか賤が門田の長田狭田なして、はた賢き人の隠れ遊ぶべくもあらずなん、さるは高きに疲らし瀾きに魂消などするは、あやにくなる好き者の遊びにこそ、何がしの手ささびに造れる山を見れば、嶺あり、谷あり、崗や岫や、おのづからなり

出で、洞を遼め瀧を落し、前には江を湛へたれば山の皆うつりて緑の色を深めたり、木を植ゑ石をすゆるにも、こぼれたる土ぐれを借らず、雨を注ぎ波を立つるにも、一ヒの水に足れり、きのふはさゝ波の近江の海を思ひて造り成せば、けふは大木曾や小木曾の峰に改むるぞ、あるじが日々の心すさびに出でたるを、大名持少名彦のくしき二神も、御手を空しくして見そなはずべくこそ、大山つみもわたつみも幾十度こゝにめで通はせ給ふらんとぞ覺ゆ、さるは足を疲らし魂げなどもせで、日々玩ぶ人の羨しさよ、されど山には思ひをのどめ、江には心を澄ますてふ昔の賢き人のためし忘れずも、日々に巧みなせるいたつきを、あやにくのあだ物になす事勿れと云ふ。

### 幽石軒記

白雲挂幽石といふ句の心を

吹き絶ゆる嵐のひまは、峰に立ついはほに雲のかゝりけるかな。

石はたゞに雲の根とさへいへば、共に相離れぬ交りところ云ふべけれこ

れがおひ昇りて空に立ち舞ふかたちを見れば、霞立つ春は、蘆たづの天に横たふよと仰ぎ見られ、夏はあやしき峰を夕毎に作りなし、冬の寒きにも凝りてのみはあらで、霧をさそひ、霞を走らせ、雪かき暮しつゝ降るところ、見れや、晴れゆけば月の光をも洩らして、あはれの夜やと打ちながめらるゝに、猶織き雲のところ、くゞに靡き合ひたるがをかしき、此軒にはこの跡なし物の入り来て、月を慰むるなりけり、比叡の嶺は

外山には霞たなびき、大日枝の高根あらはに冬げしきして、そゝろにもいと寒げにて、

雪きえぬ山は比良のね、近江路の海吹く風や春なかるらし、如意が嶽にはこの山つみのおぼしやらせけん、相國寺の大徳の文字一つを谷峰かけて筆走らせ、ふん月のそのの夜是に光を揚げて、宮も藁屋も仰ぎ望ましむは、世の目ざまし草よな岩倉、花園、賀茂山につゞきて目を流しやれば、愛宕こそ空にかしらを突き入るゝばかりにて、その餘りの山々は九重のとのべの御墻なして、むべも大宮しづもりますべき國原なりけり、黒谷、吉田の丘つゞきは、たこの庭もせの物に、林の中より聳え出し、薨も誰

が爲にとか造りけん、この見ゆるあたりは、いにしへの錦織の郷ぞと、人の教へしには、

露霜のあしたに見れば、山姫の錦は今も織れるなりけり、

四つの時々をかへて、このあるじが心をとりのなる詠めとや云ふべき、さてしも雲心なからんやは、心あればぞ其形を物にはかたどれるなりけり、

寛政十一年の春二月中の九日にかいしるしぬ、

無勝居士

仰觀俯察室記

原文題名なし

曾て是を人に聴く、いにしへ唐虞の君は天地のおのづからにつきて邦をひろめ民を親しみつゝ、只安きに安んじ給へりとや、民を親しむは物を足らしむを教ふるなり、是を教ふるは時を知らしむを事とす、義和をして日月星辰を觀せしめ、四つの時をついでて一とせ三百六十六日三とせにひと度、五とせに二たび閏餘を計りて歳を成す、是を計るに璿璣玉衡を造り

て盈つと虧くるを俯してあきらむる。是なんことわりを窮め知るを致す也。仲康四海に法を施き、胤侯に六師を司らしむ世に當りて、たぞや酒に亂れて職を怠り、民に時を誤らしむるを始に、世々此事の傳へおろそげに成りんては、人々俯して思ひを深めつゝ、仰ぎて計り知らまくする私の思ひかねに過ぐるには、天地のおのづからに違ひて、僅に百とせを待たずして、ことごとくいたづら事と成りくだちぬれば、こゝに旋璣、玉衡、晷竿、漏壺の工みなるも、空しく土城、竹馬のたぐひの世の塵に交りぬとも聞ゆ。唐の時に西洋の僧に法を習ひて、義和がいにしへに立ちかへりしと云ひしも、又次々の世に智數の士の思ひかねに誤りては、再び暗きに入りしを、明の末の代に至りて又西洋の人の來りしに習ひ傳へしより、崇禎の曆事あらたなりしかば、胤征の醉ひ心地はこゝに醒めたりと雖も、うたて世の亂れにさへられて尙致さかりしを、清の代にかはりて康熙の御思深く、歐羅巴の國人を召して觀象臺に試みさせしかば、是を測るうつは物成り整ひて、靈臺儀象志をはじめに曆象淵源上下の編なりしに次で、尙も雍正の御時に精しきをきはめ給ひしかば、いにしへ唐虞の帝業をさへ明めつゝ、國富み

民は所を得て物足り事とゞのへりとや、御國にもこの精しきを習ひ傳へて、今や吾妻の大前に萬の道々の博士を召し擧げらるゝなべに、此義和がいさをしも其人をえらび給ふに當りて、故里人間重富こそ此事をうまく習ひ得て、夜ひる懈らず十五樓上に仰ぎ觀てはこの小堂に下りて、明かにことわりを窮めしかば、知るを致すの名駿河なる高嶺に等しく聞えあげけるを、はた召させ給ひて、此事預るつらに加へさせし辱なさま、翁と交りの淺からぬ故もて、此小堂を呼ぶべき名求めらるゝ、我知らぬ道にはかい探るべきたどりすべくもあらず、易の辭に仰以觀於天文、俯以察於地理といへる古ごとのあとのまゝに、仰觀俯察之室と呼ばゝいかにと、試みに問ふことはすなりけり。

## 吞湖堂記

堂在予天津北陸道口

あしたに山を吐きゆふべは江を呑みて、目も心もはろく、也。國つ物積み運べるは風に追はれてさす方に通ひ、網曳き釣する棹とりく、に磯廻のをちこちをめぐれる、汐ならぬさゝら波のみどり花田の濃き薄きまゝに



浮藻の漂ひ、鴉鳥鷗の浮き沈むは、吳の綾のはとり等が織り縫ふに似たり。比叡、比良の高嶺は雲を收めて風吹きおろさず、三上、鏡の山々は引き散らしたるもろこし紙を風に吹き立てじと、物もて鎮むるにやと見ゆ。沖の島長命寺、水荳の岡、或は高くあるは低く、大けくもちひさくも、はらからの子の居並びて、かたち面ざし同じからず。此海凡そ二十餘里にわたり、廣くもせばくも相向へるに、山つらなりて影を浮べ、濱洲、原野、岸邊に幾里幾萬の民草をかおほし立つらん、かぞへ聞く神の社、古寺、何がしくれがしの大城皆いにしへの跡也。是を枕にして宿りする異日このひの旅寢、又あらんやは、吾こしかたにはおぼしも出でず。中秋二十日の夜の月の世に似ず、早く撃げ出でて影は隈なきにも海面うみづらはさすがに打曇りたるに、黄金しろ金の光を波に躍らせ、限りなきを這ひ渡り、漕ぎ行く夜舟は其中を截つ、飛魚の音に玉ちるさやけさは、静かなる夜のあはれなりけり。もろこしの洞庭湖は寫繪の工みに目を慰むれど、腸を洗ひ心をすやしむるには至らず。こよひ老いを忘れていで物言はんとすれど、たゞ心を壓されて口を守るともなく、閉ぢめられ、筆は冬野の小草摘み取るべくもあらず。觴をあけ茶を啜りて

昔の人云々  
大志の  
むと  
又かへり  
見かへり  
葉十三萬  
天を三  
みささき  
ちかへり  
唐志賀の

共に酔ひごとする、茶や酒や是に誘はるゝは、しばしの雲のまよひなり、仰げば桂の花盛に眼を奪はれ、俯しては輝く影に思ひも漂ひて何をか言はん。此海の荒るゝ時々物語ささく、聞きしかど、まさめのゆたけさには偽ならずとも思ひ出で、何せんに、月こそ同じけれ、浙江の怒れる濤はただに來たるべくもあらず、又昔の人にまたも逢はめやもの歎きは、大津の宮の御爲に亡びし人の子かうま子か、かく故らに見じといひしは、海山のたゝすまひにはあらで、あるまじき都の荒れにしを見て、涙とやめ難くこそあれは也。又かへり見んと愛でし人の飽かぬたゝすまひは我友也。されど大宮づかへみさかりに仕うまつる人の齡と、あす知らぬ翁が同じ心せんや。又ともいはじ、あすの夜ともいはじ、いたく更くるも知らず、旅衣薄しとも思はで、月の中空過ぐるまで、簀子すしに幾たびか這ひ出でては仰ぎ觀る老が目にこそ、夜霧こめ織き雲はかゝりたれ。

唐崎のみそぎのためし罪もなく、秋のこよひの月を見るかな。

右玩月

あからひきて明けゆく空は、いつも同じ匂ひなるを、文かき歌よむ人は春をのみめでたき物にいへりけり。樂獵に駒なめて蓬が原の露けきを分くるもの、ふ秋かけて雨ふらぬ千町田に水やりかねて立ち走る賤の男、霜置き渡し庭火しめれる御神樂に参り仕ふる司の君達、憂けきも樂しきも曙の色は同じければ也。此宿の壁障子のひましらむと見るにぞ、先づ起き出で、戸やり放ちたれば、空も海も濃き鈍色に曇り氣なる中を断ちさきて、しらぐと見ゆる横雲はまだ見ぬ物に覺ゆるは、廣き限りを知られぬ故にこそ、ほの匂ひ出づる紅は色の司にて、染殿の手業にさへ是は習ひうつすとも人のなすべき光かは、やをら織き雲にうつろひて、濃く薄く棚引くほどもあらで、いと大きやかにさし出づる朝日、子は月影よりもけに、静かなる海づらに輝きて花々しくこそ見れ、秋の白雲の歩みとからぬに、鴉のつれ飛びていづち行くらん、山寺の鐘も夕べさびしかりし聲を改め、風の木の葉にまがへる舟の櫂の音は、まだ渡り來ぬ常世の鳥か、此岸陰によするさ々れ浪は、くもり染の色をまじへて目もあや也、山は影に沈み、市町の薨は露にきら／＼しく、何も／＼けざやかなる、ゆふべの月の光にはい

かでかゝらんは、まして黄金打延べたる波の光の清げなるに、老が曇り氣なる目をさへ洗はれて、天の原青海原もはて知らぬまで見さけらるゝは、大ひるめの神の御惠みのかたじけなき也。さて曙の色もゆたけさも春秋のたがひあらんやは、日高くさし昇りては世の塵の立ち居にまみれては、月の眞夜中には賑は、しきが劣りたりな夕影となりて峰に落ち波に沈めるは、あはれとも淋しとも、おのが心々に思ひしめるは、秋風吹き立ち露は玉と置き亂るゝ此頃なればなり。

朝なさな波に洗へと世を経て、紅あせぬあけぼのの雲

右曙色

瑞龍山中納藏主七十三歳書

富士山説

仁者樂山、山其可樂邪、天之作之也、萬物出金石生、大而不動、不齋不崩、寔可以樂哉、夫東方之山、其大無競、富士天下之人仰爲美觀、其高入蒼穹、其徑跨二國、遠望亘于十餘洲、海洋爲標、巍然成嶽、美而靈奇、景行隱不避、積雪常無消、仁

者不爲以樂乎。然良材不殖，金石無采，或振而不靜，千歲之間，地火突發，殃及鄰州，其大者延曆貞觀，其小者承平寶永，史之所記灼然，其嘯也吐煙噴沙，嶺虧土崩，瘞海損人，殆將爲之損價，又嘗被妖僧賣妄，誘俗惹愚，或稱神仙棲遲之靈境，或托富士壽山之好名，詠題既久，摸圖展觀，式燕以樂，雖如可哂也，其凶者變矣，貌者常矣，不取常而可取變邪，不舉大造而可舉小瑕邪，秦楚雖無令聞，也不失爲大國，責之則必至，謂山焚介子，海溺屈子，焉宜乎君子屬於尤物，而以飾國之文，亦猶蕩子掩耳而觀西施，與志士不貪奇觀，不奔時好，自勉積功立大，無移怒於名山，則易所謂自下而人高之也，仁者之所樂於此乎，得而同焉。

### 讀日本春秋

日初上人卓識超世，曾以禪坐之餘暇，涉獵于古今，取舍折衷，臆以易焉，著日本春秋五十卷，恨當時不知行古言之學，只尙附字設說，音訓乖錯，理義不我者尤多矣，或恣割古傳，和羹鹽梅，失其氣味者也，夫西學之道，將以教化治國，皇邦應神之朝，始聽焉，推古以降，遣使通信，留生習學，取以彼彩，施于我素，於是文質彬彬，移風易俗，左儒右佛，政令大行，示威于海外，其日月照々焉，惟夫天道恢然，萬

邦區別，海界嶺隔，舟楫不至，牛馬無及，言語服制，各國有異，取彼此此，何有盡哉，近世稱以古學者，常云書契東來，損害我純素之風，孰國質以不移久邪，儻如此說，則天神地祇，常怒而驅逐之，既神容之君聽焉，士庶何言，唯學古者緊要有窺太古而知國俗已，嗟呼人理之局不可入以天理邪。

### 代太武禪祝壽畫說

武禪太子全居常以畫山水爲樂，未曾及其它也，偶有人畫祝壽畫，則亦畫山水以觀焉，或問子之祝壽也，無視非山水，抑亦有所因乎，子全應之曰：孤陋固亡倫，有所因與否矣，雖然竊思之，天地之間，今古不改其形者，夫惟山水耳，松柏之壽，何南山之比哉，世人類以神僊龜鶴松竹爲祝壽者，流俗之見耳，自古神仙雖莫知其所終，千載之下未聞復出世矣，迺龜鶴松竹動輒不免其橫折也，此吾所以畫山水爲祝壽也，若乃仁智之所樂者，非餘所敢知焉。

### 與上田耕夫畫山水說

畫以山水爲壯觀第一，畫山水與於圖籍也，古者聖人治國平天下，著作書典，加

以圖籍故畫之用以地理爲宗矣然後摸寫聖佛之肖像共書典傳于萬世是亦以畫爲書之羽翼之謂也其餘犬馬雜鬼魅易之說花卉鳥蟲之美惟是玩弄技戲無異女工織絹之文耳獨山水者圖籍之遺踪而縮成天地于繭紙中林木泉石烟霞雨雪丹青濃淡之妙其能逼真則令洞庭西湖在面前不亦壯觀乎友人畊夫頃日以畫山水爲意其餘雖求固辭而止矣與余之寓居相不遠日訪問觀之誠登高不疲足望調莫消魂令心悠然遊于白雲之外老情爽快何事過之哉因以斯言爲贈

### 皇太子厩戶論

後世儒士厩戶爲佞守屋爲忠釋氏又厩戶爲聖守屋爲賊共是妄說非讀史不精各以構私塞正路耳厩戶賢且弱奸臣馬子蔽之擅威弑君立女王朝庭若無人厩戶執政不伐其罪者何也馬子信佛所志相適而且威福不可敵故也馬子佞且大有智略克招人心以厩戶爲儲君買得其心厩戶淫佛誘君臣易風俗終爲彼所絕我後過莫大於此矣守屋殞亡有欲立穴穗穴穗放縱守屋小智王臣不服豈可謂忠誠哉夫以神功后之大勳不踐祚推古有何德登極乎皇極孝讓

二朝殆將絕皇統尋其源則興於厩戶弱馬子佞者也邪神世奧顯不測而僭日神之靈德此朝始立女主奸臣所爲害尤偉哉

### 皇太子大友論

懷風藻云皇太子淡海帝之長子也魁岸奇偉風範弘深眼中精耀顧盼燦燁唐使劉德高見而異曰此皇子風骨不似世間之人寔非此國之分嘗夜夢天中洞啓朱衣老翁捧日而至擊授皇子忽有人從腋底出來使奪將去覺而驚異具語藤原內大臣大臣歎曰恐聖朝萬歲之後有巨猾間黷然臣平生云天道無親惟善是輔願大王勤修懷災異不足憂也臣有女願納後庭以充箕箒之妾遂結婚戚以親愛之斯之凶夢奪將去者誰盡敬君以文帝書東宮恐是作文又云年甫弱冠拜太政大臣總百揆以試之皇子博學多通有文武才幹始親萬機群下畏莫不肅然年二十三立皇太子史漏此事者何夫國史之權輿也推古朝馬子奉勅而撰帝紀國紀等蝦夷滅日投火之船惠尺取餘燼而獻之天智此書蓋壬申之亂滅於大津宮邪今世以舊事紀爲此書者胡說耳然後天武十年詔皇姪川島等合撰史然今不傳元明朝和銅四年詔太安丸合撰古事記斯書也天武所